案山子

2016年夏号

新潟大学文芸部

目次

◆お題作品『時間』
・秋桜　文部　蘭　3
・古から来る風・明日へと吹き続く　白杏　4
・飴と猫と、逆立ちと　三ツ葉　葵　5

◆一般作品
・その信条を　新沢　神菜　6
・鳥は知った　壱　白玉楼　7
・永久の栄寿　十文字　8
・「友達だよね」　chima　9
・温かいモノ　《怒》　荒月　10
・恋って何ですか？　（前編）　哲　11
・義を以って虫を制す　陸也　12
・ドラゴン・メッセンジャー　古井　龍　13
・Ghastly　Triad　文音　憂　14
・猫が眠りにつくところ　加々美翔　15
・ヴァルキュリアの葬列　文月遼、16
・パルティール考古堂業務報告書 Ⅲ　幼夏　17
・深白に溶けゆく浪漫講　Valse des flocons de neige　高天美月　18
・無二　諸木　夕　19
・未来　Puney　Loran　Seapon　20
・ファルスになりきれない礫　松本惇暉　21

お題作品集　お題「時間」

秋桜（文部蘭 ）

秋桜
文部　蘭

　羊の大移動だ。スペインのマドリードでは、毎年秋になると羊の大群が街の中心部を駆け抜け、南部の牧草地へと一気に駆け抜けていくそうだ。マドリードはその移動ルートの途中に位置しているため、そのような現象が見られるのだという。
　俺は大学時代の友人の馬場と久しぶりに会うため、居酒屋に来ていた。様々な他愛のない談議に耽っているうち、どういうルートで今後を生きていくのかという話題になった途端、馬場から羊の大移動の話を聞かされた。
「俺ら人間もさ、その羊たちみたいにルートが決められてたらもっと楽なのになあ」馬場がハイボールを喉に通し、嘆いた。
　俺は焼き鳥を一つ頬張る。「どうしてさ」
「だからさ、あらかじめ自分に一番相応しい生き方が決まってれば、それをこなすだけでいいだろ。でも、現実はそうじゃない。人生の選択肢があまりにも多すぎるだろ？　だから、他人と比較されたり、自分の生き方に自信を持てなかったりする」
　馬場の言うことは一理あった。だが、俺は納得できない。
「お前はそう思ってんのか知らないけど、それはなんか違う気がするぞ。自由に生きることは人間としての権利だ」
　唐揚げが運ばれてきた。香りが鼻腔をくすぐる。
「いいよなあ、お前はさ。大学卒業してからすぐに外資系に就職。その上、結構人望も厚いんだろ？　平々凡々なサラリーマンの俺とは正反対だ」
「そんなんじゃねえよ」
「そうだろが。でもな、俺から見たお前はどこか抜けてる」
　馬場の意外な一言に困惑しつつ、俺は唐揚げを一つ手に取った。揚げたての油分が口の中に染み渡る。
　馬場は続ける。「いいか、お前は昔からそうだけどな、自信ってのを全然持ってないだろ。人目ばっかり気にしてさ」
「お前に言われたくはないけどな」
「そういう自覚、あるんだろ？　いつもは意識の外に追いやってるだけで。たまには何かに挑戦してよ、胸張って自信ってもんをつけてみてもいいんじゃねえか」
「挑戦、って言われてもなあ。具体的には？」
「そんなの知らねえよ。自分でよく考えるんだな」
「なんだよ、それ。……挑戦かあ」
　考えを巡らせていると、馬場が思い出したように一枚のパンフレットを鞄から取り出し、テーブルの上に置いた。
「そういや、この前こんなのもらったんだけど、俺いらねえからお前にやるわ」

そこには『レッツガチ登山！　富士山登頂プロジェクト』とあった。

本当に来てしまった。
標高３７７６メートルの山頂を目指す旅の出発点に俺はいた。涼しい秋風が頬をかすめ、改めて季節感を覚える。
指揮をとる快活な女性が視界に入る。慌ててパンフレットを取り出し、名前を確認する。佐々木さんか、と。
「みなさん！　いよいよこの日がやって来ました。まずは、今回のツアーにご応募いただきありがとうございます。私は、主催者の佐々木といいます。二日間、宜しくお願いします」
俺たちは、最もポピュラーな登山道である「吉田ルート」の登山口にいた。「吉田ルート」は別名「河口湖ルート」とも呼ばれ、救護所があり、山小屋も多いため、初心者には最適なルートの一つとなっています、とパンフレットに書かれているのを確認する。
「今回の登頂の工程は一泊二日です。初日である今日は七合目を目指し、そこで一泊します。翌日はそこから身体を高度に徐々に慣らしつつ、頂上を目指すという比較的余裕を持たせた工程となっています」
佐々木の説明が続いているが、俺の耳にはきちんと入ってこない。極度に緊張しているからだ。なにせ、初めての富士山登頂。山を登ること自体中学生の頃以来であり、頭の中で何度もシミュレーションをしてみるが、具体的なイメージに繋がらない。
佐々木の説明が終わると、俺の視線は佐々木と入れ替わるように前に出てきた初老の男性に注がれる。再びパンフレットを確認すると、どうやらガイドの遠藤さんという人らしい。その遠藤さんの注意喚起の話を聞いている間、俺はリュックサックの重たさが気にかかっていた。
リュックサックの中には、足のくるぶしまでを包むタイプのトレッキングシューズ（予備）、防寒や防風に役立つ上下セパレートタイプの登山用雨具、また冬用のセーターとフリース、頭に装着する懐中電灯（ヘッドランプ）などの登山用具が常備されている。予想していたよりも重量があったため、俺は内心驚く。
居酒屋で馬場に挑戦を促されたあの時、俺は悟っていた。何か大きな物事を成し遂げるには今が丁度いい、と。いや、今しかない、と。このチャンスを逃しでもしようものなら、もう二度と絶好の機会は巡ってこない。そのような考えすら浮かぶほどだった。
大丈夫だ。きっと無事に登頂できる。そう自らに言い聞かせながら、俺はリュックの横ポケットにしまっていた、多数の手紙の入った封筒を取り出し、祈りを込める。
それは妻が出発前に渡してくれた『エールレター』だった。

「はい、コレ。『エールレター』ね」
出発前、妻の由紀子はそう言って、俺に手紙の束が入った封筒を手渡した。
「えーるれたー？」
「そう、『エールレター』。アンタがいきなり富士山に登るって言いだしたからさ、あたしも何

かしなきゃーって思って」由紀子はそう言って、封筒を俺にぐいぐいと押し付ける。
「いや、いいって別に。気持ち悪い」
「ど突くよ、マジで」おっと、いけない。由紀子の表情が一瞬で般若のそれに変わったため、俺は内心たじろぐ。強気の女性には決して白星を付けることができない、という事を結婚後に俺は身をもって知った。攻めるばかりじゃなくて時には退く事も大事だ、と中学時代のバスケ部の監督に言われていたのを咄嗟に思い出す。
　由紀子は封筒を無理やり俺に持たせると、とにかく、と続けた。「途中の休憩ポイントで一枚ずつ読んでよね。そうすれば、やる気をしっかりキープしながら登頂できるはず。私が約束する」
「おっす、サンキュー。でも、珍しいな。由紀子が俺を応援してくれるなんて。何かあったのか？」
　俺がそう尋ねると、由紀子は「ううん、別に」とそっけなく答えた。そして、冷蔵庫からペットボトルを一本取り出し、俺はそれを受け取った。
「これも渡しとくね」ジンジャエールだった。
「何でジンジャエール？」
「エールにかけてみたの。面白いでしょ」
「いや、どうだろうな……」
「冗談だって。そこは素直に笑ってくれればいいのに」由紀子はむっとして、背中を向けてしまった。普段から気を張っている反動なのか、彼女は時折急に寂しそうにうつむく事がある。そんな瞬間には不思議とそっと寄り添いたくなる。しかし、そんなことをすれば、気持ち悪っ、と突け放されるのは目に見えていた。
　俺は気持ちを切り替え、封筒をリュックにしまい、そして背負う。これから俺は富士山に登る。そう何度も頭の中で反芻し、士気を高める。人生において最初で最後かもしれない。この日のために二日間の有休をとり、繰り返しシミュレーションもしておいた。準備は万端だった。
　深呼吸をして息を整え、玄関へと向かう。一歩一歩の足取りが普段と異なっていることに違和感を覚える。そうか、俺は緊張しているのか、と自身を客観視する。そして、靴をはく。この日のために用意しておいた自慢のトレッキングシューズだ。靴紐をきつめに結び、士気を再確認する。俺の挑戦が今はじ……
「何カッコつけてんの」
　辛辣な一言が聞こえた気がしたが、気にせずドアを開けた。

　気温二十一・七℃。俺たちのツアー団体はバスを利用し、吉田ルート五合目に到着していた。ここが登山のスタート地点となるのだ、と気を引き締める。
　目の前には大きなレストハウスがどっしりとその身を構えていたので、思わず圧倒される。その様はまるで、多くの挑戦者たちを優しく包み込むようにも感じられた。
　佐々木の呼びかけが耳に入る。
「みなさん、これから富士山の山頂を目指して登り始めるわけですが、ここで一つ注意です。

現在、私たちは標高２５００メートル辺りにいますので、急に高度が上がった環境に身を置いている、という状況です。そこで、高度に身体を慣らしてから登山を開始できるように、三十分ほどでいいので軽くストレッチをしたり、散歩をしてみる事を推奨します」
　佐々木が言い終えると、ガイドの遠藤がそれとね、としわがれ声を張り上げる。
「みんな、さっきまでバスに乗ってたでしょ。だから、軽く水分が不足してるんだよねえ。そこのレストハウスに色々売ってるから、できるだけたくさん買っていくといいよ」
　遠藤のアドバイスにはとても説得力があった。経験を数多く積み重ねた者だからこそ成せることだな、と勝手に納得する。
　周りのツアー参加者がストレッチや散歩を始める中、俺は興味本位でレストハウスに寄ってみることにした。ハウスの中へ入ると、独特な樹木の香りが鼻呼吸によって体内へと入り込んできた。それに続いて、何やらほのかな甘い香りが漂ってきた。不思議に思い、甘い匂いのする方へ近寄ってみると、バナナなどのフルーツが売られていた。すぐ近くにはいかにも優しそうなおばさんが満面の笑みを俺に向けていた。
「お兄さん、一つどうだい？　糖分は登山には欠かせないよ」
　ふふふっ、と笑みが絶えないおばさんは、コレが一番甘そうだねえ、と最も質の良いバナナを一房選んでくれた。俺は礼を言って、そのバナナを購入する。
　さらにミネラルウォーターとスポーツドリンクを計一リットル程度購入し、その場でも持参したお茶を口に含み、体の調子を整えておいた。
「みなさーん、そろそろ出発しますよー」

　五合目から六合目までの道のりは比較的穏やかな登り具合で、個人的にはウォーミングアップとして最適だと感じていた。頭上には快晴の青空が見え、俺たちは先頭に佐々木、最後尾に遠藤という長蛇の列を作って登り始めていた。俺はちょうどその列の真ん中あたりに位置している。まだ雄大な景色を楽しみながら登れるほど余裕がある、という状態だ。
　登り始めてからおよそ一時間が経ち、最初の休憩ポイントに到着したようだ。その場所は山道のわきであり、他の登山客たちの邪魔にならぬよう、俺たちはスペースを選んで各々腰を下ろした。
　それと同時に、俺は由紀子から預かった『エールレター』を思い出す。リュックから封筒を取り出し、その中から一枚の手紙を取り出し、あぐらをかきながら読み始めた。

『エールレターその一
　　いよいよ富士山登山がスタートしたみたいだね。これからの道のりは気の小さいアンタにとってはとっても長く感じるだろうけど、まあ何とかなるんじゃない？』

　何だ、これは。全く激励されている気分にならない。由紀子らしいと言えば由紀子らしいが、最初の一枚目でこれは……。取

りあえずその点は無視して続きを読む。

『あ、そうそう。あたしたちが付き合い始めた頃にさ、函館に行ったの覚えてる？　たしかあの時はあたしたちが大学を同じ年に卒業して、社会人一年目の忙しい時にわざわざ休日を合わせてたっけ。懐かしいよね。あたしはあの市場が好きだったなあ、函館朝市どんぶり横丁市場。あの賑やかな雰囲気がいいというかさ、何といってもホタテのバター醤油焼きがすっごく美味しくて。アレはいくらでも食べられるなー。
　あとさ、函館山の夜景。あれはすごく綺麗で、その辺の小さな悩みがぜーんぶ吹き飛んじゃうくらい。写真撮る時にアンタが言った事、あたしまだ覚えてるんだよね。いつかは二人で世界三大夜景を制覇しよう、って。あと二つって、香港のビクトリアピークとナポリのポジリボの丘でしょ。ホントに制覇できるのかなあ。死ぬまでには行きたいよね』

一枚目の『エールレター』はここまでだった。読んでいるうち、俺は当時のことを回想していた。函館に行くのは初めてだったので正直どたばたしていたのだが、函館山の夜景は数年経った今でも鮮明に記憶している。トワイライトタイムの無数の明かりはまさに宝石箱のようで幻想的だった。
思い出に耽っていると、そろそろ行きますよーと聞こえてきた。視線を移すと、佐々木がみんなに合図を送っている。俺は封筒をリュックにしまい、すぐに隊列に合流した。

六合目に到着した。山小屋があったので、俺たちの隊はこの場所で昼食を摂ることになった。木製のテーブルと椅子がいくつか並べられているだけのこぢんまりとした簡素な造りだが、それでも疲れた身体を休ませるのには十分だった。俺は事前に由紀子から渡された弁当箱を取り出し、少しずつ口へと運ぶ。
もう少しで食べ終わろうかと思うと、隣にガイドの遠藤が腰を下ろしてきた。一杯のコーヒーを手にしており、俺に富士山は初めて？　と問いかける。
「ええ、まあ。挑戦してみようかな、って思って」俺は卵焼きを掴む箸を止め、遠藤の質問に答えた。
「偉いねえ、まだ若いのに。二十代？」
「はい。といってもアラサーですけど」
「最近の若い子たちはエネルギッシュでいいよねえ。ボクにはもうそれほどの活力はないしなあ。羨ましいよ」
「いえ、そんな。遠藤さんのように年を重ねても富士山に望もうとするのこそ、凄いことです

って」
「そうかい？　そりゃ、嬉しいね」遠藤は声を上げて笑い、コーヒーをすする。
「それより、君さ。この後は気を付けた方がいいよ」
「気を付ける？」
「六合目からは傾斜が急になってくるんだ。それに気温もだいぶ下がる。ここまではＴシャツだったろうけど、この先は冬服で登るのをおすすめするよ」
「防寒が大事なんですね。アドバイスありがとうございます」
「それと、高山病になる人もわずかにいるから、君も気を付けてね」そう言って、遠藤は席を離れていった。

　六合目以降の道のりは遠藤が教えてくれた通り、予想以上に険しい幕開けとなった。雨が降り始め、急に視界が悪くなったのだ。霧がかかったかのような状態となり、百メートル先すら認識できない程だったため、不安が募る。隊列が途切れでもしようものなら、最悪遭難もあり得るのではないか。
　初秋にもかかわらず、頬に触れる風が異様に冷たい。俺は長袖長ズボンという完全防備の姿で登ってはいるが、それでも吹き抜ける風のせいで体感温度はかなり低い。
　さらに雪渓（せっけい）が出現した。足場が突然悪くなり、改めて富士山登頂の過酷さを思い知る。佐々木の呼びかけにより、ここでアイゼンを両足に装着する。俺が持参したアイゼンは十二本爪のタイプで、がっちりと氷面に食い込むものだった。この先は一歩一歩の動きに慎重さが加わる。一度でも足を滑らせようものなら、かなりの傾斜のため、一気に滑落してしまう危険性もあるのだ。その上、視界が悪い。登山環境は最悪だった。
　不意に由紀子の顔が頭に思い浮かぶ。何故だろう、どうしてだろうか。人間は窮地に追い込まれると、ふと身近な人の存在を意識に上らせるものなのか。今、脳内には由紀子とケンカをしている状況が映し出されている。
　彼女は口喧嘩をする時にいつも、自覚なしに鼻の穴を膨らませてしまう癖がある。発言を普段よりも強く放とうとして深く呼吸をするためだろうが、俺は毎回その表情に吹き出してしまう。その度、彼女は決まって「何がおかしいの？　バカでしょ」と俺にきつくあたるのだ。
　ふと、意識を登山に戻し、足元に視線を集中させる。アイゼンの使い方に慣れていないため、覚束ない足取りが続く。思わずため息がこぼれるが、先程の由紀子との口喧嘩が頭をかすめ、思い出し笑いをしてしまう。
「全然……バカじゃねえよ」
　俺は両足に力を込め、アイゼンの爪を強く氷面に食い込ませた。

　厳しい登りが続いたが、それでも何とか七合目に到着した。すっかり日も暮れたようで、見上げると薄暗く紺色の空が広がっていた。。雨は止んだが、その代わりに気温が低下したらしく、鳥肌が止まらない。
　今日の登山はここまでとなり、七合目の山小屋にて一泊することを告げられた。山小屋は百数

十人ほどを収容できるほどの広さで、ストーブの暖気によってかなり温まっており、俺はわずかに安堵を覚える。
　思い出したように、俺は『エールレター』が入っている封筒をリュックから取り出す。そして二枚目を読んでみる。

『エールレターその二
　　どう、調子は？　相変わらず浮かない顔してるんでしょ。
　そんなの分かってんだから。あー、情けない。
　　とまあ、冗談だけどね。それよりさ、アンタがあたしにプロポーズした時のこと、ちゃんと覚えてる？　あたし？　そりゃ覚えてるに決まってるでしょ。なんて言ったって、ホントにカッコ悪かったんだもん』

　俺は当時のことを思い返してみた。あれは俺たちが付き合い始めてしばらく経った頃のことで、地元の小さな遊園地でプロポーズをしたんだ。秋が深まっていて、園内の至る所に落ち葉が散乱していたのを記憶している。

『だって、アンタが十八時ちょうどに園内にイルミネーションが点灯するのに合わせようとしててさあ。メリーゴーラウンドに乗ってたあたしを無理やり下ろして。それであと十秒だ、十秒だって言って。それで、テンカウントしたら、全然イルミネーションが点かなくてね』

　そうだった。あの時は俺の腕時計の秒針が四十秒ほど早まっていたのだ。そのせいで予定よりはかなりカッコ悪くなってしまったが、その後に点灯したタイミングで由紀子に婚約指輪を渡した。指輪を受け取った彼女は「ダサっ」と評していが、その時の涙交じりの笑顔を俺は今でもくっきりと覚えている。

『でも、あの時はホントに嬉しかったんだあ。こんな事書くの、なんか照れくさいけど。
　それから、そのプロポーズの後に遊園地にたくさん咲いてた秋桜の前で記念撮影したよね、懐かしー。あの秋桜、綺麗だったなあ。赤とか白、ピンク、オレンジって、色鮮やかで。あー、思い出したらまた行きたくなっちゃった』

　二枚目はここで終わっていた。俺は当時の秋桜の風景を思い出してみる。
　その様はまさに色鮮やかという言葉がぴったりで、その時の俺はそれらの秋桜に対して、まるで由紀子みたいだなと感じていた。それは心の内側から素直に湧き出た言葉で、普段は強がって笑ったり怒ったりするばかりの彼女だが、それでも時折寂しそうな表情を浮かべる瞬間が不意にやって来るのを俺はよく知っていたからだ。そんなあらゆる面を目にしていくうち、ますます

彼女の魅力に、人間性に、惹かれていった。
　それと同時に当時の俺は彼女を守らなければ、という一種の責務を引き受けることに納得していた。由紀子はひょっとすると他の誰よりも苦しみや悲しみを抱えていて、それを意識の外に追いやろうとするがために、普段から強がっている、そういった人間性なのかもしれない。だとしたら、そのマイナスの波を遮る防波堤になれるのは俺しかいない、とそう思ったのだ。由紀子は決して強くはない、むしろ弱いのだ。だからこそ、俺が彼女を守るしかないのだ、と。
　そして今現在の彼女はきっと、俺のこの気持ちに気づいているはずだ。口には出さないだけで、心の内ではきっと。
　お互いがお互いの支えを必要としていて、意識下でそれにお互いが必死にしがみついてはいるが、それを決して言葉にはしない。それが俺と由紀子の関係だった。
　ところが、今この『エールレター』によって、彼女は俺に対して何かを訴えかけている。それを感じずにはいられなかった。

　翌朝、佐々木の呼びかけにより、俺たちの隊は登山を再開した。七合目から八合目までの道のりは、これまで以上に岩場が急になるらしい。アイゼンの用い方に十分配慮しつつ、登らなくてはならない。また、この段階で標高が３０００メートルを超えるため、高山病にかかるリスクも急激に高まるというのだ。そのため、次の休憩ポイントである八合目「太子館」に至るまではペース配分に注意し、身体を徐々に高度に順応させていくことが大切だ、と俺は何度も確認する。
　呼吸が次第に深くなってきているのを実感する。二酸化炭素と共に疲労を吐き出し、酸素と共に活力を吸い込む。その繰り返しにより、なんとか気力を保ち、頂上へ向けて歩みを進めてみる。
　視界に青い物体が左右にゆらゆらと浮遊しているのが映った。
ぐぐっと目を凝らしてみる。蝶だった。それはまるで南国の広大な海を思わせる青さで、日光に照らされているせいか、やけに眩しく光っていた。俺はそうか、こんな環境にも蝶は生息しているのか、と感慨深く感じる。
　蝶は俺の目の前を悠々と飛び交っていく。その余裕からはまるで「人間は羽が無くて不便ですね」と皮肉を言われているようにも受け取れた。

　八合目「太子館」に到着した。
　俺は喉がからからに乾いていたので、すぐに木製の長椅子に腰を下ろし、水分補給をする。
　すると、隣に体格のいい男性が座ってきた。「だいぶ、疲れてきましたね」と俺に話しかけてくる。
「そうですね。一時間半くらい歩きましたからね」
「ここ、太子館って独特な名前ですよね」
「ええ、ホントにそうですよね」

「私調べてみたんですけど、あの聖徳太子が馬に乗って富士山に登ったっていう記録があるらしいんですけど。その時に休憩した場所というのがここなんですって」
「えっ、そうだったんですか。それは知らなかったな」
　男性は、私も初めて知りましたよ、と屈託のない晴れ晴れとした笑顔で水を飲んだ。
　俺はリュックから次の『エールレター』を取り出した。

『エールレターその三
　もう、だいぶ登ったんじゃない？　ま、アンタのことだからねー、もう限界、とか言ってる可能性もあるかもね。あたしだったら体力あるからそんな風にはならないんだけど』

　くっ、相変わらず下げて書き始めるんだな、と俺は苦虫をかみつぶしたような表情になる。と同時に、富士山をなめてもらっては困るんだが、とツッコミを入れたくもなった。

『あの時もそうだったよね。あたしたちが初めて大喧嘩した時。アンタってレジリエンスが低いというか、なんというか、とにかく打たれ弱いんだよね』

　覚えている。俺と由紀子が初めて大喧嘩をしたあの時。

　結婚して二年半、ようやく共同生活に慣れてきたところで、事件は起きた。
　当時、俺の一番の趣味がサーフィンだった。土日になると、俺は決まって海へ出かけ、大学時代の友人たちとよくサーフィンをして楽しんでいたものだった。
　そんなある日、いつもの通りサーフィンをしていた際、突如俺は大波にさらわれ、身動きが出来なくなってしまった。海流に体の自由を奪われ、次第に沖の方へと流されてしまい、俺はそこで意識を失った。
　気づいた時には、俺は病室のベッドに居た。
「目、覚めた？」由紀子だった。
「お、おう。あれ……俺、あの後は」
「アンタの友達の馬場さんが連絡くれたの。急に溺れたって言うもんだから」
「そっか」
「そっか、じゃないでしょ！　本当に何やってんのよ、アンタは。馬鹿じゃないの」
「そりゃ、すまなかった。まさかあんな浅瀬で溺れるとは思わなかったんだ。馬場にはあとで礼を言っとくから……」
「そういうことじゃないって！」由紀子は俺を一喝し、拳を強く握りしめている。「そうじゃないでしょ……。あたしは、アンタの事を思って言うけど、アンタは自分の命が大事じゃないの？」
　俺は視線を窓に移す。「そりゃあ大事だけどさ」

「そうでしょ」
「だからって何だよ。俺にサーフィンをやめろって言うのかよ」
「当たり前でしょ。この先何度も何度も、今日みたいなことがあるなら、あたし耐えられないよ」
「それは分かってる。けどな、由紀子。俺からサーフィンを取っちまったら仕事しかなくなるんだ。趣味の時間は俺にとって、特別なものなんだ。そんな簡単に切り捨て……」
「だったら何よ！　生き方なんていくらでもあるでしょ！」
「その生き方をなんでお前に決められなきゃいけないんだよ！」
　パンっ、と風船の割れるような音が病室に響く。俺は、由紀子に思い切り頬を叩かれたのだ。
「あたしのこともちゃんと考えてよ！」
　そう言い残して、由紀子は病室を出て行った。

　俺は『エールレター』に意識を戻す。

　『あの時はさー、アンタも頑固でね。結局半年ぐらい、答えがでないままだったんだよね。といっても、最終的にはアンタが折れて、ほっとしたんだけど。つまりさ、アンタはまだまだ弱いの。一人で生きろ、って言われたら絶対四苦八苦するタイプだよね。もっと強いハートを持ってよ、ハートを』

　三枚目の『エールレター』はわりと短かった。だが、その文字数に逆比例して伝わってくるものは大きかった。
　強いハート、か。俺は頭の中でその言葉の意味を無意識に考えていた。確かに、俺は昔から気弱なところがあったが、ひたすらそれを隠し通して生きてきた。しかし、由紀子には何もかもお見通しなのかもしれない。それだけ彼女は俺のことを理解してくれているということだ。
　それなら、何年後でも、何十年後でもいい。永遠に続く歌を探し続けるように、いつか俺は彼女を理解したい。たとえそれが不可能であろうとも、理解しようとする姿勢を崩したくない、と素直にそう思った。

　佐々木の呼びかけにより、登山が再開される。
　俺たちの隊は何事もなく、順調に登りを進め、やがて本八合目を通過する。ここからは富士山本宮浅間大社奥宮の境内地となり、神聖な領域だそうだ。アイゼンを装着した足取りの一歩一歩がどこか重く感じてくるのは、自然なことだった。
　両足の限界が近づいていた。今ここで登山を中断したいという想いさえ頭に浮かぶ。しかし、もう後戻りは出来ない。ここまで来たからにはあきらめるわけにはいかないのだ。強いハートだ、強いハートだと士気を高める。

視界には、頂上が堂々とその身を構えている。今いる場所からすれば十分近いようにも見えるが、案外まだ距離はあるのだった。
「みんなあ、大丈夫かー。きつい人はそこの小屋で休んでけよお。行ける人は佐々木さんに続いてどんどん登ってねえ。さあ、ラストスパートだよ」遠藤が隊列の最後尾から呼びかけているのに気づく。遠藤が指さしたのは、「御来光館」という名の最後の山小屋だった。登山客の何人かが自身の体調を最優先させ、小屋の中へと休憩を取りにいくのが視界に入る。
俺はスポーツドリンクを二、三口、乾ききった喉に通し、登山をそのまま続ける選択をした。足は悲鳴を上げてはいるが、気力はまだ残っている。あと一時間くらいであれば、十分耐えられるはずだという何よりの自負があったからだった。

この富士山登山が終わったら、まず何を食べようか。カツ丼かカレーか、それともラーメンか、いずれにしろがっつりとしたものを胃袋に入れて活力を早急に回復させたい。そういう意味では温泉に行くのもいいかもしれない、とそんな事を考えながら登っていた。
それと同時に、由紀子に一回り強くなった姿を見せられるのではないか、とそんな期待を抱いていた。今回の富士山登頂によって、今後の由紀子の文句や不満が多少なりとも減ってくれるのであれば、俺はそれだけで満足だ。費用対効果を考えれば決して宜しくはないのだが、疲れきっている今の状態ではそのような正論などどうでもよかった。
ようやく九合目の鳥居が見えた。
その鳥居は真っ白で、日光に存分に照らされ、痛いほど眩しかった。思わず目を背け、俺はここまでの道のりを噛みしめるように思い出す。言語化できない、なんとも言えない想いがぐぐっと胸にこみ上げ、目の前の景色が歪んでいく。
だがしかし、その胸の温かさはすぐに消えてしまった。鳥居の周囲に一円玉や五円玉が投げ捨てられているのを目の当たりにしたためだ。この画こそ、「なんとも言えない想い」にふさわしい。ご利益のことしか考えていない、浅はかな行動に怒りを覚える。
なぜそのような事をするのだろうか、と釈然としないまま鳥居をくぐり抜けると、さらに奥に鳥居が見えた。「あそこが頂上ですよー」と呼びかける佐々木と目が合う。
その瞬間、不思議と安堵ではなく寂しさが顔を出してきていた。これでもう、富士山登山が終わってしまうのか。しばらくはこの氷を、土を、岩を踏みしめることもできなくなるのか。現時点の自分には、日本大陸で最も天に近い場所に居るというような感慨などは一切なく、ただただ寂しさだけが募っている。
ついに、頂上の鳥居をくぐり、俺は富士山の天辺を踏んだ。不思議だった。何も感じない。先ほどまでの寂しさも霧散し、頭の中は空っぽになった。じっくりと深呼吸し、辺り一帯を見回す。快晴の青空、カラフルな登山着に身を包む人々、地面が所々むき出しになった氷面。ほんの一瞬ではあるが、自分が一枚のフィルムの静止画の中に身を置いているような錯覚に襲われる。
足の痛みに耐えきれず、その場に腰を下ろす。俺は思い出したように、リュックから最後の『エールレター』を取り出し、読み始める。

『これを読んでるってことは無事に登頂できたんだね。まずはおめでとー。たいへんよくできました（笑）。
　このタイミングで悪いんだけど、伝えておかなきゃならないことがあるの。いつか言おう、って思ってたんだけど……なかなか話を切り出すタイミングが無くって。
　実は、この富士山登山はね、あたしが馬場さんに頼んでアンタに無理やりやらせるようにお願いしたの。どうして、ってアンタは思うだろうから全部書いとくね。
　あたし、ガンが再発したの。高校生の頃にね、胃がんが見つかって、その時は早期発見だったから、手術で治ったんだけど。今回の場合は……全身に転移しちゃってて。もうどうにもならない、あと半年ですね、って宣告されちゃって。
　いつの間にこうなったんだろう。薄々怯えてた自分もいたんだよね。いつか、再発するんじゃないかって。でも、それが今だなんて全然予想できなかった。
　それでね、何でアンタに、』

　そこで読点のすぐ後ろに涙で丸くにじんだ跡があることに、俺は気づいた。これを書いていた時に、思わず泣くのを我慢できなかった由紀子の姿が目に浮かぶ。

『アンタに富士山になんか登らせたかって言うとね、それはね、』

　その続きを読んだ瞬間、俺の両目から涙が流れだした。

『あたし……妊娠したの』

　涙が止まらなかった。突然の嗚咽に、近くにいた登山客が大丈夫ですか、と俺に駆け寄る。

『男の子か、女の子かはまだ分からないんだけど。とにかく、あたしはアンタにもっと強くなってもらいたかった。生まれてくるこの子を一人前の大人になるまで、しっかり支えられるくらいに強くなってほしかったの。だから、富士山を登り切れるぐらいになれば、この子が大きくなった時にアンタが自慢できるかなあって。父さんは富士山を登っちゃうほど強いんだよ、とか言って。
　黙っててごめんなさい。でもね、こういうやり方でしか思いつかなかったの。
　この子が初めての誕生日を迎える頃にはきっと、あたしはもういなくなっちゃってるんだよね。ちゃんと祝ってあげてね。
　それから、この子が寂しくなった時にはこう言ってあげて。お母さんはあなたの事が本当に大好きだったんだよって。
　あたしに出来ることはこれくらい。でも、安心して。きっと大丈夫。慎也なら大丈夫だよ。ずっと応援してる』

最後の『エールレター』はここまでだった。
衝撃で頭の中がぐちゃぐちゃになっていた。由紀子の突然の告白に、気持ちの方が追い付いていない。
俺は今この瞬間、富士山の天辺に立ったこの瞬間、一人の父親になった。ひとつの命を預かった父親となったのだ。その事実を何度も噛みしめ、止まない涙を必死に抑えようとする。
それと同時に、由紀子がこの手紙の最後に慎也と俺を下の名前で呼んでくれたことを受け、別の涙が頬を伝っていく。
結婚してからというもの、由紀子は俺を常にアンタ呼ばわりしていた。俺自身も、そのことを日常だと認識していた。その期間が長かった分、その分、慎也と名前で呼んでくれたことに対し、今まで以上の愛情を感じた。
思い出せば、由紀子と過ごした時間は長いようで短かった。俺は、これまでの道のりの記憶を呼び起こす。
付き合い始めた頃、一緒に眺めた函館の夜景。夜の遊園地での、カッコがつかなかったプロポーズ。その時に見た、色とりどりの秋桜。サーフィンをきっかけに起きた、初めての大喧嘩。
ひとつひとつ挙げれば、きりが無かった。それだけ、由紀子と居た時間は、濃くて、楽しくて、辛くて、けれど幸せだった。
今までの過ごし方に後悔なんてしない。俺はある決意を胸に抱いた。
それは、あと半年の間、できる限り由紀子のそばで共に過ごす、という事だ。一秒でもいい、少しでも長くいられたなら、それでいい。
生まれてくる子には、由紀子の話を聞かせたい。ちゃんと、お母さんという存在を形にしてあげたい。俺にはその責任がある。
だからこそ、今回の登山を計画してくれた由紀子には感謝している。強くなった自分をいつまでも忘れない、そう自分の胸に誓った。
『エールレター』にもう一度目を通す。そこには、新たな涙の跡がにじんでいた。

終

あとがき
どうも、文部蘭といいます。
いやー、今回はだいぶ手こずった。こういうジャンルは初めてで、自分にとっては未知の領域。マジで脳みそが爆発するかと思った。
一応、「時間」という要素もあったので、お題作品の波に乗っからせてもらいました。
ちなみに、これを書く前はおむすびころりんの現代版を出品しようとしてました。今となってはお蔵入り。

古から 来る風・明日へと吹き続く（白杏）

古(いにしえ)から来(きた)る風・明日へと吹き続く

白杏

リバティヒルズ。自由ヶ丘。これは新潟大学の近くにある、私の住んでいるアパートの名である。そこは、言葉通りの意味で小さな丘の上に位置している。住民たちはアパートから一歩出ると日本海を眺めることができる。周りが静かになった時、微かな潮騒が聞こえる；時に楽しいカノンロンド、時に高ぶる魔笛のように私の思いを引き連れ、無意識に夢中になってしまう。

その美しいメロディーを最も楽しめる場所はアパートから六十秒離れの小さき神社――若宮神社である。社殿自体は大きくない上にやや襤褸目に見える。今まで扉が開いたのを見たこともないし、賽銭箱も出されていない。しかし、神社の境内はこの辺りにあるあらゆる公園より広く、ブランコとシーソーも設置されているから、すぐ隣の幼稚園によく利用されている。晴れた日には、幼稚園の先生が子供達を神社で遊ばせたり、松ぼっくりを拾わせたりする。ただし、一日中その時間帯だけ賑わっている。普段はぼっちになった鴉以外、スズメの群れしか採餌のために入らない。

そういえば、野鳥の他にあと物好きが一人、台湾からの留学生、李芸淮、つまり私だ。女っぽい名前だが、確実についている男だ。

一日少なくとも一回、私はこの小神社に参り、賽銭を入れたり鈴を鳴らしたりもせず、実家でご祖先様に挨拶するみたいに、ただ神社に向けてお辞儀するだけ。まぁ、独りよがりの精神的慰安のような行為だ。

妙なことに、誰も参りに来ないが、時々階段の側、石狛犬の足元や、神社の扉の下に細かい賽銭が置かれておき、そのまま数週間である。こんなにも人気がないだから、賽銭箱も出されていないのだろう。神社に引き換え、神社の左から15メートルにある「聖徳太子碑」が賽銭箱を有している。その箱に何回も五円を入れたが、五円玉が地面に落ちた音しか聞こえない。さぞ誰も聖徳太子を拝まないだろう。日本に来る前、神社は台湾の土地公廟(土地神の寺)（里毎に一軒ずつ）と同じように、一月に二回参らないといけないと思っていたのに、二ヶ国の差がありすぎて、日本の神様はお気の毒だな。

毎日の神社参りに加えて、習慣になったことがもう一つある――神社の内側を覗くこと。覗きとは言え、それは銭湯や更衣室を覗くような行動ではなく、ただただちっぽけな期待をもって、この平凡な日常に変化を齎(もたら)す存在が現れるようにと願っている。例えば、幽霊とか。こういう人気のないボロな建物こそ、目に見えない何かで風情を付けるべきであろう。だが、今までこの願いは実現されたことはない。

日本に来てもう三ヶ月ちょっと経ち、元旦から二日過ぎた日。昨日関西から遊んで帰ったばかりなので、身も心も疲れている状態である。旅中で友と喧嘩して、また謝るチャンスを逃したなあと思いつつ、やむをえなく神社で懺悔しようと来た。この教会みたいな神社の使い方はどうも日本の神々に悪いと思うけれど、多神論者である私にとって、神様である以上イエスであ

ろうが、仏陀であろうが、天照（あまてらす）でも同じ御利益があるのだろう
と信じている。
　暖冬のせいか、10日前新潟を出て、今になっても一片の雪も降っていない。降っていないのに寒さで体の震えが止まらない。台湾とそれより北にある日本の気候差を体で知ってしまった。
　何が暖冬だ！
　初詣は明治神宮でしたから、今回は普段通りお辞儀だけにしよう。寒いので懺悔は省こう、考えてみると悪いのは私の方ではないし。
　いつも通り階段を上り、いつも通りお辞儀して、いつも通り神社内部を覗く……
　目が段々内側の暗さに慣れてくると、不意に白い姿を見かけた。それは幽霊ではない事は知っている。
　目が合った。
　それは見た目二十歳前後、真っ黒な長髪を持つ美しい女性である。彼女は帯を解き、薄絹の純白な着物を脱ごうとしているところで動きが止まって、私を見つめている。
「ええと……うん、すみません」
　私は五年以上練習してきた日本語で謝った。そして、何事もなかったかのように向き直し、六十秒ぐらいの帰り道を立った。
　なぜ神社で着替えてんだよ！巫女でもないし！コンビニにはエロ本が目立つ所に置かれているし、そりゃ日本人はエッチだろうけど……しかし神社の様な神聖な場所であんな事をするなんて！台湾の土地公廟であんなマネをやったら……
「うわ、うわあああああ！」
　突然の風が私に絡まり、足も地面から離れて、更に信じがたいのは、どんなにもがいても無駄であることだ。そしてこのまま神社の中まで連れ戻された。
　神社の扉が勢いよく閉まった。私に絡まった風は消え、抵抗もできず床に落とされた。
　この奇妙な現象に対し、私の頭は高速運転を始め、二秒も経たず現状把握ができた。要するに、神社で何かが見たいという願いは叶った。望んでいない形で叶ってしまった。相手は幽霊の類ではなく、神霊のような存在だろう。でないと私のような大した漢を動かせるものか。となると、神であれば神社で着替えるのも一理ある。
　結論、私は更衣中の女神を覗いた。
　彼女は純白な着物を引っ張っていて、涙ぐんだ目で私を睨んでいる。
　ああ、謝罪するしかないか。あの半沢先生のようにやれば間違いはないだろう！
　「この人間の分際で、よくも！」
　「申し訳ありません！奥で神様が着替えてるのを知らなくて！」彼女に口出しして、頭を地面につけ土下座した。
　「な、何故だ？」
　「何故って？どうしました？」予想外の返事で、私の調子は狂ってしまい、彼女を仰ぎ見た。
　「汝は妾が神である事を知っておるのか？」
　「え？そうではありませんか？」

「いや、間違いはないが、普通の者は神と霊を間違う嫌いがあるんであろう？」

「そんなことはないと思います。そんな強い力では霊なわけがないでしょう。それに雰囲気で只者ではないことが分かるでしょう？」

「おおお！汝はよき目の持ち主ではないか！それに首に飾っておる天珠！さぞ信心深いのであろう」

「日本では信仰深いだけで、神が見えるのですか？」っていうか、天珠は仏教のお守りだぞ。これでも信心深いといえる？

「汝！妾の信者になる気はあるか？」彼女はしゃがんで、私の肩を握り、わくわくした様子で問いかけた。

「あの、その、前……見えます……」

「う……」彼女恥ずかしそうに襟を引き締めた。「妾の信者になったら、汝の無礼を許してやってもよいのだぞ。どう？」

「はい……」私は思わず頷いた。

こうして台湾からの留学生と日本の女神が巡り合った。

＊

「遅すぎる、もう何日経ったと思う！」女神は階段に座り、機嫌が悪そうに言った。

「すみません。その日の夜急に熱が出て、医者に診せたらA型インフルエンザですって、寝込んでしまいましたよ」

新学期初日もサボっちゃったし。多分東京に行った時、秋葉原で移されたかな。二度と行かないことにしよう。

「えぇがたいんふるえんざ？それ日本語か？汝日本人であろう？妙な日本語を使っておるな」

「一応日本語については常に褒められていますよ、私に言わせてもらうなら女神様の日本語こそ妙です」

「って？汝出身はどこ？なまりじゃ江戸……いや、高砂国（たかさごこく）のなまりであるな？」

「おお、よく当たりました！これだけで聞き取れましたか？」高砂国の現在の名前は台湾だけどね、江戸は東京かな？

「フンフン、妾は音声に敏感だ。特技であるぞ。そういや、妾はこの前高砂国に行っておったぞ。実に綺麗な島であった。
確かそこの新高山（にいたかやま）は不死山（ふしさん）より高いようだ……」

「新高山ってなに、新潟にある？……ところで、女神様は何の神ですか。日本では八百万の神がいらっしゃいますと……」

「聞いて驚け。妾こそ『風の女神――志那都比売（しなつひめ）』の娘である、毘奈美比売（ひなみひみ）よ」

「娘……」

「ううううう、なぜ汝はつかつかと妾の痛みに触れるんだ。そうよ！ただの娘だから信者がおらぬ！このままじゃ信仰されないで消えてしまうのだ！」

「信仰されてない事で消えるんですか？」神って意外と脆い。

「それはイエスや仏陀の類が勝手に入って信者を奪いやがったせいよ！八百万の神々もう大半なくなってしまった。明日になると妾も消えてしまうのではないかと思うと心配で眠れない。だからこの人気なし神社で体の様子を確認する。そして、汝が現れた」女神の話は一旦中断し、口を尖らして、「汝、ちゃんと責任を取りたまえ」と可愛らしく言った。

「その怪しい言い方はともかく、これから女神様のことをどう呼べばいいですか？このままではほかの女神様のことと勘違いするでしょう」

「なるほど、じゃ毘奈美でよい。汝の名は？」

自分の名前の李芸淮三文字を砂地に書いた。

「ウムウム、李芸淮（すもものげいえ）か。珍名であるな」

「何がスモモのGAY！李芸淮（りーうんわい）ですよ！」

「いやいや、これは芸者の芸だろう？これは淮南子（えなんじ）の淮だろう？どう読んでも芸淮（げいえ）ではないか。汝、教育受けておらんのか？」

「この字は台湾で雲（うん）と同じ発音、この字は現代日本語ではエ
ではなくて、ワイです」私は砂地で読み方をつけた。

「台湾？高砂国なのでは？」

「今の高砂国は台湾と呼ばれています」どれだけ時代遅れなんだよ。

「じゃスモモはどう説明する！」

「李ですよ！リー！」

「これは、日本の苗字じゃなかったのか！」

「じゃぁ！スモモが日本の苗字なんですか！」思いきり突っ込んだ。

「高砂国、いや、台湾は日本の領土ではないか！みんな日本の苗字を持っておるはずだ！」

「それは七十年前の事です。今は日本の苗字を持つ人は私の友人の一族だけです。それもまた数万人の一人です。」

「だが、だが妾は……色々起こったのか……日本は妾が力のない時こんなに沢山の事が起こったのか」

毘奈美は落ち込んだ様子で膝を抱え考え込んだ。女神の落ち込む姿を見て、留学生の私はどうしようもできない。

「ああ～わかった。今は一人だけでも信者を見つけ、八百万の神々の力を蘇らせる事しかあるまい！このままじゃ日本はイエスや仏陀に滅ぼされる！」

なにこのとんでもない発想……突っ込みたいけど、止めとこう。可哀相に。

「李芸淮（すもものげいえ）は、スモモのげいえじゃなかったら、妾はどう呼べ
ばよいのだ？」

「芸淮でいいです。うん・わい」

「うわい？」

「うんわいです！」その子供の喜び声みないな呼び方は何なんだよ。

「うわい！うん、わかった。これからこう呼ばせてもらおう。よろしくね、うわい！」毘奈美は私の手を握って言った。

「よろしく……お願いします。毘奈美さま」女神の輝く笑顔を見たら何も言い返せない。なんと言う可愛らしさだ！

＊

神の目から見れば、七十年の時間は非常に短いかもしれないが、文化、技術的進歩は僅か十年で激変する。時間の流れより時代の変化こそ女神様に衝撃を与えたことだろう。

昔の日本、現在の日本；かつての高砂国、今日の台湾。これについて私と毘奈美さまは色々と語り合った。段々、一緒にいる時間は延び、放課後の夕方だけでは物足りないくらい。一方天気も寒くなり、新潟大学の周辺も雪が積もってきた。

人生の初雪。雪の花がひらひら舞う景色も、分厚い鼠色の雪雲も格別に美しいと感動する。もう二十歳になって、雪に対する憧れは薄くなったつもりだが、案外自分の心は未だに見知らぬ光景に魅せられるとはなぁ。これは雪景色を共に眺める女神のお蔭でしょう。人の心は単に話し相手がいることで温まるとは、これもまた信仰の力なのか？もしそうであれば、私今、聖書に書かれた使徒誰一人よりも自分の神様を敬っている。たとえ彼女は小さな風神でも、私を深く魅了している。

天気が原因で外に長時間いられなくなった。私は勇気を搾り出し、毘奈美さまを自分の住処に誘った。まるで初めて女の子を部屋に誘うような感じ、正直言ってプレッシャーが半端ではない。

だがいつ来ていいのか彼女に伝え忘れた。

こんな風に言うのは別に私が怪しいことをやっているからではない。単純に部屋が散らばっているだけだ。本当だよ！

「うわい～！入るよ～！」

「何！早速今日？待って待って！」

午後で誘ったばかりに、今夜早速来たのか。神ってわがままだね。

パソコンに放送されている動画はさて置き、慌てて散らかっている服をスーツケースにしまい、モップで床を拭く。

「なんと寂しい部屋であろう。箪笥もないのか？」

「このアパートの一階には設置されていなくて、二階にしか……待ってって言いましたよね！」

「妾を待たせる？するもんか。どうせ怪しい事も変な事もしておらんだろう？」

「していませんが、こんな汚い部屋は人に見せるものではないですよ」

「案ずるな。妾は人ではない。神である」

私の目には神ではなく少女の姿が映ってるよ。自分の汚い生活圏を異性に曝す男はいないよ。

『黒より黒く闇より暗き漆黒に我が深紅の混淆を望みたもう……』

私が掃除しいていると同時に、再生されたままの動画が暇中の毘奈美の目を奪った。

「これはなんだ？」

「うん？アニメですよ。『このすば』っていいます。画面の中の魔女はめぐみん、爆裂魔法が得意」

『踊れ踊れ踊れ、我が力の奔流に望むは崩壊なり。並ぶ者なき崩壊なり……』

「ふんん～アニメね～～めぐみんね～～～」
「多くの留学生はアニメを見て日本語を勉強するんですよ、私は六年ぐらいアニメを見てきたから、こんな風に毘奈美さまとお喋りができるようになりました」アニメをなめるな！
『これが人類最大の威力の攻撃手段、これこそが究極の攻撃魔法、エクスプロージョン！』
「おっ、おっ！爆発した！」
「はい？何が？何が爆発しました？」
「黒より黒く闇より暗き漆黒に我が深紅の混淆を望みたもう。覚醒のとき来たれり」
「なっ、大なる神様がアニメの台詞を真似しないでください！」
「無行の歪みとなりて現出せよ！踊れ踊れ踊れ、我が力の奔流……」
「もうやめて！これは皮肉ですか？私に対するお仕置きなんですか？ああ、そうですよ！ヲタクですよ！アーメンよりアニメが好きですよ！」
「これが人類最大の威力の攻撃手段、これこそが究極の攻撃魔法、エクスプロージョン！」
「え？うっ、うわわわあああ！」
女神の爆裂魔法と共に、強烈な旋風が現れ、私の部屋で暴れまくった。机上のプリント、イヤフォン、コップ、スーツケースの中の服、ジャケット、部屋内のあらゆる物何一つも見逃さず、まるで、外で吹き荒れている霰のように舞い上がった。
私の部屋が、爆裂魔法にかけられた。
洗ったばかりの黒い男用パンツは毘奈美さまの頭に落ち、私はスーツケースに潰された。
「あっ……すまぬ……」
毘奈美さまはパンツを頭から取って、畳んでから私の傍に置き、荒れ果てた部屋をそのままに帰ろうとしている。
私は毘奈美さまの裾をぎゅっと握って言った。
「部屋を片付けてください」
「な、汝はこの妾に部屋を片付けさせる気か？えい、ぬかせ！妾は女神であるぞ！」
「知るか！片付けてから帰れ！」
「キイイィィィィ――！」
もがいて立ち上がる私は、目の前の女神が『このすば』のヒロインのようにならないようにと心から願っている。されど、私の願う相手は……
「なぁ、うわい。これから妾の事をひなみんと呼べ」
「いやです」
＊
それから毘奈美さまは毎日私の部屋に通いアニメを見る。今学期が終わった時点で既にここ三年間の作品を見終わっていた。
「なんですか、この電気代は！まさか、私が学校に通っている間ずっと見てるんですか！」私は罵倒しながら電気代の振込み請求書を振り回す。
「うむ！ワンピースは初回から最新回まで見たぞ！」
「……fuck」

「ああ～妾は何度も泣かされたぞ。尾田先生がマジ神である」
いやいや、お前さんが神でしょう。
「汝、もっと教えろ！一日見ていられるものを望む！」
「冗談はやめてください！私の電気代も考えてくださいよ！というか、布教するんでしょう？しないと消えるのでは……」
「妾は汝がおる。少なくとも汝が生きておる間で妾の身の安全は保障されたも同然！」毘奈美さまは胸を叩き、そう言った。
「私の信仰心を返して……」
「まぁ、そう言わないでくれ。ところで汝は妾の信者第一号であるぞ。つまり、汝が布教すべきであろう？あの毎週ちょっかい出してくる、あの～南無妙法蓮華経か何かの連中たち、あれは信者達が布教しておるよな？何ゆえこの妾が自らせんとならんのだ？日本には自ら布教する神などおらぬ！」
「だからこそ八百万の神々の大半が消えてしまうんですよ！」
「なっ何を――！まさに青天の霹靂……」
女神は倒れた。
「そこまで……深刻であるのか……グスグス……」
私は椅子に腰をかけ哀れな女神を見下ろす。
「あの～私だけで布教できると思いますか？イエスですら神の奇跡に頼って布教していたんですよ」
「妾も奇跡を起こしたことぐらい、あっ、あるのだぞ！正しく言うとそれは母上の手助けがあるがゆえの奇跡であるが、それでも正真正銘妾の起こした奇跡なのだ！」
「フンン～言ってみてください」
「大昔、蒙古が二回日本に襲来したことがある。それを妾たち風神の一族の力で撃退したのだ、これは虚言ではない」
「史書には観音のお蔭って書いてありましたけど」
「それは妾の功績だ！観音のではない！彼らは極東の島を守る理由など一つもない！自分の国は自分で守るべきであるのだ、自衛隊もそう、他国の軍隊に任せるなんぞ言語道断！」
「それは……日本人に言ってください。外国人の私に語っても仕方ないでしょう。それに私に布教を頼むってことは外国人に頼ることと同じじゃないですか」
「高砂国は日本の領土であるよ」
「それは七十年前の歴史です！」
「妾にとって汝は外国人なんかではない。汝はずっとここにいるのであろう？」
「……私、今年の8月に帰ります。言いませんでしたか？」
突然毘奈美さまはぴくりとも動かなくなった。
「毘奈美さま？」
私は女神の顔の前で手を振ったが、それでも応答はない。
「ひなみん？ひなみんさま？私、変なこと言いましたっけ？」

「聞いておらんぞ……」毘奈美さまは呟いた。
「なんですか？」
「妾と今まで何度も言葉を交わしたのに、何故その件には一切触れなかった！妾、妾は汝がいつまでも傍にいてくれると信じておったのに！汝は妾の信者ではないか？勝手に拝み、勝手に神から離れるなどあってたまるものか！離れるくらい、最初から妾を見つけるな！」
旋風が巻き起こり、激しい風で目が開けられない。窓がパッと開かれ、その旋風は私の傍を通り抜け、体は床に押し倒された。瞼を開けた後、毘奈美さまの姿はもう遠ざかりなくなった。
全然、返事ができなかった。
私は横になって茫然と窓外からひらりと舞い込んだ粉雪を見つめた。ちっとも動かず、心が冷えていくように感じた。奥歯をきつく噛んだ。泣きたい。でも、泣ける立場ではない。
「どうすればいい……俺はどうすればいいんだ！」
ヤケクソな叫びは女神の耳には入らず、ただの近所迷惑なままで、夕暮れの雪空へと消えていった。
＊
その夜に大雪が降った。その日から雪が積もることはなかった。毘奈美さまも私の家に姿を現してはくれなかった。神社に所も面影すら見かけない。愈々不安を感じ始めた。あの時すぐ追いかけなかったことを今更後悔している。あの日、毘奈美さまに自分がただ一年間だけの留学生である事を知らせなかったことのできない自分が悔しくてたまらない。
たった一年の留学、これを学友や新たな友達に告げると、みんな惜しむ言葉を口に出してくれる。たとえそれは本意ではなくても、私の心をちくちくと痛ませている。いつの間にか期限のことに触れなくなった。今この時間を楽しみたい。趣味のためだけに勉学したい。留学生として大好きな民族といつまでも付き合い続けたい。
「でも、これは不可能なことだ。みんなとスムーズにああ会話する能力もないし、辛気臭いし付き合い悪いし。日本人の建前に対し文句言うばかりか、却って真似してる」
愛用の分厚いコートを着、手袋をつけ、財布と携帯をポケットに。玄関に腰をかけ、靴紐を結ぶ。
「一時の友達、誰かがほしい。そんなもん屁ぐらいよ」そう、屁ぐらいだ。最初の音だけは人に気づかれ、その後誰の心にも留まらない。自分と関係ない人全員屁だ。屁である以上、誰かの心に居場所は造れない。
俺がその屁だ。
靴を履き、鍵をかけて、毘奈美さまと出会った若宮神社へ足を運び、最後の確認をする。毘奈美さまがいないと確認しだい、学校の方へ、目的のない人探しの旅に出た。
雪はほとんど溶けたから、道路は何週間も前よりは歩きやすいが、ほんの数日前に溶けた雪で転んだので、早足で歩けない。たぶんこれが報いというものなのだろう。
北門から校内に入り、順番に行くと工学部、第三食堂、理学部、教育学部、陸上競技場、大学の森、農学部、法学部、図書館、正門、そして、正門から中門へ回りまた校内に入って、第一食堂とコンビニのローソンも見回った。最後西門を出る。また、原信スーパーと蔦屋の辺りにも探

し回ったが、どこにもいない。
　布教といったら人の集まる所がいい。
　毘奈美さまと一緒に行ったところの中で、人が最も多かったところは……新潟駅とLoveLa万代か……
　リバティヒルズから一番近い駅の内野駅で新潟行きのワンマンカーに乗り、30分後新潟駅の改札を出た。冷風が再び私の顔に当たり、それは少し懐かしい気持ちにさせる風だった。春の足が近づいてきたからか、毘奈美さまが近くにいるからかは分からないが、とにかくこの風のお蔭で、心を覆う霧は少々晴れた気がする。
　一回深呼吸して、万代橋へ進む。ここ数日で初めての穏やかな気分だ。空は重苦しい雪雲が消え去り、澄み渡る蒼い晩冬の空が信濃川の水音を活発なCメジャーに感じさせる。ザ・ビートルズのLet It Beが頭に浮かんでくる。
　「そう簡単に彼女を行かせないな」まだこれからも一緒にあちこち回りたい。八月まであと6ヶ月、こんなに時間があるなら佐渡、山形、北海道はもちろん、もう一度関西にも行ける。雪白な姫路城で純白な着物を着ている毘奈美さまと写真を撮りたい。あるいは京都の稲荷神社でこっそり毘奈美さまの鳥居を立てようか。フンフン～♪その時、毘奈美さまはどんな顔をするのかな？ちょっと楽しみだなぁ。
　ふっと、何か懐かしい気配を感じた。私は万代橋の向こう側へふと視線を向けると、毘奈美さまがそこに立っている。
　彼女は頑張って通行人に話しかけているが、私以外の人には彼女の姿は見えない。途方に暮れた彼女の姿を私は愛しく思うが、その真剣な振る舞いは一層話しかけにくくする。迷いに迷った後、私は決めた。
　「あの、すみません。お正月の折、神社参りはなさいますか」私は思い切って通りかかった人に話しかけた。
　「するはするけど……なんですか？」
　「私は台湾からの留学生です。日本の人はいつ神社へ行くのか、そしてどの神様にお参りをするのかお聞きしたいです」
　「これは、なんの質問ですか？うん……すみません。どの神社にどんな神様がいらっしゃるのか、私もよく分かっていません。普段あんまり神社に行かないもので」
　同じ質問を何人にもし、同時に私の知っている日本の神々の名前を教えた。当然毘奈美さまの名前も含めている。これからは神の名を意識しながら神社に行ってほしい。
　しかし、私の妙な行動は多くの日本人に避けられた。言うまでもない。そのかわり、私に気づいてくれたものもいた。
　「汝は何をしに来た？」私がまた人に無視された後、毘奈美さまは私の隣に来て、ぶつぶつと呟いた。「妾を嘲笑いに来たのか？」
　「そんな訳ないでしょう。私、責任を取るって言ってたでしょう？貴女を連れ戻さないとね」今度はLet It Beさせないよ。
　「フン、信者を見つけるまでは帰らん」

「知っています。だから一緒に探しましょう。日本はこんなにも大きいのですよ。台湾の十倍もありますよ！」
「何日も経った……誰も妾のことに気づきもしなかった……」
「私が台湾に戻る前には必ず見つかりますよ！ね？一緒に頑張りましょう？私の代わりはきっといます！」
「……」
「何か言ってくださいよ。毘奈美さまが望んでいなくてもこちらは勝手にやらせてもらいますからね」
「見つかるぬ……」毘奈美は俯いたままで言った。
「そう言わないでください、日本の人口は台湾の六倍、せめて六人は……」
「見つかるぬ！見つからぬものは見つからぬ！汝の代わりなんぞあってはならん！汝は、汝は妾にとって唯一無二の存在であるから！」
一気に心に溜め込んでいた言葉を吐き出し、毘奈美さまは少し息が乱れた。
と同時に、私は息が詰まった。悦びが途端に溢れ、息ができなくなった。
「代わりなんぞ、そう考えてほしくない。汝は、妾の……」
「毘奈美さま、私も、私もあなたと離れ離れが嫌です。ずっと傍にいたいです！」
「……うっ」
「一緒にアニメ見たり旅行したり聖地巡礼したりしたいです！」
「うむ」
「どんな手を使ってでも毘奈美さまを生かせますから、勝手に私から逃げないでください！まも、らせてください……」
「うむ、うむ！もう、勝手に逃げは、しない！」
泣いて叫んで、私は声を嗄らした。そんな嗄れた声に対し、女神は初めて、人間のために涙を流した……

＊

その日以来、私は時間ができれば、毘奈美さまと彼方此方に八百万の神の良さを布教している。道でぶつかった他宗教の宣教師や信者にも布教した（それ以外の時間、全部アニメに没頭している）。
その中で私たちは日本の神々に関することは外国人に話した方が話が進めやすいと分かった。皆日本の伝統が好きで、日本に来たため、あっという間に、この辺りの留学生に一人漏れなく布教した。あるフランスからの黒人は毎日神社へ参ると約束してくれた。ちょっとした努力で報いが得られるのに、なぜ多くの人は自分の伝統と文化のためにその努力を怠るのだろうか？

＊

気候は温かくなり、桜が咲き誇った。春休みの間、親戚からの招待をうけ、東京へ遊びに行った。毘奈美さまも一緒に。東京に着いてすぐ、女神につれられ秋葉原に直行した。メイド喫茶もガンダム喫茶にも入らされた。ほかの人たちは毘奈美さまの姿が見えないため、私一人メイドちゃんとゲームをしているように見える。周りの視線が痛い、甚だしい辱めを受けた。二度と秋葉原

に行かないと決めたのに、まぁ女神様の笑顔が見られるだけで十分行き甲斐がある。しかしできれば、アニメキャラは拝まないでほしい。
　春休みが終わり、新学期に入った。椿が咲いた。次いでは藤、牡丹、菖蒲、入梅に梅雨明け、朝顔もぽつぽつと咲き始め、夏が来た。
　これもまた、帰国の日が迫っていることを意味する。
　「わずか半年で、多くの場所に行ったものだな」
　「ええ、速いですね、時間が過ぎるのは。もうすぐ期末テストですか～」
　毘奈美は相槌を打ち、沈黙に落ちた。毘奈美さまが風神であるお蔭で、夏場にいても冷房を付けなくても過ごせる。お互いの背中に寄せ合い、部屋の床に座ってモンスターハンタークロスで遊んでいる。これは自分と弟にプレゼントするN3DSだが、今はすっかり毘奈美さまの専用機になった。
　「汝、勉学はしなくてもよいのじゃ？」
　「今更もう遅いですよ、どうせその単位は持ち帰りできませんし。あっ、尻尾が切れた」
　「妾が落とし穴を設置する」
　数秒後、ミッションクリアのBGMが流された。ゲームデータをセーブして、ゲームをしまった。
　「汝が帰ったら、モンハンもやれないな……」毘奈美は虚しそうに言った。
　「それは一応弟に送る大学祝いですから」
　「何か妾に残してくれんかな？ゲームであらずとも……」
　「私の財布も心配してくださいよ。ほぼ毘奈美さまに使っちゃいましたよ」毘奈美さまと色々な所に旅（聖なる巡礼）をして、奨学金も底が見えてくる。正直言って、あのアニメの聖地は実際なんにもないじゃないか。観光にはならないよ。
　「将来妾の専属神社を建てたら、賽銭は全て汝のものにするから、今は許してくれ」
　「その神社の建設って、まさかとは思いますが……私の仕事ですか？」
　「う～ん、さぁね～♪」
　「そう言えば、台中の台中公園に昔鳥居がありました。 今度、再び立て直すそうです」
　「であれば！」毘奈美は顔をこっちへ向けた。「であれば妾の分霊も連れていくがよい！そうすればあの神社は妾の物になる！専属神社があれば、台湾へも直通できるのであろう！」
　「おお！いい閃きですね。じゃ、何を分霊の器にします？」
　「めぐみんのフィギュア？」
　「嫌です」……ってオイオイ、そんな明らかに落ち込んだ顔をしないでくださいよ。
　「シャナは？アスナは？」
　「アニメのヒロインのフィギュアでないと駄目なんですか？私が買うことになりますよ。そんな哀れを誘う眼差しで見ないでください。買ってしまいますから」
　「う～ん……なら、汝が首に飾っておる天珠で作る」
　「これでいいのですか？十年も身につけていますよ。ヒビも入っていますよ？」
　「それがいいのだ！しかも妾が作るお守り第一作であるぞ。当然第一号信者に与えるべきであ

ろう。妾に守らせてくれ」
「毘奈美さま……」
あぁ、そうか。感動という感情はこんなにも人の心を痛ませるのか。苦しい。息も詰まる。少し涙に咽ぶ感じ。
嬉しい――ありがとう、私の女神。
いつも身から離すことのない天珠を大人しく毘奈美さまに渡した。
「妾の初めての分霊作りであるから、邪魔しないでくれ！今日一日部屋に帰るな！」天珠を受け取った彼女は私を部屋から追い出した。
当たり前のように私を追い出された。
天珠を外すと、ちょっと首が軽くなったように感じる……
当夜帰宅すると、毘奈美さまは部屋の真ん中に正座して私を持っていた。
「もうできましたか、毘奈美さま？」
「汝、妾の前に座りたまえ」
「……はい」私は毘奈美さまの前に座り、彼女と顔を合わせた。
毘奈美さまは長い袖から私の天珠を取り出し、頭を下げろと目で指示をした。そして、そっとかけてくれた。
馴染んだ重さに一つの温もりが増え、なにか穏やかで安らぐ気分になった。
「どうだ？変な感じがする？」毘奈美は不安そうに聞いた。
「変な感じはしません。なんだか、とても……」
「しないか、なら、よかった……」
――え？
毘奈美さまは糸が千切れた操り人形のように、力が抜けて、私の胸に倒れこんだ。
「毘奈美さま！毘奈美さま！ねぇ！」
「妾は、疲れた。しばらく、寝かせてくれ……」話が絶え、毘奈美さまは私の懐で眠り込んだ。
本当にヒヤッとした。神が分霊を作るのはこんなにも大変なことだったのか。
シャワーを浴びてから、私はベッドの外側に伏せて、分霊の器から伝わってきた温もりを感じながら、眠る毘奈美さまの鼻息の音に眠り落ちた。その夜、透き通る夢を見た気がする。白鳩と蒲公英（たんぽぽ）の種がふわふわと風に乗り漂って、世界中は輝きの中に、そして、毘奈美さまは……

＊

八月中旬。期末テスト後の第二週。そして、リバティヒルズの退寮日の8月19日である。毎年同じこの日である。
最近毘奈美さまは毎日私の部屋に通い、私が眠りについた後に帰り、朝になるとまた起こしにやってくる。もはや新婚妻より私の世話をしている。もしかしたら、私は幸せすぎているのではないだろうか？
しかし幸せの果ては見えてくる。
今夜の夜行バスで東京へ向かう。明日のこの時間には既に台湾にいるだろう。今毘奈美さまは私

の隣で一緒にバスを待っている。私たちはたあいもない話をしながら、最後の夜を過ごしている。

「ところで、毘奈美さまの家はどこですか？」

「うん？妾は親の屋敷に住んでおる。神は神社を潜れば高天原に着けるのだ」

「ニートですか……」

「こら、アニメを山ほど見たから、ニートという言葉の意味ぐらいは知っておるぞ。人聞きの悪い言い方は止せ」

適当に謝ると話題も切れた。お互い言いたい事がある。しかし二人はどう告げるか分からないまま、数分が過ぎた。

「また……会えますか？突然消えたりしませんよね？」私は勇気を出して彼女に聞いた。

「また会えるのだ。必ずや。汝はこんなにも布教してくれたであろう。もう消えたくても消えないことあるまいぞ」毘奈美さまは私の前髪を撫で回して、やんわりと言った。「蛍夜(ほたるよ)に葉桜(はざくらみ)見えぬ惜(お)しみつつ散(ち)りぬ花香(はなが)に来(こん)む年待(としま)たむ。葉桜ですら見えなくなった。今更桜を惜しんでも間に合わん。なに、悲しむ事なかろう。次の宴を待つまでだ」

「風光(かぜひか)る雁帰(かりかえ)りつき手(て)を振(ふ)ろう再(ふたた)び逢(あ)う日霜枯(ひしもが)れ時(どき)に。う～ん、ちょっとセンスが悪いですかね」私は自嘲した。

「自分を故郷に帰る雁と喩えたのか。留学生にしてはなかなかいい歌であるな。つまり、再会は次の留学とのことか」

「いいえ、次は就職です。しばらく待たせますけどね」

「……それは、定住ということ？」

私は返事をしなかった。然れどこれが肯定を意味していると毘奈美さまは悟ってくれた。

「何年も待たせるかもしれません。台中公園の鳥居も既に立て直った可能性もあります。とにかく、毘奈美さまの神社を建ててあげることを目標にして頑張ります」

「うむ！うむ！妾は待つ！次の時代まででも構わん！」

「そう長くは待たせませんよ。でも、もし、待つのが辛くなった時に……」私は毘奈美さまの後ろに移動し、ポケットから銀色の羽根型ペンダントを取り出して、彼女の首にかけた。

「これは、いつ……」

「毘奈美さまが分霊を作ってくれているときに、街で素敵なものを見つけて買いました。思ったとおり似合っていますよ」

毘奈美さまは私の襟を掴み、涙をぽろぽろと零した。抑えきれない泣き声はやがて、言葉が口にぶつかり、ごちゃごちゃになってしまった。しかし、彼女は必死に私に何かを伝えようとしている。私はただ、それを聞いている。バスが来るまで……

＊

神無月。つまり日本の十月。生き残った八百万の神々は往年の通り、出雲で集まるのだろう。毘奈美さまもそこにいるはずだ。

私とういと、今、台中公園で鳥居の再建式を観ている。そこで鳥居だけでは神社とは言えないことに気づいた。この公園は毘奈美さまの領地にならないな。個人出資しかないか。

別れて二ヶ月。毘奈美さまがいないことからできた心の穴を埋めるために毎日卒論に張り切っている。鳥居の近くで小休憩をし、携帯を開いて毘奈美さまとの写真を見ている。他人から見れば、この写真たちは全て私だけ写した自撮り写真に見えるだろう。これでいいんだ。私の思い出を他人と分かち合う筋がない。私の思いは私が敬う女神だけに捧げる。

そう、私の敬愛する女神に……私の愛する女性に……

「会いたい、本当に、会いたい……毘奈美さまに……もういちど、会わせて……」毘奈美さまの分霊が宿っている天珠を握り締め、泣き顔を隠そうと俯きになる。しかし、口を塞いでも声は抑えきれない。

この時、涼しい微風（そよかぜ）が優しく私の頬を撫でて、私の涙を止めた。掌の分霊から懐かしい気配が伝わってきて、まるで毘奈美さまが何かを囁いているようだ。私は思わず掌の中の分霊に口付けをしようとした。

すると突然、優しい両手が私の顔を包み込み、私の唇を奪った。

「毘奈美……さま……？」

「妾は、時代一つ待っていられないのだ……わるいか？」

後書

なるべくライトノベル風に書きました。

初めて日本語で物語を書きました。そして、こういう短編小説も初めてです。書きたいもの全てを15ページに詰め込むのが無理だと今分かりました。

色々な人（留学生）に取材しました。内容の一部ではわりと客観的です。不機嫌になるところがあったら、~~それは事実で反省する所かもしれませんよ~~すみません。

最後、この物語はフィクションです。登場する人物・団体・名称等は架空であり、実在のものとは関係ありません。読んでいただき、ありがとうございました。

飴と猫と、逆立ちと（三ツ葉葵）

飴と猫と、逆立ちと
三ツ葉　葵

　幼い頃、僕は黒衣の勇者と約束をした。必ず助け出す、とそんなことを言われた気がする。その後、世界中に魔物たちの目がぎらつき、みんながみんな、新しいルールに従わないと、と怯えていた。みんなが「正しい」行いを強いられる世界に、僕は、瞳を濁らせていった。
　勇者は、助けには来てくれなかった。

＊

「……またか、今月に入って、何度目だ？」
　青年は肩を落とし、けたたましく鳴るサイレンを黙らせるために番号のついたボタンを押した。ボタンを押すために立ち上がっていた青年が、再び椅子に腰かけるまでには監視室は静かになり、「A-112」と書かれたモニターの赤い警告灯が消える。一応の警戒のために、青年は椅子に深く座りながら、モニターを注視する。
　一瞬の後、そのモニターに映る白い煙が晴れると、一人の被管理者（ナンバー）がオフィス机に座ってうなだれている様子が映し出されていた。
　男の傍らには紅茶飴の包み紙と、三毛猫。
「やっぱり、飴と、猫かぁ」
　無数のモニターの前、青年は足を組んで考え事をはじめた。

＊

　パノプティコン中央塔での青年の仕事は、分割管理棟の各部屋をモニターで確認し、万が一、異常を知らせる警告灯がつくようなことがあれば、その部屋の番号のボタンを押して、精神安定薬を服用させる、という簡単なものである。
　しかし、ここ数か月のうちにその「万が一」が何度も、番号を違えて起きていた。簡単な仕事であるが、こうも異常が続くと、立ったり座ったりはともかくとして、ここの異常警告の装置が壊れているのではないかと、青年はうんざりしていた。このことに関して、数日前、上層機関にファックスを送った。しかし返信には、
「ナンバーのコウドウにケイカイされたし。ケイコクソウチにイジョウはない」
　――これ以上の詮索はよせ、という圧力を感じるような機械的な文字。後は、仕事に取り掛かるときの心がけ云々という、決まり文句が書いてあるだけであった。
　この時点で、普通の職員なら処分を恐れて、就労規則通りに、従順に働きに戻るだろうが、悲しいかな青年は、若者特有の情熱を持て余しており、この事態の調査に乗り出してしまうのだった。
　正午の鐘が鳴り、青年はいつものサンドウィッチを頬張る。キュウリとチーズとハム。パンにはさんであるお決まりの具をいつもより多く咀嚼してから飲み込んだ。難しい顔をしながら、青年はモニター越しに新しい非管理者の搬入を見守る。
　いつもなら、青年がサンドウィッチを食べ終わる頃には搬入は終わっているはずだが、今日は何

らかのトラブルがあったらしく、未だに今日搬入される部屋の番号が書いてあるモニターは砂嵐のままであった。
　少しして、モニターに映像が出る。黒いボロ布を身に着けた中年の男性が部屋に入ったところだった。顔にはなぜか今しがた殴られたかのような青痣が頬にあったが、しかし、何事もなかったかのように笑みをたたえるその表情からは、平気を通り越して、優雅ささえ感じられた。

　それから一時間、男性は嗜好品の紅茶を欲したり、猫を注文したりなどしていたが、注文の品がすぐに来ないと知ると、優雅に昼寝などしていた。
「……自由人気取りかよ」
　時代錯誤だ、と一向に室内労働に取りかからない男性の姿に、青年は失笑していた。しかし、何の迷いもなく自由人が支給要請した物品には、今回の手がかりである、猫が注文されていたことに関しては、青年の興味をそそった。さらに、長い間ここで働いていて、紅茶を頼むと紅茶飴で代用されることも知っていたので、青年の興味はことさらだった。
　もし、自由人が紅茶飴のことまで知っていて注文したとしたら、と青年は椅子に座って長考に耽っていた。

　三十分ほど後、自由人の部屋に猫と紅茶飴が届いた。これから何を起こすのかと、青年はモニターを見張る。自由人は迷いなく紅茶飴を口に含み、猫を腕に抱いた。そして、片手で逆立ちをし、
――ゴッ
　頭から床に激突していた。
　警告灯が光り、サイレンが、鳴った。

＊

　猫は驚いて自由人から距離をとっていた。青年は警告灯を止め、溜息を吐く。自由人の、恐らく何の意味もないであろうその行動に、注意深くモニターにかじりついていた自分がバカバカしくなったのだろう。青年は糸が切れたように椅子に深く腰掛け、多数あるモニターの監視に戻った。
「畜生、結局分からず仕舞いかよ」
　青年は、無意識にポケットの中に手を突っ込み、中にあった紅茶飴を口に放り込んでいた。
　自由人はその後、何かに憑りつかれたように、何時間かに一回飴を舐めては猫を抱き、逆立ちになって頭を強打する行為を繰り返した。その行動による変化は特になく、その度に自由人の表情が曇っていくばかりか、心なしか老けて見えるようになっていくだけであった。
　逆に、大きく変化したことがある。異常を知らせる警告が、自由人の部屋以外から鳴らなくなったことだ。自由人が来てからというもの、毎日のように警告灯がつくのは自由人のモニターだけ。ここまで頻繁に起こるようになると、青年には、今までの異常警告さえ、全て自由人のものに思えてくるほどであった。

＊

　なぜだろうか、青年は自由人の執念に恐怖を覚えながらも、いつしかその行為に興味を持ち、や

ってみたいという意志を持つようになっていた。無益な行為を毎日繰り返す自由人に、何かのシンパシーを覚えたのかもしれないが、とにかく自分もやってみようという気持ちが先に立っていた。
　そしてある日、青年は黒猫を抱いて、ポケットから紅茶飴を取り出し、口に放り込んでいた。机の上には昼に食べ残したサンドウィッチがポツンとあるだけ。青年は周りに危険なものが無いことを確認すると、一度深く息を吸い込んで、勢いよく片手で逆立ちをした。
　――刹那、時間が止まったような感覚。そして、青年は背中から床に叩きつけられていた。
　青年の口が何かを呟いて、動かなくなった。

＊

　何かを忘れてしまった日、僕は黒衣の勇者と約束をした。
「勇者を信じる代わりに、必ず助けに来てよ」
　勇者は大きく頷くと
「ああ、必ず」
　と豪快に笑った。
　黒衣を翻して、勇者は世界を救う旅とやらに出かけていってしまった。それから、少年の暮らし向きは良くなっていったものの、勇者が悪者をやっつけたという評判も聞かないまま、十数年が経った。

　政府は、犯罪や倫理にもとる行動を規制し、より良い社会を作るために、といって全国民を監視するシステムを構築した。監視の目の存在は大きく、実際に犯罪が起こったときも迅速に対応されていたため、人々は皆、システムに絶対の信頼をよせていた。
　しかし、ある時を境に、そのシステムは人々に牙を向きはじめた。対地球外生命体戦線の形成か、或は地殻の大規模断裂がきっかけか、など色々憶測は飛び交っていたが、ともかく、システムの善悪判定システムが厳格化し、人々は少しのことでも処分を受けることになってしまっていた。
　処分を受けた人々はパノプティコンという施設に送られていた。規則ではすぐに解放されるということだったが、生涯そこで強制労働をさせられるという黒い噂も絶えなかった。

　幼い頃勇者と約束を交わした少年は、立派な青年になっていた。「正しい」規則に従って、勉学に励み、パノプティコン中央塔勤務というエリート職を手にしていた。毎日、被管理者たちの動向に注目し、ごく偶にボタンを押すだけでよかった。
　しかし、サンドウィッチをいつもより時間をかけて食べたとき、「A-112」のモニターの砂嵐がなくなったとき、そこに映る黒いボロ布を着た男が逆立ちをしたとき、異常警告のサイレンを止めたとき、影響を受けて紅茶飴を舐め猫を抱いたとき、そのいずれの場面においても、青年は強烈なデジャヴを感じていた。だから、青年は、背中を打ちつけられ、意識を失う寸前でも、こう呟く。

「これは、いったい何度目だ」

＊

From the top.

あとがき

全然関係ないですが、スプラトゥーンをやるために貯金中です。目標まであと少し、頑張ります。

その信条を（新沢神菜）

その信条を
新沢　神菜

　白い壁、白い扉、白い服。何もかもが清潔で歪のない、でもどんな光も届かないこの場所に孤児である私たちはやって来た。

　今、私たちは戦争の時代の真っ只中にいる。爆弾が落ちてくることはないけれど、いつも空が黒くて、食べ物にも苦労した。前の孤児院はそんな苦しい状況でも私たちの面倒をちゃんと見てくれて、食べ物も何とかしてくれた。毎日美味しくなかったけれど、文句は言えない。それに、ここにいる子供たちはまるで兄弟や姉妹のように仲が良く、私はその子たちの中では最年長だったから、面倒をよく見た。生意気な子もいた。言うことを聞いてくれない子もいた。でも、皆いい子なんだ。悪い子なんかいない。それが私のポリシーだ。
　でも、現実はそう簡単にはいかなかった。空はずっと黒いままだし、空気は前より酷くなった。食べ物も前より不味くなって、私たちは毎日不安だった。そしてある日、別の孤児院に移されることになった。今まで面倒を見てくれた人たちは、最後の日に泣きながら、謝っていた。それに釣られて、私たちも大泣きしたのを覚えている。今思えば、どうしてあんなに泣いていたのか不思議だ。私たちは感謝こそすれ、謝られるようなことはしていないのだから。
　その後、私たち十人はこの孤児院へと移された。施設は清潔で、毎日綺麗な服を用意してくれる。食べ物だって美味しい。今は戦争中なのに、この場所は別世界のようだった。ただ、ここには窓がないから、外の光は届かない。そもそも空は黒いから、光は何も届かないけれど。
　そして、私たちは今日もこの場所で当たり前のように生きていた。

「点呼を取ります。きちんと返事をしてくださいね。大きな声は健康の証ですから」
　先生の掛け声に私たちは元気な声で答え、名前が呼ばれるたびに大きな声で返事をした。その声に似合う、とびっきりの笑顔も一緒に。
「はい、Ａクラス十人、皆元気そうで何よりです。今日は朝食の後、学習室でお勉強です。昼食の後は自由時間なので、部屋で遊んでもかまいませんよ。分かりましたか」
　先生の言葉に再び、大きな声で返事をする。先生はいつもと同じように優しい笑顔を私たちに向けていた。

「ねぇねぇ、ひとみおねえちゃん」
　朝食のパンを食べながら、隣に座る桐也が私に声をかけた。桐也は七歳の男の子。私たち十人の中では最年少で、子犬のように小さくて可愛い子だ。
「どうしたの、パンおいしくない？」
「ううん、ちがう。どうしてせんせいはごはんたべないのかなって」

「先生が？」
「うん」
　先生は私たちが座るテーブルとは離れ、なぜか椅子にも座らず、部屋の隅でじっと私たちを見ている。どうせなら一緒に食べればいいのに、と思う桐也の気持ちも分からないことはない。
でも、私は違うものを感じるのだ。何か言い表せない何かが。
「きっと、もう食べてるんだよ。桐也が好き嫌いしないか見るためにもね」
「ぼく、きらいなものなんかないもん！」
「おー、桐也は偉い子だ」
　私は一昨日、桐也が残した人参を思い出しながら、パンを口に放りこんだ。

　それにしても、今日の勉強も退屈だ。配られるプリントは簡単すぎるし、渡される本も何回も読んでいるから新鮮味がない。かと言って、学習室を勝手に抜けることはできない。決められた時間にやるべきことをするのがこの施設の規則だ。それに弟妹たちから離れることなど、私にはできないのだから。そして、彼らに勉強を教えようにも、自分の力でやりきるように先生に言われているため、私の出番はないのだ。
　双葉も解き終ったようで先生に与えられた本を読んでいる。近くからは珊瑚や詩乃が数学の問題に苦戦する呻き声が聞こえる。侑吾や禄音は何かを思い出すように目を瞑り、頭を突いていて、菜々夜はプリントが数字と式だらけだ。弥汰や胡桃は漢字の書き取りで、桐也は平仮名をプリントいっぱいに書いている。
「ねぇ、姉ちゃんたちは終わったんでしょ。だったら、手伝ってよ」
　とうとう珊瑚が音を上げた。詩乃も助けを求めるように、こっちを見ている。
「先生に許可を貰え。良いと言われたら手伝ってやる」
　双葉は本から目を離さずに言い返し、珊瑚はがっかりしながら、部屋の隅に立っている先生を見た。
「手伝ってもらっても……」
「自分の力でやりなさい」
　ほらね、と言わんばかりに双葉は肩を竦めた。対照的に珊瑚は肩を震わせている。あ、これは嫌な予感。
「何だよ、助けてくれたっていいじゃん！　先生も自分でやれって言うならヒントくらい教えてくれてもいいのに！　先生のけち！　双葉のバカ！」
「……誰がバカだってこのクズ！　そんな問題も解けないようじゃ、いつか侑吾たちにもバカにされるね。いや、桐也にも先を超されるかもね！」
「だ、誰がぁ！」
「あんたのことよ、このクズ」
　どうして双葉は怒りの沸点がこんなにも低いのか不思議に思う。いや、それよりも二人がこれ以上おかしくなる前に止めなければ。
「双葉、それは言い過ぎ。珊瑚だってそこまで言うつもりじゃなかったんだから、もうこれ以

上は……」
「瞳は優しすぎる。こういうガキには言える時に言っといた方が良い時だってあるんだよ。だか
」
　双葉の声はそこで途切れた。私が止める間もなく、珊瑚が双葉に襲い掛かったのだ。首元を掴み、怒りに狂ったような目をしている。
「珊瑚！　何をしているの、やめなさい！」
　私は二人を引きはがすために、珊瑚の腕を掴み、押さえようとした。でも、珊瑚が私の手を振りほどこうとする力は想像以上で、私は簡単に吹き飛ばされてしまった。
「ぐっ！」
　飛ばされた先で机に腕をぶつけた。突然の出来事に状況がよく理解できていない。でも、今の珊瑚は何かがおかしい。珊瑚は明らかに双葉の首を絞めようとしている。このままだと、双葉が危ない。
「珊瑚！　双葉から離れなさい！」
　何度跳ばされてもいい、とにかく止めないと二人が……。
　そう思ったとき、誰かが二人の間に割って入り、珊瑚に何かを押し付けた。すると、珊瑚は双葉から手を放し、ぐったりとした様子で倒れた。
「まったく、暴力はいけないよ。今のは正当防衛ってことで許してほしいな」
「……博士？」
　珊瑚を止めてくれたのは博士だった。この施設で誰よりも優しくて、温かい声を持つ人。皆の中心にいる人。彼は白衣を纏い、余裕そうな笑みを浮かべ、手に持つ何かをポケットにしまった
。
「さて、この子は治療室に運ぶとして、他の子たちは部屋に戻そうか。あなたがこの子たちの担当だよね、合ってる？」
　博士に聞かれると、部屋の隅にいた先生は頷き、私たちを部屋に戻すように促した。でも私は双葉の様子を確認するため、彼女に駆け寄った。双葉は喉元を抑え、咳き込んでいるが大丈夫そうだ。
「何が起き……」
「私だってよく分からないよ。あんな風に襲い掛かる子じゃないよ、珊瑚は」
　そうだ、あんな子じゃない。堪忍袋の緒が切れたとしても、相手に襲い掛かろうとする子じゃない。だったらどうして……。
「君たち二人は大丈夫かな。怪我してない？」
　私たちを心配してくれたのか、博士が声をかけてきた。怪我か、何だか不安になってきた。そう思い、腕を見てみると、珊瑚に飛ばされてぶつけた腕が内出血を起こしているようで、色が変わっていた。
「これまた派手にやったものだ。そっちの君も首を絞められかけてたよね。二人とも、治療室に来た方がいい」
　私たちは互いの顔を見て、頷きあった。双葉はまだ一人で立つとふらつくので肩を貸した。珊

瑚はというと、その後やってきた他クラスの先生によって運ばれていった。

「はい、これでよし。無茶は若者の特権だけど、無謀なことはしないでね」
「姉妹喧嘩を止めることは無謀じゃありません」
「そう言われると弱いなぁ。喧嘩を止めることはいいことだし」
　私は包帯が巻かれた腕を見ながら、あの時のことを思い出した。
「そういえば、珊瑚を止める時に使っていたあれって何ですか？　なんだかビリビリしていたような……」
「え、スタンガンだけど」
「すたんがん」
　実物を初めて見た気がする。いや、それほど危険な状況だったから仕方がないか。
「そうそう、双葉さんだけど、念のため検査を受けてもらったよ。そうしたら、少し気になる所があってね。治療室にはいくつかベッドが用意されているから、そこで少しの間、そこで安静にしてもらう」
「双葉も、ですか」
　不安だ。珊瑚に続いて双葉にまで何かが起きたら、と考えるだけでつらくなる。もうこれ以上何も起きてほしくない。
「あ、でも会うことまで止めろとは言わないから。自由時間の時にでも先生に言って、いつでも会いに行っていいから。話は通しておくよ。大丈夫、心配いらないさ」
　博士が言うのなら大丈夫なのだろう。二人のことは博士たちに任せて、私は自分ができる精一杯をしよう。
「あの、珊瑚には」
「それはダメ」
　博士の声が急に冷えた。何かまずいことだった？　それとも珊瑚は私が思っている以上に大変なことになっている？
「まだ状態が良くないし、何が起こるか分からないから許可できない。それに」
　博士は何かを考えているようだった。でも、私にはそれが分からない。
「とにかく今はダメ。また何かあったら教えるよ」
「……分かりました」
　博士は何を考えていたんだろう。珊瑚は本当に大丈夫なのかな。
「今日は部屋に戻りなさい。ほら、弟妹たちが姉の帰りを待っているよ」
　きっと何を聞いても答えてはくれないだろう。
「分かりました、今日は戻ります。あの、腕、ありがとうございました」
「これくらい当然のことさ。また怪我しないように気を付けなさい」
　私はそのまま治療室を出た。きっと双葉は退屈しているだろう。珊瑚は苦しんでいないかな。詩乃たちも心配しているに違いない。今の私ができることは部屋に戻って、余計な心配をかけないことだ。それと、先生に双葉が居る場所を聞いておかなくちゃ。

　次の日まで私たちには自由時間が無く、双葉の居る部屋に着いたのは一日経ってからだった。双葉は治療室に置かれているベッドの一つで退屈そうにしていた。どうやら元気そうだ。
「ねぇ、私どこも悪いところないんですけど」
「私に言わないでよ。博士が安静にしてなさいって言ってたんだから、おとなしく従って」
　双葉は口を尖らせ、私を睨んでいる。間違いなく八つ当たりだ。
「じゃあさ、何か新しい本の一つや二つ借りてきてよ。何か暇つぶしが欲しい」
「学習室で貸してくれる本のこと？　先生許してくれるかな」
「違う違う」
　双葉は何か面白いことを思いついたようで、悪戯がうまくいった時と同じ顔をしている。こういう時はろくなことがない。
「私たちの部屋の近くにさ、保管室があるでしょ。そこには普通じゃ見せてくれない資料や本がたくさんあるの。そこにある本が読みたい」
「何を言い出すかと思えば、そんなことできるわけないよ！　　だいたい保管室は私たちが入ってはいけない場所の一つだし、そんなに大事な資料があるなら鍵がかかっているに決まってるでしょ！」
　この子は自分の発言がどういうことか、分かっているのか。私に盗みをはたらけと言っているようなものだ、それも規則破りのおまけ付きで。
「大丈夫だってば！　絶対にバレない方法を知ってるから」
「聞くだけ聞いてみるよ……」
　双葉の話はこう。どうやら保管室はいつも鍵がかかっているわけではないらしい。ある時間だけ、なぜか鍵が開いているというのだ。しかも、その時間は私たちの自由時間の間にある。時間式の鍵なのか、それともいつも保管室に入っている誰かがおっちょこちょいなだけなのか。
「……無謀なんだけど」
「そんなこと言わないでよ。分かった、じゃあこうしよう。とりあえず、そこに行ってみて鍵が開いていたら探索開始で、鍵がかかっていたら諦めるってことで！」
「私に拒否権はないの？」
「可愛い妹のお願いを聞いてよ、おねえちゃーん」
　こういう時だけ妹ぶるこの子の性格はきっと治らないだろう。そして、この無謀でバカなお願いをダメとは言えない私の性格も、きっと。
「ダメでも拗ねたり暴れたりしないでね」
「やった！　瞳ありがとう！」
　おいおい、おねえちゃんはどこいった。
「今日は無理だから明日ね。先生を誤魔化さなきゃいけないし、言い訳も考えておかなきゃ……」
「はーい、期待して待ってるから」
　できれば期待しないで待っていてくれると嬉しいのだが。私は明日の時間、あの部屋の鍵がかか

っていることを強く望んでいた。

「なんで、なんで鍵が開いてるの……」
　結局私は双葉のお願いを聞いてしまった。そして、その約束を果たそうとしている。もし、扉に鍵がかかっていたらすぐに双葉の所に向かい、諦めを促して、先生に対する嘘もなかったことにできた。だが、それは保管室の扉が無慈悲に開いた瞬間に崩れ落ちた。
「もう、やるしかないか」
　すぐに用件を済ましてしまおう。でも、さっきから頭痛がする。緊張しているせいなのかな。
「し、失礼します……」
　恐る恐る扉を開け、中に入る。部屋の中は真っ暗で何がどこにあるのかよく分からない。すると
「ひゃあ！」
　電気がついた。どうやらセンサー式みたい。
「び、びっくりした……。誰か来たのかと思った」
　明るくなったおかげで部屋の様子がよく分かる。ここには本棚がいくつも置いてあった。私の背よりも大きなものがいくつも。とにかく、手が届く範囲で探してみよう。
「英語の本しかないじゃん……」
　どの本も背表紙が全て英語で書かれていた。作者はもちろん英語で。
「双葉って英語得意だったかな」
　とりあえず、中身を確認するために本へ手を伸ばす。だが、その手は本へと届かず、自分の頭へと当てられた。猛烈な頭痛が私を襲ったのだ。私は立っていられず、その場でしゃがみこむ。
「っ……いた……なんで」
　どうして急に、どうして今なのか。ダメだ、うまく考えられない。
「ここを、出なくちゃ。ここに、居ちゃ、だめ」
　頭痛のせいで足がふらつく。壁に沿って歩くしかない。こんな所で倒れでもしたら大変だ。どんな言い訳でも、きっとどうにもならない。
　先生には双葉の所に行くと言ってある。誤魔化すには時間が経ち過ぎているから、ひとまず部屋に戻ろう。双葉には明日にでも、ダメだったと言おう。鍵がかかっていたと言えば、あの子も諦める。大丈夫、なんとかなる。
　私は痛む頭を押さえながら、歩き出した。私はどうして、何のために、こんなことをしていたんだっけ？

　次の日の朝。私たち八人はいつもの場所で朝食を取っていた。パンを齧りながら、私は昨日のことを考えていた。双葉のために保管室にこっそり入った。そう、双葉のために。なのに、この胸にあるもやもやは一体何なのか。先生に嘘をついたからか、双葉をがっかりさせるからか、それとも別の何かが原因なのか。
「ねぇ、ひとみおねえちゃん」

　隣に座る桐也が話しかけてきた。またいつもの可愛らしい質問かと思ったが、どうやら違うようだ。
「どうしたの？　言ってごらん」
「あのね、おねえちゃん……きょうのごはん、あじがしないよ？　どうして？」
　寒気がした。でも、この子の言葉を理解した瞬間に自分がやらなければならないことも頭に浮かんだ。

　嫌な予感しかしない。でも、何が起こっているのか分からない。私たちは今、どういう状況にいる？　これからもっとつらいことが起きるのだとしたら、願い下げだ。
「双葉は、双葉は大丈夫だよね……」
　私は正体の分からない不安に襲われていた。とにかく彼女の無事を確かめたかったのだ。早く自由時間になることを願っていたから、今日の学習プリントはぐちゃぐちゃだ。でも、やりきることに意味があると先生は言って、素直に受け取ってくれたのは幸いだった。
　自由時間になると、私はすぐに双葉がいる部屋へと向かった。そうだ、昨日のことを謝らなきゃ。鍵がかかっていたから入れなかったから、と。
　すると、私は双葉がいる部屋の扉の前に誰かがいることに気付いた。あれは、あの人は……。
「珊瑚？」
　あの時からあまり時間は経っていないのに、久しぶりに会ったような気分だ。今の珊瑚はとても落ち着いた様子で立っている。でも、私の声は聞こえていないらしく、じっと扉を見つめている。
「珊瑚！」
「……姉ちゃん？　何でここにいんの」
「私は双葉に用があるだけ。珊瑚こそどうしてここにいるの。というか、あんた大丈夫なの？　状態がよく分からないから、博士や先生は会いに行くことだって許してくれないし、それにどうして、あんなことしたの」
「なんとなく、だけど？」
「え」
　なんとなく、と告げた珊瑚の表情は私には理解できなかった。不思議がる様子はなく、悪びれた様子もない。なのに、少しだけ笑っているのだ。あんなことをしたのに、姉妹同然の人間を傷つけようとしたのに、いろんな人に迷惑を掛けたのに、なのにどうしてこの子は笑っている？
　双葉を本気で傷つけようとしていた、と言うのか。誰だこの子は、珊瑚はこんな子じゃない。私の目の前にいる珊瑚の顔をしたこの少女は、いったい誰？
「ねぇ、姉ちゃん。双葉に用があるって言ってたよね？」
「う、うん」
「だったら、無理だよ」
「何が」
　珊瑚の顔をした少女は私の目をじっと見つめて言った。

「だって、もう話できないもん」
「だから、何が」
　少女は眉をしかめて困ったような顔をした。そして、私の所へ近づいてくる。
「気づいていないの？　それとも見えていないの？　もしかして姉ちゃんも」
　もう一度、何がと言おうとしたが、声が出なかった。私はその光景を理解したくなかった。
「姉ちゃんも狂ってるの？」
　少女の服はあちこちが真っ赤だったのだ。まるで赤いペンキを被ったかのように。でもこれはペンキなんかじゃない。まさか。
「やっと気づいてくれたね。それにしても、何でこんなに近くに来るまで気づかなかったの？　もしかして、姉ちゃんは私とは違う方向に狂ってる？　自己暗示みたいなものかな」
　よく見ると少女は右手に何かを持っていた。鋭く、黒くなったナイフだった。あんな物、どこの部屋にも置いていない。
「あ、これ？　これね、逃げる時に取ったの。私の所には見張りがいてね、その人すっごくびびりで弱いくせにこんな物持っていたからさ、ありがたく使わせてもらってるの」
「その見張りの人はどうしたの」
「うーん、たぶんもう無理だと思うよ」
　立ち止まり、手に持つナイフをくるくると回している。少女が言う、無理が何のことなのかは、もう聞かなくても分かる。きっとそういう意味だ。
「双葉には仕返しのつもりだったよ。でもあいつ寝てたから、簡単すぎた。それに、来る途中でいろんな人たちに見られたから、予定よりもやりすぎちゃったんだよね」
　双葉のことを知っているこの少女は、少し前まで珊瑚だったのかもしれない。だとしたら、いつ珊瑚じゃなくなった？　からかわれて双葉に襲い掛かった時？　私たちが珊瑚に会えなかった間？　それとも……。
「やっぱりやり過ぎはよくないよね、うん、よくない」
「あんたは、これからどうするつもり？」
　私は珊瑚がこんなことをする子じゃないと信じている。だから、何かのせいでこうなったと思うしかない。もしそうなら、この子を止められなかった、何もできなかった私にも責任がある。
「ここから逃げる？　出口なんてどこにあるのかわからないよ。それとも皆、双葉みたいにするの？　私も、詩乃やあんたより小さい子たちも？　それだけは許せない。でもね」
　私はこの子を信じていたい。
「あなたの姉として、できることはしてあげたいの。あなたは珊瑚。私の可愛い妹なの」
　珊瑚は私の目をじっと見つめている。何を考えているのだろう。でも、右手に持つナイフが小刻みに震えている。
「……やっぱりさ」
　珊瑚が小さく呟いた。
「悪いことはしちゃいけないよね。約束は破っちゃダメだよね。うん、ありがとう姉ちゃん」
　そういうと、珊瑚は振り返って走り出した。そのまま、双葉がいた部屋へと走り去っていく。

　私はその背中を追いかけ、閉じた扉を再び開けた。そして、目に飛び込んできたのは。
「双葉、珊瑚」
　双葉はベッドの上で眠っていて、珊瑚は双葉に寄り添うように倒れていた。右手に持っていたナイフは彼女の胸元に刺さっていて。
「ごめんね」
　私はふらつく足取りで二人のそばへ近づいた。
「何も分からなくて、何もできない姉で」
　不思議だ。こういう時は涙が出てくるはずなのに、一滴も出てこない。むしろ、悲しいとすら思えない。
「こんな……」
　すると、私は背中に激しい痛みを感じた。ビリビリという最近聞いた、あの音が聞こえる。私は、思わずその場に倒れこんだ。
「残念だよ、こうなってほしくはなかったのに。やっぱり難しい、悪とは……本当に惨いものだ」
　遠のく意識の中でその声を聞いた。あの温かい声は確か、あの人の声だ。
　なら、もう安心だ。

＊＊＊

　はい、私です。まさかあなたから連絡が来るなんて思ってもみませんでしたよ。今日はどういったご用件で？
　……なんと！　それはとてもよいこと、いやそんな言葉で言い表せないほど素晴らしいことです！　これで子供たちもきっと報われるでしょう。戦争を終わらせるためとは言っても、子供たちがどれほど影響を受けたのか、数え切れないほどでしたから。もちろん、現在申請しているものはそのような副作用が起きないように改良に改良を重ねたものです。ご安心ください。
　それにしても、あなたのような国の頂上にいるお方からお話を受けることになるとは思ってもいませんでした。もちろん、断る理由もありません。私だって、今起きている戦争は憎いです。意味もなく命は奪われ、消費を繰り返すだけの日々。その上、終わらせる方法すら分からなくなっていますからね。どの国も戦争を始めた理由すら曖昧となり、皆疲れ切っています。なのに、戦争は終わらない。まったく酷い話です。何万という人々が苦しんでいるというのに、国のトップたちはいったい何をして……おっと、口が過ぎました。申し訳ありません。とにかく、私はこの戦争を止めたいと思っていることに嘘偽りはないことを信じてください。
　はい？　今、何と……。薬の影響について？　何度も説明しているはずですが。あぁ、そちらのことでしたか。実用前に過去の症例について知っておくことが必要なのかは分かりませんが、あなた様の頼みなら聞き流すわけにもいきません。
　私が目指す理想は、人間の心から悪を消し去る薬を作ることでした。この戦争には善良な人間などおらず、人々の心には悪のみ巣食っている。だから、私は人間の心から悪を消し去ることが

できれば、この無価値な争いは終わると思っているのです。なぜなら、私は全ての人間の良心を、善良を信じているからです。
　ですが、理想は遠かった。人間の心に影響を与えるということは、少なからず精神にも影響を出しますから。そのせいで、子供たちは次々とおかしくなっていきました。狂気に陥る者、幻覚や幻聴が現れた者、五感に障害が出た者、とにかく、まともと呼べる状態の子供はいませんでした。その後、私は何度も試行錯誤を繰り返し、今の状態へ近づけることができたのです。
　ですが、それは完成とは言い難い物でした。方向性がずれた、とでも言いましょうか。狂気に陥る者や体に目立った障害が出る者はいなくなりました。また、悪いことだと自覚しながら、それを行おうとすると何らかの形で一時的な症状が出て、踏み止まらせるという症例も見受けられました。しかし、そのような者は善良を求めるあまり、他者を優先し、自らを省みず、その上自分自身の幸福すら投げ出そうとするのです。
　その後も私はさらなる改良を求めました。何度も失敗作を作り出し、何十、何百もの子供たちを失いました。戦争を終わらせるためとは言え、罪もない子供たちの命を奪うことに抵抗はありました。ここにやってくる子供たちは全員、孤児でした。戦争によって孤児院が経営できなくなり、あなた様のお力によって、連れてこられた可哀想な子たちです。だからせめて、薬の影響が出ない限り、ここを彼らの家となることを願いました。研究員たちを先生と呼ぶ子供たち、私を博士と呼ぶ子供たち。その無邪気な声に私は励ましと申し訳なさを感じていました。
多くの人々を救うために、この戦争を終わらせるために、私は子供たちの命と絆を殺しているのです！
　……私情を挟み過ぎました。申し訳ありません。
　私は、最終的に今のような完成品を作りあげることができました。これで人々の心から悪が消え、戦争が終わると信じています。多くの人々は命を無駄に散らすことなく、あなた様が治める世界で最期まで幸せに生きることができるのです。悪のない世界こそが私が望む理想郷。そしてその世界はもうすぐやって来るのです。明日にも、あの薬が全世界で使用されるという知らせほど嬉しいものはありません。これで世界は平和を享受し、人々は笑顔に満ち溢れるでしょう。

なぜなら、私は全ての人間の良心を、善良を信じているからです。

鳥は知った　壱

白玉楼

一

　吾輩は鳥である。名前を「鳥」という。
　吾輩の記憶の始点はペットショップである。周りの十数羽と一緒に千代千代と鳴いていたのを覚えている。同期は目が開いているかいないかの差はあれども、皆一様に羽毛がまばらに生えていて、少し離れた籠の成鳥と比べると寒そうである。無論雛鳥の箱は暖房付きなので実際は暖かい。ペットショップの店員兼飼育員が数時間おきに餌をくれるし、外敵もいない。親鳥と引き離されて気の毒という声もあるが、目が開いて初めて見たのも世話をするのも店員だから、特別親に思い入れはない。かといって店員を親とも思わない。そういうわけで自分の境遇には別段言うこともない。
　ホームセンターの奥にペットショップは存在し、真ん中が犬と猫、端に魚類、そしてもう片方の端が爬虫類と鳥コーナーである。吾々の部屋はいつも温度設定が高く換気がされないため、大体の客人は息を止めて顔をしかめながら入ってくる。入ってからはなるべく浅く呼吸をして、会話も最小限にして部屋の空気を肺に染み入らせまいとする。そういうわけで普段は客人が来ても安眠を妨げられることはないのだが、客人が子供の場合その限りではない。ペットショップでの観察に基づくと、人間の子供というのは往々にしてかまびすしいもので、他が寝ていても一向頓着せず大声を出したりする。
特に小学生くらいのが始末に負えない。幼童ほどちょこまかと動かないのはよろしいが語彙が増えて小賢しい。無礼な物言いが多い。
「あれまあなんてハゲ、雛のうちからこんなでは先が思いやられるね」
「ほんに見苦しいね」
　同期のうちでは博愛仁慈の聞こえたかき吾輩もこれには腹を立てた。無教養にも雛はこういうものだと知らないらしい。目を開けて睨み付ければ、子供二人と目が合った。例にもれず二人とも小学生くらいである。
「目を開けた。こうしてみれば可愛いね」
「ほんに」
　これに少し気をよくして許してやることにした。
「雛がみんなちょっと肩のあたりがつぶつぶとして見えるのだけど。気色の悪い」
「ええほんに」
　さっきから大きい方が無暗に「ほんに」を繰り返している。他に言葉を知らないのかと疑ったが、如何にもめんどうくさそうな表情なので文字数を最小にしようとしているだけなのかもしれない。
「お前が赤さんのときより余程可愛い」

「ひどい、言いつけてやるから」
　そうかと思えば突然の剣突である。食らったほうは駆け足で出ていった。残った方はなんともいえない目で吾輩を見つめていた。決してゴミを見るような目ではなく、かといって好意的な感じでもなかった。

　小さいのが父親らしき人を連れて戻ってきた。
「それで、どの子にするのかな」
「さっきからこっちを見ているのがいるからその子。ほらそこにいるやつ。あ、あっち向いちゃった」
　父親が来てからは大きい方は一言も話さない。ただうんざりした様子で二人から離れてどこかへ行ってしまった。なんだか嫌な感じのする家族だ。飼われたら碌なことにならないとみえる。動物的勘が同期に紛れて隠れるよう言っている。だが少々遅かったようだ。

　悲しき哉、無情の店員の手、忽ちに吾輩を同期から引き離し、情けなき哉、天運の狭き箱にとぢられけり。

二

　斯くして吾輩は非常に狭い箱で身動きもとれず視界も真っ暗、箱はがたがた揺れるという絶望的状況下にある。特に箱が狭いのには閉口している。頭がつかえるどころの騒ぎではない。圧迫されて息がしづらい。如何に小鳥の雛と雖もカブトムシ用の箱に入れられては無理がある。本当はちゃんと小鳥用なのかも知れぬがカブトムシかクワガタ用かと疑う程狭い。受験における旧帝国大学の門程狭い。ついでに言うとこの家族の心もこれくらい狭かろうと吾輩は見積もっている。動物の勘を軽視してはいけない。
　そんなことを考えていると急に視界の上の方が動いた。暗くてよく見えない。まさしく鳥目なのだから詮方ない。だがなんとなく、呼吸できるよう開けられた小さい穴から誰かがのぞきこんでいるらしいことは分かった。聞こえてくる会話からして、吾輩が死んでいないか確かめたようだ。懸念通り死にかけている。大丈夫だった、などと能天気な声が聞こえる。他の玉の緒が絶えかけているとは思いもよらないらしい。
　吾輩はこの調子では到底長生きは望めまいと考えた。しかし折角同期をして文鳥界の麒麟児と言わしめた吾輩があっけなく夭逝しては、悲しむべき報道に燕雀諸先生が路傍に憤死されることだろう。せめて何かを残したい。吾輩は死までの日々を言葉にし、飼鳥にどんな危険があるか、どんな状況で起こるかを記録し他の鳥に伝え、鳥類の繁栄に貢献できたらこれ以上の幸いはない。早速吾輩に危害を加える可能性のある者たちを紹介しよう。まず、不如意にも吾輩の主人となるのがたった今吾輩をのぞきこんだ者だ。主人の細君はまだ見ていないが家で留守番しているらしい。次に子供らだが、吾輩と対面した二人の上にもう一人いるようだ。これも留守番している

らしい。以降この三人を上から順に伯、仲、叔季と呼ぶことにする。これは兄弟姉妹の順序をいう語の伯仲叔季をそのままあてはめただけである。

揺れがおさまったかと思えばまた別の揺れ方をする。どうやら吾輩の入っている箱を手に乗せ運んでいるらしい。くらくらしていると突然視界が明るくなった。まぶしくて固まってしまう。箱を開けて吾輩を見下ろす人間が二人いるようだ。「へえ、これがね」
おそらく伯の声だろう。
「ちゃんと世話できるのかしら」
やっと目が慣れた。見上げて顔を見る。この人は細君だとすぐにわかった。
「もう名前つけたの」
「まだだよ。〇〇ちゃんのつけた名前にしてよ」
どうもこの末っ子、自分のことを〇〇ちゃんと呼ぶらしい。
「構わないけど、あの子は」
「さあ。どうでもいいでしょ」
さっきの剣突を根にもっているのか知らないが、なかなか手厳しい叔季さんである。
「ステラがいい」
イタリア語で星という意味である。吾輩としても特に異論はない。ではそういうことで、と居間が満場一致で解散しようとしているところに、パタパタと仲が入ってきた。少し顔が赤い。
「待って。……スペランツァがよろしいと思う」

しかしその次の日以降今日に至るまで、一度もステラやスペランツァとは呼ばれず、
「こいつ何て名前だったろう」
「さあ。鳥でいいよ」
という伯と叔季のやりとりからは「鳥」とか、たまに「アホ鳥」と呼ばれている。

三

こうして吾輩は飼鳥となり、また別の箱に居住せしめらるることとなった。この箱はハムスターやら鳥の雛やらを入れるものである。無論例のカブトムシ君用の箱よりましだがせまい。数歩歩けば壁から壁についてしまう。立っても天井にぶつかりはしないが飛べるスペースはない。尤も雛なのでもとより飛翔するに能はざるが。斯様に飼鳥に不自由しからしむるとは何事かと憤慨しかけたが、家人の家もなんだか狭いらしく、家人らは液体中の分子運動の如き様相を呈している。どのあたりが似通っているかというと、各分子の位置は自由に変わりうるが分子間の距離はあ

まり変わらないところである。こんなせまい家の飼鳥なら箱がせまいなどと贅沢を言える身分ではないのでおとなしく固体中の分子の如く生きるとしよう。健気にもそう思っていると、転機がやってきた。
　吾輩が自分で餌を食べられるようになったので、家人らはもう雛ではないと釈したらしく、鳥籠を持ってきた。なるほど、吾輩の敬愛する夏目漱石先生の小説に登場した文鳥の如く「二本の留り木の間を、あちらへ飛んだり、こちらへ飛んだり、絶間なく行きつ戻りつしている」鳥になるらしい。これは大出世である。叔季が吾輩を指にとまらせて籠の入り口に運んでいく。そこで初めて気が付いた。籠にはすでに住人がいたのだ。

　　その白文鳥は雪の精と見紛うばかりに美しかった。少しの汚れもない翼は言うに及ばず、目の輪の鮮やかな朱、脚の朱鷺色、何より嘴の色の絶妙なグラデーションに目を奪われた。彼女の姿から光が出て、鳥籠が金色に輝いて見えた。所々メッキの剥がれた場所もそういう装飾かと思われる程だった。
　留り木の片端に鎮座する彼女と一羽分間をあけ座った。
「ごきげんよう」
「ごきげんよう。お会いできるのを楽しみにしておりましたのよ。千代と申します」
「吾輩は『鳥』と呼ばれています。」
「あれまあ、わたくしはそうはお呼びできませんわ。わたくしも鳥なのですから。子供さん達が何だったか結構な名前をつけてらしたじゃありませんか」
「千代君さん、あのとき近くにいらしたのですか」
「いいえ、お座敷におりました。でも真ん中の方が教えてくださいました」
　叔季が籠を持って座敷に運び、バードケージスタンドに吊るした。どうやらここが鳥籠の定位置らしい。
「真ん中の方はよくここにいらして……あ、ほらご覧なさいまし」
　仲が叔季と入れ替わるように座敷に入ってきた。すれ違いざまににらみ合っているように見えた。
「今までせまい箱にいたもので、外の様子がよくわからなかったのですが、真ん中と一番下の方は仲が悪いのでしょうか」
「お三人ともお互いにあまり仲はよろしくないと思いますが。まあ、比較になるものがわたくしの実家しかないのですけれど」
「実家ということは、千代君さんはペットショップからいらしたのではなく、里子に出されたのでしょうか」
「ええ、名前ももとからついておりましたのよ。たまにわたくしに会いに実家から人が来ます。その時にはわたくしの妹も来ますわ」
　他家の鳥の様子を知ることができるのは喜ばしい。

四

　夏。家人は旅行に行った。仲と文鳥二羽が残った。小四一人（と二羽）に留守番させるのはまずいということで、祖父母の家に預けられることとなった。仲は鳥籠を子供部屋に運び、籠から出してくれた。
「何故この子は行かないのでしょうね」
「家族旅行がお嫌いなのだと思います。もう三年ここに住んでいますが、長い時間みんなでお出かけというときには真ん中の方はいつも残ります」
　不相変千代君は麗しい。とやの季節を迎えてほっそりして見える。
　仲が部屋を出た。トントントン、と階段を下りる音が聞こえる。それから今度はミシミシと一歩一歩踏みしめるような音が聞こえ、部屋に祖父が入ってきた。空になった鳥籠を見やり、あたりを見まわしてテレビの淵に留まる二羽を見つけ、近づいてきた。
　吾輩は油断しきっていた。買われた当初の懸念を常往坐臥忘れるべきでなかったのだ。そう、鳥の運命は数奇。何が起こるか分からない。
　突然祖父が吾々に布をかぶせた。鳥目ではもう何も見えない。何も見えないと動けない。そのまま二羽をまとめて両手でつかんで運んでいく。心臓が痛い。密着している千代君の鼓動も聞こえる。一体吾々をどうするのだろう。ミシミシと階段を下りていく。一階に着いたらしいのが、聞こえる音と揺れ方が変わったので分かった。奇妙な音が聞こえてきた。ジュウジュウというような……。吾輩は初めて聞く音だ。不安で身を固くする。と、その時。突然手による圧迫がなくなり、布がパッと開いて体が急に落ち……。
　熱い！
　刹那の出来事だった。真下には絶間なく泡を出し水面の揺れている、つまり煮えたぎっている液体。油というものだと後に知った。脚が水面に触れる寸前、吾輩は飛べるようになったばかりの翼を懸命に動かし、使われていない鍋の淵に留まり難を逃れた。と思ったのもつかの間、祖父の手が伸びてきたので間一髪でかわし、手が鍋にぶつかってけたたましい音を立てた。
「騒がしい。台所で何をしているの」
祖母が現れた。後ろに仲がいる。
「テレビで美味しい唐揚げの作り方をやっているから、さっそく試してみようとね」

「おじいちゃま、羽もむしらないで揚げようとしたの……」
　こうして吾輩は唐揚げにならずすんだ。千代君を忘れていたが、無事だった。
　人間は吾々鳥類を食べるということを知った事件であった。これは必ずや庭先に遊びに来た雀殿に話さねばなるまい。

　古は動物界の槐門棘路の間に九族をなびかした恐竜大明神の子孫たる鳥が、今は油の波の下にて命を一時に滅ぼしかけるこそ悲しけれ。

第壱話　完

永久の栄寿（十文字）

永久の栄寿
十文字

　もしあの時持ち場を交代しなかったら、あと数十秒交代するのを遅くできたら……目の前で起きた惨劇にそう思わずにはいられなかった。
　弟と持ち場を交代して一分とたたないうちについさっきまで俺がいた場所に砲撃が命中。部隊の大半が物言わぬ死体となりその中の一つに……

　時は二〇四四年、第二次世界大戦後の冷戦は終結せず、アメリカとロシアの対立が激化し五年前に第三次世界大戦が勃発した。当初は平和主義を貫いていた日本もアメリカの圧力に対抗できず、徐々に戦線に参加させられるようになった。

　俺、成田清はそんな状況下で設立された陸軍省の軍人の一人だ。階級は一等兵。そして俺は今、上官の命令で陸軍省に赴いていた。
　指定された部屋の前で二度ノックをして部屋の中に入る。
　「……失礼します」
　ここに呼ばれる理由は薄々わかっている。また、戦地への派遣報告だろう。
　「来たか……早速で悪いが、三日後に第三部隊の一員として出てもらう。いいな？」
　もちろん一兵士の俺に上官からの命令を拒否できるわけがない。素直にうなずくしかなかった。
　その代わりと言ってはなんだが、俺は一つだけ質問をぶつけてみた。
　「……何故、俺なんですか？　実力があるやつなら他にもいるはずですが？」
　「貴様が一番戦果を挙げているからだ。それに加え実戦経験も豊富、これ以上の逸材はいないだろう。……まあ、それ相応のリスクを負うがね」
　そう言うと上官は嫌みったらしい笑みを浮かべた。
　「……また一人で帰って来ないでくれよ？　『死神』君？」

　『死神』は俺につけられたあだ名だ。
　その由来は簡単、俺はほとんどの戦線に参加しているにも関わらず、そのすべての戦地から生還した。……たった一人で。共に訓練した仲間や親友、挙げ句の果てには弟までが俺の目の前で戦死した。
　敵にとどまらず、味方をも全滅させて帰ってくる……まさに『死神』と呼ぶにふさわしいと自然とこの名がついた。そしてこの名はすぐに陸軍中に広まり、畏怖の念を抱かせる象徴となって

いる。

　その日のうちに俺は第三部隊に合流した。
　……わかりきっていたことだが、俺が加わったことを喜ぶ者は一人もいない。むしろ、死の宣告を受けたように顔を青くしてうつむいている者がほとんどだ。
　なにか声をかけるべきなのだろうが、まともに返してくれる者がいるはずもない。俺は、一言も話すことなくその日を過ごした。

　その夜、どうも居心地が悪く思った俺は外に出て愛用のたばこに火をつけた。
　今夜は満月らしく、外は思ったより明るかった。月を見ながら一服するというのもなかなか風流だな……なんて思っているうちに一本目を吸い終えてしまった。
　短くなったたばこの火を踏み消して二本目を取りだそうとした時、後ろから声がした。
　「……たばこですか？　あんまり吸うと体に悪いですよ？」
　振り返るとすぐ後ろに男が一人立っていた。顔に少し見覚えがある、おそらく第三部隊の一人だろう。
　「俺の体だ、どうしようが俺の勝手だろう？」
　「それはそうですけど……」
　それ以上は反論できなくなったのか、そいつは口ごもってしまった。……それにしても、俺に話しかけてくるやつなんて何ヶ月ぶりだろうか。少し興味がわいた。
　「……君、名前は？」
　「え？　あっ、工藤っていいます」
　「そうか。じゃあ工藤君、一つ言っておこう。これ以上俺と関わらない方がいい。少しでも長生きがしたいならな」
　誰だって死にたいとは思わないはずだ。俺に関わった者が死ぬのなら、関わらなければいい。さきの言葉は警告を含めたものでもあった。
　しかし、工藤はきょとんとした表情で俺に尋ねてきた。
　「関わらない方がいい？　どうしてですか？」
　『どうして』、そう訊かれて俺は一瞬なんと言っていいかわからなくなった。
　「……お前、俺がなんて呼ばれているか知っているのか？」
　「はい、『死神』ですよね？　……それが、どうかしましたか？」
　そう言われ俺は言葉をつまらせた。俺が何も言えないでいると工藤はさらに続けた。
　「確かにあなたの噂は聞いています。でも、僕はどれもあなたに非があるとは思えません。……むしろ、多くの戦場で戦果を挙げるすごい方だと僕は思っています」
　そう言うと工藤は俺の顔を見て、笑みを浮かべた。
　「だから、次の作戦は絶対成功させましょう！　そしてみんなで帰って『死神』なんて名前、払拭してやりましょう！」

嬉々としてそうまくし立てる工藤の姿に俺は苦笑を浮かべた。……こういうのをバカ真面目というのだろうか。いままで深く考えていたことが馬鹿らしくなってくる。

今までがそうだったとしても、次も同じとは限らない。次は必ず全員で生きて帰る。そのために俺もできる限りのことをしよう。

「……そうだな。改めてよろしく頼む、工藤君」

「はい！　一緒に頑張りましょう！」

そして三日後、俺達は戦地へ向かった。全員生きて帰る。その思いを胸に抱いて……

『……本国へ伝達、十月二十五日敵ノ奇襲ニヨリ第三部隊壊滅。生存者……一名』

【後書き】

この作品を読んでいただきありがとうございます

時間のない中で書いたため、私的にもあまりいいできとは言えない作品となってしまいました。

それでも、この作品を少しでも面白いと思っていただけたら幸いです。

「友達だよね」（chima）

「友達だよね」
chima

僕は
よく君と会った
よく君と喋った
それは今でも変わらない
でも君はどこか悲しそうな顔をしていて
今にもいなくなってしまうのではないかと
僕は君の横顔を見つめる
僕に何ができるのだろうか

　私たち、友達だよね？
　ああ

私は
それが性格なのか好意なのか分からない
ただ貴方は優しくて
当たり前のように私を助けて
当たり前のように気にかけてくれる
弱い私は今にも貴方を頼りたいけど
貴方はそれを受け入れてくれるのだろうか

　僕らって友達？
　うん

僕らは
互いに友達であっても生きていけるはず
でも
互いに友達かどうか確かめ合う
そんな合言葉みたいなものは
本当に友達だったら必要ないはず
僕は知りたい
君の本当の気持ちを

　私たち、友達だよね？

　本当にそうかな？

日常が止まった
私の心も止まった
彼の真っすぐな目にたじろい
心を撫でられたような
そんな温かいものに
今初めて涙があふれる

温かいモノ　《怒》（荒月）

温かいモノ　《怒》
荒月

　「おかしいですね、もうここ一週間位日光を浴びてない気がするんですけど……僕の勘違いですか、主？」
　どんよりと曇った草原、フードを被った少女、スピリと、そのスピリの頭の上で落ち着かないように曇天を見渡す猫、フィールの一人と一匹が歩いていた。
「勘違いじゃないわ。けれど、一週間程度、陽が差さないなんてことは地方によってはあり得ることよ」
　フィールの問いに答えるスピリ。確かにスピリとフィールはこの草原に入ってから一度も晴れているのはおろか、陽が差し込むのも見たことがなかった。
「いや、まぁ、そうなんですけどね。何でしょうね……普通の天気と違うというかなんというか……」
　丁度いい答えが見つからなかったのかフィールはそのまま黙ってしまった。しかし、フィールが言わんとしていることはスピリも理解していた。この曇天は季節や気候によるものではなく、魔法が絡んでいるものだろう、と。
「近くに何かあるのか、いるんでしょうかね？」
　しばらく歩くと、いつの間にか頭の上から肩に移動したフィールが呟く。しかし、その質問はスピリによって肯定された。
「どちらかでしょうね、見えてきたもの」
　スピリの遠くを映す、感情の薄い目には、城壁に囲まれた街らしきものが見えた。
「今日はちゃんとした食事が食べられそうね」
　そう言うのであればもう少しまともな食事を作ってくださいよ……、とフィールは思いながら、溜息をついた。
　因みにスピリの作る料理は煮るだけ、焼くだけ、漬けるだけの三種類のみ。いくらグルメでないフィールでも、毎日の食事がそれでは辛いものがある。さらに、スピリは衣食住に関して殆ど頓着がない。そのため苦労するのはフィールのみなのである。

　「入国許可を頂きたいのですが」
　スピリは入り口横の関所に詰めている衛兵に声をかける。疲れ切っているような風貌の衛兵はスピリと、肩に乗っているフィールを一瞥した。その後、既に作ってあったと思われる入国許可証を差し出してきた。通常、入国の目的や期間を聞かれたのち、説明を受けてやっと入国が許されるものである。
「いいのですか？」
　ちゃっかりと許可証を受け取りながら一応聞くスピリ。フィールは驚きで声も出せない。出して

いたらスピリが魔女なのがばれてしまうため、今回はよかったのだが。
「構いませんよ、むしろ外の方が安全ですから。貴女もお気を付けを、理由なく女王様に命を奪われたくなければね」
　それだけ言うと衛兵はこれ以上言うことなし、とばかりに奥へと行ってしまった。
「そう、ありがとう」
　スピリも、もう用はないとばかりに開きっぱなしになっていた門からスタスタと入っていく。
　「この国……どうなってるんですかねぇ……」
　入国から数分後、大通りを歩いていると、ようやく覚醒したフィールが独り言半分、問いかけ半分に呟く。フィールの疑問は二通りの解釈がある。一つは先程の衛兵の対応。全くと言っていいほど自国を守ろうという気がない態度だった。二つ目は自分たちが見ている街の風景だった。
「雲があるから分かり辛いですけど、まだ昼間ですよね。どうして一人も会わないんでしょうかね、吸血鬼の国でもあるまいし」
　そう、この国の主要道路を歩いているにもかかわらず、一回も人に会わない、それどころかその気配すらない。スピリも理由が分からずに押し黙ったまま歩いている。
　「お姉ちゃん、お姉ちゃん……」
　相変らず誰もいない大通りを歩くこと十数分後、スピリとフィールの耳はこの国に入ってから初めて、自分達ではない誰かの声を耳にした。小さな声ではあったものの、その方向を向いてみると、路地からちょこんと出て、手招きしている小さな手を見つけた。
「主、第一村人発見ですけど……どうします？」
「このまま歩き続けたい？　私はそれでもかまわないのだけど。そしてここは村じゃなくて国だけど」
「付いて行ってみましょう」
　スピリの質問からコンマ一秒の返答だった。そして。スピリの訂正は無視された。
　フィールの答えを聞くと、スピリは大通りから路地へと向かった。そしてその路地に入ってみると、そこにいたのはスピリより少し背の低い少女だった。長い黒髪を左右で二つに束ねている。
「お姉ちゃん、どうして外に出てるの？　女王様に見つかったら食べられちゃうのに」
　少女はスピリに聞こえるギリギリの声で質問した。
「見つかったら食べられるって……どんな化物なんでしょうね、その女王様って」
　フィールもスピリにのみ聞こえる声で呟きと質問の両方取れる言葉を発した。一人と一匹は長い旅の中で、牛や豚は言うまでもなく、他の動物を食べる人々にもあってきたが、人肉を好んで食べる民族には会ったことがなかった。敢えて言うなれば、そのようなものは物語に出てくるような化物の類でしか聞いたことがない。それこそ、伝承にある魔女の様な。
「私は旅をしていて今着いたばかりなの」
「そうだったんだ、それじゃあ、私が教えてあげるから一緒に来て。それに私の家は宿屋だったから」
　スピリを旅人だと知った少女は、スピリの手を取ると、路地の奥の方へ走っていく。引っ張られ

ることになったスピリは、転ばないように少女にペースを合わせてついて行った。走る主の肩に掴まりながらフィールは少女のある言葉を思い返していた。
（宿屋、だった？　じゃあ、今は違うのかな。黒字にならなくてやめたって考えられるけど……何か引っかかるなぁ）
　「ここが私の家だよ、早く入って！」
　少女に半ば押し込まれるようにスピリとフィールが入ったのは入り組んだ路地を七回程曲がった先にある家の裏口だった。少女はパタン、とドアを閉めると一息ついて、胸をなでおろしていた。
「うん、とりあえずは安心だね」
「あの……状況が読めないのだけど…」
　安心という言葉を聞き、改めてこの国について聞こうとした時だった。
「ラナ！　貴女どこに行ってたの！　あれほど勝手に家から出ちゃいけないと言ったでしょう！」
　ドアの音で気付いたのか、家の中から怒声が聞こえ、その声に反応して少女はスピリの後ろに隠れた。
「聞いているの、ラ……誰かしら？」
　奥のドアが開くと、ラナに顔立ちがよく似た女性が出てきた。おそらく、いや、確実に女性とラナは親子だと分かる。その女性はスピリを見つけると、警戒心を露わにして聞いてきた。
「申し遅れました、私は旅人のスピリです。理由は分かりませんが、女王様に見つかると大変だ、と言われ連れてきてもらったのです」
「本当に旅人なのですか？　彼女の手先ではないのですか？」
　彼女、女王様のことだろうか、とスピリが思考を巡らせると同時に、ラナがスピリを庇うようにして立った。
「違うよ、お母さん！　旅人さんじゃなければ大通りを歩くわけないよ、それにこの人、悪い人じゃない気がするもん！」
「若干バカにされてませんか、主」
フィールの呟きを軽いデコピンで返すスピリ。その間も親子の話し合いは続いており、結果はラナの説明勝ちになったらしく、女性が頭を下げてきた。
「もうしわけありません、理由を知らなかったとはいえ疑いを向けてしまって……私はティオナといいます」
「いえ、警戒心がない者は早死にしますから。私は旅人のスピリ、こっちはフィールです。突然押しかけてしまいすみませんでした」
スピリの紹介と同時にちょこんと頭を下げるフィール。自己紹介を終えた後、間を空けずにスピリが再度口を開く。
「ところでこの国はどうなっているのですか？　入国審査はなし、主要通りには人がいない。まるでゴーストタウンですが」
　自分の棲んでいる国をゴーストタウンと称された親子はうつむいてしまった。フィールがどうす

るべきか分からず、スピリの両肩をせわしなく行ったり来たりを繰り返していると、母親の方が口火を切った。
「この国は、現女王が王位に就いた時から地獄へと変わってしまったのです」
　女王。スピリは無言で、フィールは小声でその単語を口にした。この国に入ってから誰もが、といっても三人のみだが、恐れの対象として口にし続ける人物だった。如何に愚王であったにしてもここまで国内が酷くなっているのは過去ないものだった。
「女王は気に食わないものを無実の罪で連れていくのです。抵抗した者に家族がいれば一緒に連れていかれてしまいます」
　酷い暴君もいたものですね……と呟くフィール。
「そして連れていかれて帰ってきたものは誰もいません。だから国民は必要最低限のこと以外では家から出ないのです。見つからなければ罪を掛けられることもありませんから」
「なるほど、そういうことでしたか」
　触らぬ神には祟りなし、とはよく言ったもので。フィールは溜息をつきながら首を横に振った。
「革命を起こそうとは思わなかったのですか？　いくら女王と言えど、国民が発起すれば」
「出来なかったの……」
　質問に答えたラナの目には涙が浮かんでいた。まるでその出来事で誰かを失ったかのように。そこでスピリは、初めてこの家の中に母親と娘の二人しかいないことに気づいた。スピリの考えに気が付いたのであろう、ティオナが後を継いだ。
「どういう訳かは分かりませんが、突然雲が出てきて、雨が降ってきたのです。そうしたら急に皆、疲れ果ててしまって……そのまま全員監獄に……。私の夫もその中にいて……」
話してくれていたティオナも目が潤んできている。ラナに至ってはうずくまって泣いてしまっていた。
　スピリはどうしたらいいか分からなかったが、ラナの頭にポンと手を置いた。スピリのお母さんが、泣いていた自分にやってくれていた行動であった。今となってはどうして泣いていたか、どうしてこうしてくれていたかは分からなかったが。
「……おねぇちゃん……」
　ラナはスピリの胸に飛び込むと声を押し殺すようにして泣いた。肩に乗っていたフィールは慰める様に、ラナの顔にすり寄った。それからラナは数分ほど泣き続けた。

　「スピリさんの部屋は二〇一です。と言っても他にお客さんもいないので、合わないようでしたら変更していただいても構いませんよ。猫ちゃんも一緒でいいですよ」
「ありがとうございます。代金は……」
「いいですよ、まさかお客さんが来るなんて考えてませんでしたから、料理も部屋も急ごしらえなので」
　そう言って苦笑した。晩御飯はラナの希望で、全員で食べるということになった。晩御飯の時間まではかなりあったが、外に出るわけにもいかないので、ラナはフィールと遊んでいて、それをスピリが本を読みながら見守る、という状態だった。時々、ラナがスピリを誘って、ままごとや

実際に簡単なお菓子を作ったりして過ごした。ラナは、ずっと誰とも遊べなかったストレスを今一杯遊んでいるんだ、とばかりに心の底から楽しんでいるようだった。スピリも大分ぎこちないながらも自分からラナと遊んでいた。
「スピリさん、ラナ、晩御飯が出来ましたよ」
　待ってました！　とばかりにラナとフィールがティオナの方へ駆け出していく。ラナは純粋に早くみんなと一緒に食べたくて、フィールは久しぶりのまともな夕食に歓喜しているらしかった。
「そういえばお姉ちゃんはどうして旅をしてるの？　どこか行きたいところがあるの？」
　しっかりと口に入れていたものを飲み込んでから聞いてきた。それに対してスピリは口に入れる予定だったサラダを皿に戻して答えた。
「失くしたものを探すために旅をしてるの」
「へぇ、どんなものなの？」
　会話の横で宿屋には珍しく猫用に食材に配慮した、ちゃんとしたメニューをむしゃむしゃと食べながら話を聞くフィール。
「必要の感じられない大切なもの、かしら」
　スピリの回答に親子揃って首を傾げる。必要が感じられないならどうして探しているのか、といった感じで、それを聞こうとしたティオナだったが、静かにスープを飲むスピリの涼し気な横顔を見て、タイミングを逸してしまった。その横では、食べ終わったフィールがスピリの足元に移動して、丸まって目を閉じていた。

　夕食と湯浴みを終えて部屋に戻ると、夕食時、スピリに気づかれずに踏まれて、乱れた毛を直しながらフィールが問いかける。
「一体どういうことなんですかね、主」
「どういうことも何も……私と同じ、でしょうね。反乱時に降った雨も、あの雲も」
　窓の外に見える、月と星の光さえ遮る、暗い雲を見上げながら返す。入国以前から感じていた魔法の気配は間違いではなかった、と思いながら。
「私と同じ、なんてやめてくださいよ。主が人を進んで傷つけたことなんてないじゃないですか」
「分からないわ、私が研究する内容によっては、何千何万という人の命を平然と奪うかもしれないわ。それこそ、死の哀しみも分からないのだから」
　無表情で語るスピリに、フィールは溜息をつきつつ、首を横に振るとベッドのクッションの上に飛び乗り、丸くなった。溜息をつかれたスピリは、何思うことなくベッドに入ると、すぐに寝息を立て始めた。

　ガタン、ゴトン！　……ぁ……っ！
「主、主。何か下が騒がしいですよ？」
　下からの物音と微かな声、それに加えてフィールの声で完全に目を覚ましたスピリはベッドから出ると、干しておいたいつもの服へと着替えた。着替えを済ませて荷物をまとめると、その荷物

を持って下へと降りていく。降りていくにつれ、声が明瞭になっていく。聞こえる声の一つはティオナ、もう一つは男の声だった。
「こんな朝早くに来客……ですかね」
　こんな朝早く以前に来客などほぼなかったと言っていたはず。不自然に感じたスピリは多少足音を殺して階段を降りていく。降りきって話し声、いや、怒声が聞こえる玄関へと足を進めて、顔を出すと倒れているティオナに向けて鎧で武装した騎士が剣を振り下ろそうとしているところだった。
　咄嗟に魔力の弾を騎士の腕に撃つスピリ。
「ぐっ！？」
　その弾は狙い通り、騎士の腕に当たり、持っていた剣を取り落とした。剣はティオナの横にカランという甲高い音を立てて転がる。
「騎士が一般人に向けて剣を振うなんて、一体どういう状況なのかしら」
　顔を痛みに歪めながらスピリの方を向く騎士。
「貴様、誰だ？　この家には母子二人しかいないはずだが」
「そんなことは聞いていない。この状況の理由を教えて」
　騎士の質問には答えず、回答を待つ。しばらく睨み合いが続いたが、先に折れたのは騎士の方だった。
「この家の娘が不法侵入をしたため捕えに来たのだ。認めようとしないから連行したが…
…なっ！」
　魔力の弾をさっきよりも高威力で騎士の腹部に撃ち込む。弾は鎧をすり抜け、騎士を襲った。強い衝撃を与えられた騎士は頽れ、気を失った。
「ティオナさん」
　呼びかけられたティオナはスピリを見ると泣き出した。何があったのかを聞くと、何度もつっかえながらも話してくれた内容は、ラナが他の騎士に王城へと連れていかれた、とのことだった。
「あの子は誰かの家に、入ったりすることなんて、ありません。きっと嘘です。外で見かけたラナを……」
　それ以降の言葉は言葉にならなかった。スピリはしばらくティオナが声を上げて泣いている姿を見ていたが、不意に目を離し、外へと出た。そしてそのまま大通り、王城につながる主要道路を歩いていく。
　地面を歩いていたフィールは横にあった木箱を足場にしてスピリの肩に乗ると声をかけた。
「主、どこへ行かれるんです？」
「城」
　スピリらしい、短い答えである。しかし、フィールにとってはどういうわけか分からない。現時点で王城へ向かう理由は明白であるが、スピリがそれを考えているとは思わなかったからである。
「どうして王城へ行かれるんです？」
「ラナを返してもらうため」

　フィールは少しバランスを崩し、肩から落ちそうになった。まさか本当にそれが理由で動いているとは。思わず、どうして、と独り言のように呟いてしまった。耳元で呟かれた言葉は簡単に耳に入る。それに対するスピリの回答はまたも簡潔なものだった。
「あの光景は楽しくなさそうだったから」
「……なるほど」
　全てが繋がったフィールの返答もまた、簡潔なものだった。その後王城に着くまで一人と一匹の間に会話はなかった。

　「通してくれるかしら？」
　王城に着き、門番に対するスピリの唐突な頼みは槍の交差と上げられない鉄格子で断られた。
「……そう。『風よ、阻むものを切り刻め』」
　スピリが呪文を呟くと、巻き起こった風が糸でも切るかのように槍と鉄格子をバラバラにした。
「な……て、敵襲―、敵襲―！」
　堅牢であったはずの鉄格子が切り刻まれ、唖然としていたが門番は、我に返ると城に向かって声を張り上げた。そんな声は気にも留めず、一定の速度を保って進んでいく。
　門番の声に反応した衛兵が次々と現れてはスピリに襲い掛かっていく。
「『風よ、襲い来るものを薙ぎ払え』」
　剣を振り下ろしてくる者、槍を突き出してくる者、ナイフを投げてくる者と様々な攻撃方法でスピリの足を止めようとするも、スピリの位置から同心円状に強い風が外側に向かって吹き、全ての衛兵を薙ぎ払った。
　薙ぎ払われて、意識を刈り取られた者が殆どであった上に、気絶しなかったとしても、スピリを魔女と理解し恐怖のためか、武器を構えはするものの襲おうとすることはなかった。新しく現れた何も知らない者が次々に襲い掛かるも、スピリを傷つけることが出来ずに薙ぎ払われ、そのことがその者に恐怖を植え付け、既に薙ぎ払われた者には、さらなる恐怖を与えることとなった。
「やりすぎないでくださいよ、主」
「命は取ってないわ、吹き飛ばしているだけ。吹き飛ばされた先でどうなっているかは知らないけど」
　肩に乗るフィールの忠告を半分聞いているか聞いていないのか微妙な回答をするスピリ。その間にも気絶する衛兵は後を絶たず、そしてスピリの歩みの速度も落ちない。

　「……ここかしら？」
「多分そうだと思いますよ、この扉だけ他の扉よりも造りがいいですから」
　スピリがいるのは、玉座の間であるかのような装飾の施された扉の前だった。周りには眠りに落ちている衛兵が十数人転がっていた。もはやスピリを止めること、そして女王を守ることが出来る者は誰もいなかった。
　最後の扉は抵抗することなく開かれた、あっけない程簡単に。

「いらっしゃい、旅人さん。まさかここまで来られるとは思っていなかったわ」
　玉座に座っているのは妖艶な雰囲気を湛えた女だ。その手には鎖が握られており、その鎖につながれているのは一匹の子猫だった。子猫はスピリの姿を見ると、か細い声で何かを伝えたいかのように鳴いた。
「貴女が女王？」
　質問に笑みを浮かべて肯定の意を示す。
「そう。さっき女の子、ラナという名前の子が連行されてきたと思うのだけど、どこにいるのかしら？」
　ラナの名前を出した途端、女王は笑い出した。妖艶さを打ち消すほどの笑いを、狂笑の声を上げた。
「ねぇ、旅人さん。不老不死になってみたいと思わない？」
　しばらくの間笑った女王はピタッと笑うのを止め、真剣な顔になって聞いてきた。
「……」
「なってみたいわよね、なにせ永遠に美しい姿のままに生き続けることが出来るのよ！」
　答えようとしたスピリを無視し、自分に酔っているかのように喋りつづける女王。
「でも不老も不死も出来ない。魔女である私の力を持ってもね。実現できるとしても、そのころには醜い老婆になってるわ……」
　やっぱり……、心の中で呟くフィール。この国の状況から推測できる簡単な到達点だ。どんなに普通の人間が束になって掛かろうとも、魔法一つ唱えるだけで無力化できる、それが魔女だ。
「それでも私は気づいたのよ！　不老も不死も出来ないなら、他の体に移ればいいってね！」
「……魂への接触は禁忌だったはずだけど」
　スピリの質問はやはり無視される。
「そのためには魔法と体が必要なの。もう動物は出来たんだけど人の魂となると上手くいかなくて何度も失敗したわ」
　女王が言った時、フィールはスピリの指が何かを察したかのように、微かに動いたことに気づいた。
「……ラナ」
「……ミャー」
　とても低い声が呟かれると、子猫が鳴いた。まるで自分が呼ばれたかのように。それでフィールもようやく理解した。そして同時に言いようのない怒りで満たされるのが分かった。
「貴女、ラナの魂を移したのね、その子猫に」
　女王は口角を歪ませた。
「だいせーかーい！　初めて成功したのよ、人の魂で！　それにしても旅人さん、ひょっとして同業者？　まぁ、知られたからには関係ないけどね」
　言い終わるかどうかのタイミングで魔力弾をスピリに向けて撃つ女王、もとい魔女。魔力弾はスピリが騎士に撃ったよりも高威力で、スピリの腹部を突き抜けた。
「ッ！」

衝撃で後ろへ倒れ、引かれた赤いカーペットをより紅く染めていく。
「あ、せっかくの魔女の魂と体なのに使い物にならなくしちゃった。惜しいことしたわ」
そう言って腰を上げると、子猫を連れてスピリの横を通り過ぎた。子猫はスピリに近づこうとしたが、鎖を引かれ、出来なかった。女王は扉を押し開けようと、手を扉に置いた時、突然、彼女の足元に魔法陣が広がった。
「な、何これ！？」
慌てて振り向くと、紅いカーペットの上に立ち、腹部に穴の開いていない魔女の姿があった。
「あ、貴女どうして……」
「他人のなら、と期待したのだけど魔法もダメね。それと、そんなに不老不死が望みなら叶えてあげる。私は今、よく分からない気持ちだから」
「まさか、貴女が不死の……」
女王の問いかけの途中で魔法陣が強く光り、その光は部屋に掛けられていた歴代の王たちの肖像画に吸い込まれていった。画家に描かせていたのであろう、若く美しい自らの肖像画に。
「永遠に生きなさい。美しい姿で老いることなく生き続けることが貴女の望みならば」
吐き捨てるように言った。そして、女王の身体は支えるものがなくなり、崩れ落ちた。

ティオナはいまだ、玄関に座り込んでいた。涙はもう出ていない、いや、出すことが出来ないと言うべきかもしれない。泣き腫らして真っ赤になった目は何もとらえておらず、ただ開いているだけ。血は通っているものの、死んでいるかのように身体が冷たかった。
しばらくした後、投げ出されていた右手に温かいものが触れた。何度も、何度も。何だろうと思い、右手を見ると、一匹の子猫がティオナの指を舐めていた。ティオナは何思うことなく、右手を動かし、子猫の頭を撫でた。子猫はしばらく撫でられた後、ティオナの目を見て、口を開いた。
「ただいま、お母さん」
その言葉を聞いた途端、ティオナは枯れ果てたはずの涙を流しながら、子猫を抱き上げた。二度と離さないという様に抱きしめた。

国を治める女王が何者かに殺されたというのに、衛兵の審査は入国時と同じくずさんなものだった。むしろスピリの耳には小声ではあるが感謝の言葉が聞こえたような気がした。
しばらく前に分かれ道があったことを覚えていたスピリは、今度は逆方向へ行ってみようと来た道を戻っていた。しばらく歩いていると、定位置であるスピリの肩に乗っていたフィールが口を開いた。
「人って、人の道を外れてまで生きていたいと願うものなんですかね……？」
「さぁ？　私には預かり知らぬ処だわ。もし、私が生きていたいと願っていたとしても、それでもあんなことまでして生きていたいとは思わないけど」

本人に自覚はないだろうが、再び吐き捨てるように返答するスピリ。彼女の半分まで埋まった心の中には思い出したばかりの感情が未だに燻っているようだった。
「主、主はこの国の出来事を見て、生きたいと思いますか、それとも死にたいと思っていますか？」
「愚問ね」
「……」
その返答に、そうですか、と声には出さないフィール。革命を起こし、平和に向かうであろう国には相応しくない、天然の曇天が空を覆っていた……

【次回へ続く】

【あとがき】

初めましての方は初めまして、二回目以降の方はお久しぶりです、荒月（こうづき）と申します。『温かいモノ《怒》』をお読み下さりありがとうございます。
前作の輪読会で様々な意見を頂いたうえで、これを書かせていただいたのですが、正直、ご意見を取り入れられている自信が殆どないです。自分の未熟さを再実感しました。本作の題名ではありませんが、温かい目でケアレスミス等、流していただけると幸いです。
最後になりますが、本作、『温かいモノ《怒》』をお読み下さり、本当にありがとうございました。

恋って何ですか？　（前編）（哲）

恋って何ですか？　（前編）
哲

　三年前のことだ。私は本の世界に浸っていた。頭を小突かれた。学校図書館という空間が復活してきた。振り向くと、呆れたような、苛立ったような顔をした背の高い男が私を見下ろしていた。彼は何か怒っているようだ。目を見て何となくZだと気づいた。Zに「ごめん」と言って、司書室に入る。
　そういえば定例会だったかな。私は後輩に鷹揚に声をかけて、席につき、足を組んだ。Zは座るなり私とおしゃべりをし始めた。一人でだんまりを決め込むよりはマシか。私は不愉快にさせない程度に相槌を打った。我が校の図書委員会には男子しかいないようだ。ほとんどの連中は残念がっているようだが。
「すみません。初回から遅れてしまって」
　小さな声が聞こえた。小さな、少女の声。私はZから目を逸らして、司書室の入り口の方に顔を向けた。彼女はそこはかとなく知的な雰囲気を醸し出している。私以外の人は「カワイイ」と形容するだろうが。
　Zは私につられて謎の女の子の姿を認めた。すると、ごく自然にその女の子を名前で呼んだ。私は不可思議なものでも見るようにZを見た。その女の子は机をはさんで私とZの正面に座った。
「Y、ここは初めてだよね」
　Zは陽気に言った。
「うん、初めて」
　Yと呼ばれた女の子はくぐもったような声で呟いた。
　ZとYはあたかも友人であるかのように親しく話し始めた。私はYの左上の空間を眺めて、時々Yの髪に目を移すなりすぐに目を逸らしていた。落ち着かない。落ち着かない。私は背後の書架から全然興味のない本を抜きだして、むさぼり読むふりをする。
「おーい、X。人の前で本なんて読んでんなよ」
　Zはそう言って、簡単に私の本を取り上げた。私はZに迷惑そうな顔を向けた。
「……あの」
「ん？　」
　Zはすぐに反応した。Yの方に目を向けると、彼女はそわそわして目を泳がせていた。
「……あの。Zさん、そちらの方は……」
　Zは待ってましたとばかりに、愉快そうに私を紹介しようとした。私はZを遮って言う。
「僕、Xっていいます。Zとはけっこう仲がいいんです」
　ああ、僕ってこんな大きな声出るんだ。そう思った。Yは、何だかわからないのだけれども、微笑んだ。ああ全く情けない。汚らしい気持ちだ。Zは何も言わなかった。
　Z、あれは人付き合いの上手い男で、話していて心なしか陽気になる。彼のおかげで、私

とZとYは互いの家に出入りするほどの仲になった。しかし私の誕生日にカラオケを企画するとは何という物好きなのだろうか。
　カラオケに行く道中で、ZとYは親しげに会話していた。私は彼らの背後二メートルあたりを歩いている。何で他の人の話というのはこんなにも聞き取りづらいのだろうか。イライラする。この焦りに似た、浮いては消える気持ちは何だろうか。
　カラオケボックスは比較的広い部屋になった。広いのはいいことだ。狭いと暑苦しくてしょうがない。誰も頼んでいないのにZは勝手にマイクを握って、私の知らない口上を並べ立てた。Zというのは饒舌ではある。ところがその選曲は絶望的につまらない。お説教くさくて、中身がなく、訳が分からない。Zが歌っている間、私はトイレで時間を潰すようにしていた。でも今日は人数が少ないからある程度部屋にいられる。私がとんでもなく暗いらしい歌を歌い終えたとき、Yのコップが空になっているのに気づいた。Zは他の部屋にいる知り合いを茶化しに行っている。
「Yさん、ジュース汲んでこようか」
　私は親しげに聞いた。口調が変な気がする。
「うん。お願い」
　Yは明るそうな声で応えた。彼女の笑顔はどうも営業スマイルとは思えない。これがいわゆる「思わせぶりな態度」というものだろうか。きっと。
　ジュースを汲んで戻ってくると、Zが歌っていた。去年大ヒットした映画の主題歌だった。どうやらハートフルストーリーらしいが、Zと一緒に観に行ったときは、あまりにありふれた結末に呆れ果てた。涙なんか一滴も流さなかった。またずいぶんとつまらん曲を選んだものだ。いつものZよりはよっぽどマシだが。
　Yに目を移すと、彼女は無邪気に笑いながら、一緒になって歌っていた。そうか、誰にでも俗物的な笑顔というものはあるのだな。まあ、仕方がない。
　日をまたぎそうになり、帰ろうかどうかものすごく迷った。ZとYはまだ気持ちよさそうに歌っていた。まだ帰らないでおこうか。結局、夜中の三時まで続けた。

　私は時々、返却本の中をチラ見しつつ、書架に差し込んでいた。本当はもっと本を読みたいけれど、今は期末試験対策で忙しいからどうしようもない。Yはカウンター当番をしていた。カウンターに近い文庫本の棚を整理している時に、Yの方を一回だけ見た。Yは真面目に職務をこなしていた。一瞬だけYと目が合ったような気がした。本当は単に不思議に思っただけかもしれないが、そのときはYが迷惑そうにしていると思って、慌てて目を逸らせた。
　秋の定例会の後、私はいつもの議論仲間とベラベラしゃべっていた。彼も私なんかよりずっと聡明で、彼とは何時間だってしゃべっていられる。
　Zは普段通りの軽いノリでYに話しかけていた。
「Y、ちょっといいかい」
　Zがそう言うのは確実に聞こえてきた。YとZが二人だけ司書室から出ていくのが見えた。折しも私は彼と心身二元論について議論を戦わせている最中だった。私は二元論者だが、彼もしつこく

食い下がってくる。
「君は心というものは物理空間に存在しないというが、じゃあ、ストレスのせいで胃が溶ける現象をどう説明するつもりなんだ」
「松果腺があるからだよ」
　私は冗談めかして言った。彼には急に用事ができたと言って、急いでYとZの跡を追った。

　駐輪場でYとZがプリントを見ながら何やら話していた。私は悪いとは思いつつ、二人の傍に駆け寄ってZを呼んだ。
「何だお前か。驚かせんなよ」
　Zは素早くプリントを背中に隠した。Yはバツが悪そうな顔をしていた。
「部外者は帰ってくれ……とは、言わないさ。お前だからな。ただし、絶対に外部に漏らすなよ。まあ、お前なら大丈夫だろうが」
　Zはそう言って、いたずらっぽく笑みを浮かべた。
　どうやら二人とも合唱部に入っているらしい。Zはさっき引退する三年生向けのサプライズコンサートの打ち合わせをしていたようだ。
「俺がバスで、Yはアルト。俺なんかどうでもいいんだけど、Yが凄いの。ウチの顧問が日常的に褒めるのはYだけだぜ。しかも聞いて驚け、Yは今年の県内コンサートで一年生にしてソロパートを務めちゃったんだ。俺はそれを聞いたとき、天地がひっくり返るような気分がしたよ。ウチの顧問の実力主義には呆れるけど、俺は嬉しかった」
　Zは嬉々として語る。私はYに気を取られていた。Yは特にZの話に口を挟むでもなく、手で顔を隠していた。恥ずかしいのだろうか。
　二人だけで司書室から出ていくのが強烈に気になったものだから来てみたが、どうも気のせいだったようだ。合唱部のサプライズコンサートなど私には関係のないことだ。時間を無駄にした。いや、そんなに無駄でもないか。わからない。

　どうも私のことを無類の映画好きだと勘違いしているようで、自分の趣味を押し付けてくる奴がいる。本当に趣味が合わなくて、正直Zと観に行った方が良いものに巡り合える可能性がある。Zも当たりはずれが激しいが。
　そいつから紙袋で何枚かビデオを譲られた。曰く、もうケースに入らないらしい。何でこの男は自分でケースを買わないんだ。とはいえ、装丁を見る限りでは三十年前ぐらいの古い映画のようなので、多少の期待を込めて遠慮なくもらっておいた。
　家に帰って、早速一本再生してみた。ああ、よくある恋愛ものだ。どうせこのあとは、女が親の決めた結婚相手に嫁ぐことになってしまって、悲哀の別れっていう展開だろう。ほらね、やっぱり。私は別の映画に替えようとして、リモコンの停止ボタンを押そうとしたが、手が止まった。それはラストシーンだった。

女は男の胸ですすり泣く。男も女の背中をさすってなだめようとするが、その目にも涙がにじんでいる。男は涙声で言う。
「節子ォ。つらいなア。でも行くんだ。もう電車が出る」
発車のアナウンスが入り、女は男と最後の抱擁をして、電車に乗る。その途端に、ドアが閉まる。動く車窓の女がアップで映される。無理に笑顔を作って手を振っている。次に女を追って走る男の姿が映る。男は疲れ果ててその場で膝をつく。電車が完全に闇に隠れた後で、半泣き半笑いの男の顔が映される。カメラがホームの屋根を映しながら、上空に引いて、エンディングを迎える。

思い出した。一年の時初めてZと見た恋愛ものの映画だ。確か、Z自身はストーリーを楽しむというよりは、単に女優目当てだったということは覚えている。記憶がよみがえってくる。

私はエンドロールを飛ばして、強引にビデオの再生を停止した。
「おーい。いいところで止めるなよ。お前は大先生の名演技がそんなに惜しくないのか」
「彼女には一部に熱狂的なファンがいたらしいけど、下馬評はあまりよろしくなかったようだよ。僕も彼女の演技はあざとすぎてあまり好きじゃない」
Zが文句を言ったが、私は冷たく突っ返した。Zはポテトチップスを頬張りながら、場違いに真剣になって力説する。
「いいか。お前はあざといというが、大先生の魅力はまさにそこなんだ。美人でありながら、それを感じさせない素朴な演技。しかしそれでいて玄人にはわかる仕掛けをところどころに仕込んでいるんだ。だから物の情緒が分からない大概の男はコロッと騙されてしまう」
私はただ純粋に気になって聞いた。
「ちょっと待って。『コロッと騙される』ってどういうこと？　」
Zは即答した。
「惚れるってことさ。あれを見て惚れない男はいない。それともお前は惚れなかったのか」
「『惚れる』ってどういうことなの？　」
Zはまるで何かおかしなものでも見るかのように、笑いながら言う。
「お前、それ冗談で言っているんじゃないだろうな。じゃあ聞くけどさ。好きな女が目の前で可愛くしていたとしても、お前は何とも思わないのか」
「うん。というよりも、みんなは、やれ誰かが誰かのことを好きだ、誰かと誰かがくっついたなんていうけど、僕はその好きになるって何なのかよく判らないんだ」
「わざとらしいや」
Zは訝（いぶか）るような目を向けた。私の本心だった。なぜカップルはあれほどあっさりと、手をつなぐのか。なぜ抱き合うのか。なぜ臆面もなく愛の言葉を囁きあうのか。まるでさっぱりわからない。恋ってそういうものだろうか。きっと彼らは私とは別の世界にいるのだ。いや、むしろ脳みその構造が違うのか。

Zは半分ふざけて色々質問してきたが、まったく話が噛み合わなかった。

黄昏時、図書館に微かに夕日が差し込む。節電期間のため、照明は弱い。委員会の仕事さえなければ、ずっとソファに寝そべって読書しているのだが。奥の書架の陰に隠れてYの姿は見えない。私は何となく貸出台帳を手に取って眺める。

11/15 A　ジュール・ヴェルヌ『十五少年漂流記』
　　同　　E　ジョルジュ・サンド『愛の妖精』
　　同　　Y　ヴィクトル・ユーゴー『レ・ミゼラブル』4

私はすぐに貸出台帳から目を離した。ちょうどYが書架の間から出てくるのが見えた。私は彼女に手招きをした。彼女は小走りで来て、私の隣に立った。私は貸出台帳を持って、彼女を司書室に招き入れた。
「Yさん、さっき台帳見てたんだけど、Yさんユーゴーの『レ・ミゼラブル』借りてるね。もう全部読んだ？　」
私はパイプ椅子に腰かけて、うわずったような声で言った。
「うん。でも何で」
Yは椅子に座りながら、前よりは明るい声で言う。
「いやあ、まあ、僕もユーゴーの『レ・ミゼラブル』は好きだからさ。まだ全部は読んでないけど」
私は、慎重に、慎重に言った。今日のYは物腰の柔らかそうな様子をしていた。両手を膝の上に置いて、少し首をかしげて、私の方を向いている。どうしよう。何も出てこない。気まずい数秒間が流れた。
「ん？　」
Yは微笑みながら、呟いた。私は慌てて言う。
「ほら、『レ・ミゼラブル』にエポニーヌっていう子がいたと思うんだけど、彼女は結局どうなったんだい？　」
「さあ、どうなったのでしょう。そこはXさんが読んでみたらどうですか」
Yはからかうように言った。意外だ。いや、前にZが「慣れるとYにも茶目っ気はあるよ」と言っていたような気がする。私の口角は自然と上がった。人生でこれだけ口角が上がったのは初めてなような気がする。
私とYはひとしきり好きな本の話題で盛り上がった。愉快だ。外がすっかり闇に覆われたときに、予備校があるからと言って、Yは足早に帰ってしまった。彼女が帰った後で、私は誰もいない司書室で本を読んでいた。これがいわゆる「役得」ってやつか。私はニヤッと笑った。でも、結局先生に追い出された。

一年以上見続けた景色にはもはや注意は向かない。私は夜道を歩きながら、一つの思いにとら

われていた。Yが私をからかったときに、胸騒ぎのようなものがしたのだ。今までに感じたことのない、何か胸をくすぐられるような気持ちだ。何だろうか、これは。まてよ。これこそ「恋」なのではないか。これこそ「恋」なのではないだろうか。もしこのとき、歩行者が私の顔を注意して見たならば、相当に気持ちの悪い男だと思ったことだろう。私のような男がYさんに近づいていいのだろうか。これが「恋」だとして結局何なんだ。思考がドツボにはまってゆく。
　電車に乗るまでは、私はかなり混乱していた。が、電車の中で明日提出の課題に気づいたせいで、それまで考えていたことは吹き飛んでしまった。

　どうも最近Zの行動が怪しい。まず私のメールに全然返事をよこさなくなった。ZはAO入試を考えているから、そんなに忙しくないはずなのだが。
　模試で失敗して、ものすごくイラついていたので、久しぶりに私の方からZをカラオケに誘うことにした。ところが、さんざん着信音を聞かされた後で、こうのたまう。
「いやー、今俺やばいの」
「何がやばいんだ」
「ほら部活の方でさ。俺だけ一日百回練習するよう命じられてるの。あの顧問俺にだけ当たり強いからな。だから、今日はムリ。ごめん」
「わかったよ。じゃあね」
　受話器を降ろす。それ以来、こちらからは誘わないことにした。Zからも全然お誘いが来なくなった。以前はしつこくて迷惑だったのだが。
　以前Zはずいぶん金遣いが荒くて、誰かの誕生日の時には平気でステーキ屋に連れていってくれたものだが、どうも最近は弱気になってしまった。ジュース一本おごってくれやしない。
　そんな状態でも、私とYの誕生日パーティーだけは企画してくれるのだから、つくづくキテレツな男だ。その日も、Yの誕生日パーティーの最中だった。私は今年の誕生日プレゼントには高級ボールペンを用意した。彼女の夢は作家だから、たぶんハズレということはないと思う。
　ところが、なんとZは、Yの大好きなアイドルのサイン入りポスターをプレゼントしてしたのだ。Zはこのためだけに葉書を百枚出したらしい。最初は、たかが誕生日プレゼントのために馬鹿じゃないのかと思ったが、彼女の満面の笑みを目撃するにつけてそんな気持ちもしぼんでいった。

　それから数カ月が経ち、二年生の日々も終わりを告げようとしていた。とりあえず教室の私物は全部撤去しなければならない。私は先生に全員の机の中が空っぽかどうか確認する役目を押し付けられた。
　だらだらと引き出しを覗き込んでいると、Zの机にB5のノートが入っていた。取り出してみる。ノートの表紙にはZの字で「交換日記」と書かれていた。へー、Zにそんな趣味があったんだ。どれ、どうせロクなこと書いていないんだろう。これでも私は最低限の道理はわきまえているつもりであるため、絶対に言いふらさないことを心に誓って、「交換日記」の表紙をめくる。

（前編終わり）

義を以って虫を制す（陸也）

義を以って虫を制す
陸也

　『ぜんたぁぁああいっ！　気を付け！』
　三十程の数の黒々とした彼らは、皆まっすぐ並び、号令をかける者の指示を待っているようだ。
『みな揃っているか？　確認するぞ。点呼はじめ！』
　号令に従い、一！　二！　三！　四！　……と元気よく彼らは自分の通し番号を言っていく。
『二七！』
『二九！……ん？』
『どうした？　二八番はいないのか！　確認しろ！　二八番は誰だ！』
　号令をかけていた者が声を張る。彼らは咄嗟に周囲の者たちと確認をとる。そしてその中の一匹が答えた。
『隊長！　二八番は立花軍曹です！』
　先程から号令をかけている隊長と呼ばれた者は額に青筋を浮かべたかのように激怒する。
『また立花軍曹か！　おおかたどうせ寝坊だろう！　今すぐ叩き起こして来い！』
『『『イエス、マム！』』』
　蜘蛛の子を散らすように彼らはすぐ近くの穴に潜っていく。それを見ながら隊長は深いため息を吐いた。

＊

　Ｎ市に今年も春がやってきた。天気のいい朝、食品関係のＡ社に勤める安藤学（あんどう　まなぶ）は入社三年目のバリバリの営業マンであり、新年度早々、Ｋ社に商談に行くことになっていた。身長は大体一七〇センチを超える安藤はスーツをビシッと決め、片手にノートパソコンを引っさげ、会社の玄関口で相方である先輩上司を、朝日に目を細めながら待っていた。
「あ、安藤さん。おはようございます」
　そう声をかけてきたのは件の上司ではなく、同僚の佐藤花（さとう　はな）だった。会社から出てきたところを見るに、彼女もこれから会社から出るようだ。
「おはようございます。佐藤さん。佐藤さんもこれから商談ですか？」
「ええ。新年度早々ですが……。いえ、新年度が始まったからこそ張り切っていかないと」
　そういう彼女の表情はやる気に満ち満ちている。
「安藤さん。も、ってことは安藤さんもこれから商談ですか？」
「はい。これから毎度のことながら石川さんと合流してから向かう予定です」
　石川さんとは先ほどから安藤が待っている先輩であり、直属の上司である石川春雄（いしかわ　はるお）のことである。彼は今年で入社十二年目のベテランであり、普段はとても優しいが、怒

ると人が変わったように怖く、鬼上司として恐れられている。しかし、裏を返せばそれは仕事に真剣である証拠であり、とてもまじめな人として会社内でも評価の高い人物である。
「そうなんですか。え、でもまだいらっしゃってないってことは……もしかして遅刻？　あの石川さんが？」
「いえ、さすがに違いますよ。僕が早く来て待っているだけですから。新年度ですしね」
「なんだ、びっくりしましたよ。石川さんのことだからあり得ないとは思いましたけど。もしかしたらということもありますから」
　佐藤はほっと息をついた。
「そういえば、今日は佐藤さん一人なんですか？」
「あ」
　安藤のその言葉に反応して咄嗟に腕に巻かれた時計を確認する佐藤。途端に顔を青くして安藤に言う。
「もうこんな時間！　今日は向こうで合流するんでした！　それでは安藤さん、今日も一日頑張りましょう！」
　そう言って彼女は足早に去っていった。
　石川が来るまで、五分前には来ると考えても十分近くある残りの時間をどう過ごそうかと考えていると、安藤の立っている近くから声が聞こえてきた。
『――』
　安藤は何も聞き取れなかったが、声の主には心当たりがあった。彼は物心ついた時から時々、とある声が聞こえることがあった。そんな彼の表情は心なしか楽しそうだ。
『――っ。――け』
　周りには何もそれらしいものは見つからない。もしかしてと、安藤は視点を下げてみる。会社の玄関口、そこにある花壇のちょうどその脇に安藤は立っているのだが、声はまさしくその花壇から聞こえてくるようだ。安藤はしゃがんで花壇を見る。
　そして、話は冒頭につながる。

＊

『隊長！　立花軍曹を連行してきました！』
『おーしよくやった。……立花軍曹、何度言ったら分かるんだ？』
『ひっ、も、申し訳ありません！　ボ、ボクは、その……お、お許しください！』
　と、土下座を決め込む立花軍曹。
『許す、だと？　何をバカなことを言っている。これで何度目だ？　既に両足で数えきれないくらい寝坊してるだろうが！　罰として今度の訓練は厳しめで行くからな』
『そ、そんな～』
　立花軍曹は絶望に染まったような顔をする。周りからも当然だという目を向けられる。
『ん？　お前達、何か勘違いをしてないか？　これは連帯責任だ。お前達にも同じことをしても

らうからな』
『『『えええええ』』』

＊

　安藤は蟻達のそんなやり取りを微笑ましそうに見ていた。
　そう、彼らは蟻である。
『軍曹のせいで！』
『なんで私たちまで！』
『や、やめてくださーい』
　ボコスカと八つ当たりを受ける立花軍曹。隊長はそれを見ながら楽しそうに笑う。

　阿鼻叫喚となった光景を、笑いをこらえながら見ている安藤に慣れ親しんだ声がかけられる。
「おはよう、安藤君」
　安藤はその声を聞いてすぐに立ち上がり、挨拶を返す。
「おはようございます、石川さん」
　声をかけてきたのは、先程から待っていた石川春雄その人だった。身長は安藤と同じくらいで、白髪の混じった髪を七三分けにし、体系はややぽっちゃりしているが、いかにもできる商社マンですという顔つきをしている。
「今日はいい天気だな」
　そう言って石川は天を仰ぐ。
「そうですね。早速、向かいますか？」
「おお、時間は待ってはくれないからな。時は金なりだ」
　時は金なりと、石川はよく口にする。もう口癖のようなものである。
「では、行きましょう」
　雲一つない空と心地よい太陽の光を浴びながら、段々と喧騒を大きくする街を二人は歩きだす。
　今日も忙しい一日がスタートする。

＊

　所変わって彼らの足元。蟻達にも長い一日が始まろうとしていた。
『よーし、お前ら、いい加減じゃれ合うのを止めろ』
　隊長がそう言うと今の今まで立花軍曹をタコ殴りにしていた蟻達はピタッと動きを止め、横一列にサッと整列する。
　横に転がる立花軍曹を除いて。
『立花軍曹、いつまで寝ているつもりだ？　まだ今日は始まったばかりだ。さっさと整列しろ』

『ぐ、ぐふ。い、いえす、まむ』
　明らかにボロボロな立花軍曹はよろよろと起き上がると列の一番端に並んだ。そして、隊長は全員を見て言う。
『よし、これで揃ったな。今日もやることはいつもと変わらん。我らが女王様の為に死力を尽くして食糧を探せ。以上だ。……何か質問はあるか？』
　隊長は質問が出ないことを確認すると今一度話し出す。
『今日は六人五班に分けて活動する。まずはα班からだが、班長は私だ。それと、そうだな、青木二等兵！』
『は！　よろしくお願いします』
　ビシッと青木が敬礼する。
『次、坂田兵長！』
『は、はいっ　よろしくお願いしましゅ！』
　顔を赤くする坂田兵長。この中では最年少だ。
『うむ、進藤上等兵！』
『はーい、よろしくねー』
　間延びするような声で返事をする進藤上等兵。その態度に真面目な青木二等兵が食って掛かる。
『なんだその返事は！　貴殿はそれでも我らが女王様の働きアリか！　もうちょっと自覚を持ったらどうなんだ！』
『相変わらず真面目ちゃんだねぇ二等兵は、カルシウム足りてないんじゃないの？』
『なんだと？』
『ふん』
『おいお前ら、喧嘩なら他所でやれ』
　隊長が一喝していったんその場は収まる。
『全く、まぁいい。次、竹田衛生兵！』
『はーい』
　竹田衛生兵。衛生兵という肩書のとおり、血の気の多い性格はしておらず、どこかのほほんとした雰囲気を纏っている。
『α班は次で最後だな。あーそうだな……立花軍曹！』
『は、はい？　ボクですか？』
『ああそうだ。今回はお前もα班に入ってもらう』
『ええー、隊長と一緒ですか……』
『不満か？』
『い、いえ、ボク、頑張らせていただきます』
　そう言って立花軍曹は肩を落とす。目を付けられて当然だ、自業自得だと周りから冷ややかな視線を浴びる。
『そうか。……よし他の班も決めてしまおう。時間は待ってはくれないからな。では、次にβ班か

らだが――』

＊

　安藤、石川は取引先である小売会社、Ｋ社を訪れていた。その内容は、自社であるＡ社の、加工食品における新商品を置いてもらえないだろうかという商談だ。二人はＫ社内の会議室に通され、相手方のバイヤーを待っていた。
「石川さん、今日は上手くいくといいですね」
「そうだな。まぁ、お得意様なのだからよほどのことがない限り上手くいくだろう。先に、資料も送らせてもらっているしな」

　五分程して、一人の男性が会議室に入ってきた。
「おはようございます。わたくし、弊社のバイヤーを勤めます、山崎と申します。今日はよろしくお願いします」
　と言いながら山崎は名刺を差し出す。
「おはようございます。私はＡ社の安藤と申します」
「同じく、私は石川と申します。本日は弊社の商談に乗っていただき、誠にありがとうございます」
　安藤、石川両名も併せて名刺を出す。
「いえいえ、とんでもない。Ａ社様とは懇意にさせてもらっておりますので」
　軽く会話をしながら互いに名刺を交換し合う。
　時刻を確認すると、十時を過ぎであった。安藤は時計を一度確認してから口を開く。
「時間も押していることですし、そろそろ商談の方を始めたいと思うのですが……」
「そうですな。あぁ、とりあえずお掛け下さい」
　そう言って山崎は安藤と石川に座るように促す。
　今回Ａ社がプレゼンしようとしているのは、冷凍食品の新商品で、オーソドックスなものからちょっとした変わり種など多岐にわたる。この春から、春休み明けの学生や社会人の弁当は増えていくだろうと考えられる。そこで主婦層を標的とし、今販売している冷凍食品と入れ替えのような形で新商品に各糧で活躍してもらおう、というわけだ。
　山崎の口ぶりから、それなりに好感触ではないかと石川は感じた。そして、カバンの中からいくつかの資料を取り出す。
「これが本日の資料です。もっとも、先日送らせて頂いた、先行資料についても、改めて説明しながら進めたいと思います」
　石川のその言葉に山崎は一つ頷いて答える。
「それはありがたいです。実は、先行資料の段階でも十分な理解を得たのですが、慎重に検討をするに越したことはありませんからね」

　その言葉に安藤が反応する。
「ありがとうございます。資料を作った者にその言葉、伝えておきますね。きっと喜ぶと思いますので……」
　資料については、Ａ社で検討を重ねたうえでの提出であるので、読みにくかったり、必要な情報が不足しているなんてことは基本的には無い。しかし、お得意様とはいえ、他社の人間の目から見て、分かりやすい資料だったと評価してもらえることは嬉しいものである。
「いえいえ、とんでもない。こちらとしましても、資料の分かりやすさというのは仕事の効率にかかわってきますので、大変助かっております」
　時間が押しているというのに、褒め合い合戦になっている二人を見て、石川は間を取り持って言う。
「まあまあ、それぐらいにして本格的に商談に入りましょう。時は金なりです」
　安藤と山崎はお互いに咳払いをして場を取り繕う。
　石川は続ける。
「まず、先行資料についてですが、これは安藤君にやってもらいます」
「はい。では、早速。今回は冷凍食品を中心にプレゼンさせて頂きます」
　そう言いつつ、資料を安藤は取り出す。今回の商談で使用する資料と先行資料である。それらを山崎に手渡したところで、山崎が口を開く。
「ええ、拝見しましたところ、冷凍食品としてはオーソドックスなものが多く、そう言った意味では、収益の面でも、安定したものが望めるのではと自社では考えております」
　石川は隣で、うんうんと頷いている。
「はい、その通りです。この時期は特に弁当作りが増える主婦層を狙い目に、今ある冷凍食品と入れ替わりのような形で参入させることで、より大きな収益を望めるのではないかと考えております。」
「……なるほど」
　真剣に聞いてくれる山崎に、安藤は好感触を得ながら続ける。
「ええ、その他にも弊社では――」
　その後も、安藤の説明は続く。山崎もそれを真剣に聞いているようだ。
　商談は順調に進んでいく……。

＊

　一方、Ａ社裏手、α班はそこで食料探しをしていた。通りに面する表とは違い、人の手が行き届いてないそこは雑草がいたるところから伸びていた。うっそうとしたその空間は虫が苦手な人間にとっては生理的嫌悪感を感じる場ではある。
『皆、何か見つかったか？』
　隊長が声をかけるも、班員からは否定的な返事しか返ってこない。無理もないだろう。雑草の中を探すということは平面的な捜索範囲の他に、上下も入ってくるということなのだから。

『たいちょー、どうしますかー？』
　進藤上等兵が問いかける。流石に、このままではまずいと彼女も思ったのだろう。
『私としては、他の場所に変えた方がいいのではないかと提案します』
　と青木二等兵。
『ちょっと―、私はたいちょーに聞いてるんだけど―』
『ふん、人に聞く前にまずは自分で考えたらどうだ？』
『何よ！……』
『なんだと！……』
『『……はぁ』』
　成果のないこの状況に、いつもの喧嘩をする気も起きないらしい。
『ボク、もう疲れちゃいましたよ』
　と、一匹呟く立花軍曹。
『何を言ってるんだ。何十時間も探したわけではないだろうに』
　隊長はそう言うが、内心ではこう長時間も成果のなしに時間だけが過ぎるというものは精神的にストレスが溜まるものだと分かっていた。
　隊長は顎に足を当て、考えるが、結局、いい案は思いつかなかった。

　それから、少しだけ時間が過ぎた頃、雑草の葉っぱ上を一同が血眼になって探す中、集中力を切らした坂田兵長が足を滑らせてしまった。
『うわ！』
　坂田兵長は、咄嗟に何かを掴んだ。
『え、な、なんでボクまで！？』
　しかし、それは立花軍曹の足だったようだ。結果、二匹は仲良く葉っぱから滑り落ちて、地面にダイブする。
『あたた……』
『うーん……』
　どうやら無事のようだ。坂田兵長は目を回してしまっているが。。
『大丈夫？　ケガはない？』
　そう竹田兵長は落ちた二匹に声をかける。
　立花軍曹は隣でいまだ目を回している坂田兵長を見て、次に上を見ながら答えた。
『はい！　ボクも兵長も無事です！　兵長は目を回してしまっていますが……』
　立花軍曹の返事を聞いて、上の班員たちはホッとする。
『わかったわ。今から行くからそこでじっとしててね』
『了解です。兵長、しっかりしてください』
『――ハッ、な、なにが……あ、も、申し訳ありません！　立花軍曹！』
『そんなに謝らなくたっていいよ。ボクだってよくあることなんだから』
　こんなことよくあるのはお前だけだ、と上から総突っ込みが入るが、立花軍曹には聞こえてい

ないようだ。
『これから衛生兵が来てくれるみたいだから、それまで待機してましょうか』
『了解っす』
　和やかなムードになったところで、上から見ていた進藤上等兵が何かに気付く。
『んー？　二等兵、軍曹と兵長の近くにある、あの白いのって何かしらー？』
『何？　白いの？　あれは……』
　見れば、下の二匹の近くに、地面が盛り上がり、そこから白い糸のようなものが飛び出して、雑草の茎にまで伸びているのが分かる。青木二等兵はどこか見覚えのある物のようだ。
『……まさか、……隊長！』
　青木二等兵は何か焦ったように隊長を呼ぶ。その顔は見てはいけないものを見てしまったかのようだ。
『どうした？　何かあったのか？　二等――』
『――地蜘蛛です！　あれは地蜘蛛の巣です！』
『――なんだと！』
　上にいるα班員に動揺が走る。なぜなら地蜘蛛は蟻の天敵だからである。地蜘蛛は地上性の蜘蛛であり、地面の中に巣をつくる。
　隊長は状況をすぐに判断し、命令を飛ばす。
『衛生兵！　ストップだ！』
『は、はい？』
　今まさに下に行こうとしていた竹田衛生兵は止まり、何が何だかわからず困惑して隊長の方に向く。相当焦っているのはその声色から伝わってきていた。
　続いて、進藤上等兵が下の二匹に叫んだ。
『兵長！　軍曹！　今すぐ上まで上がってきなさい！』
『『？』』
　上が騒がしいことに気付いた立花軍曹と坂田兵長だったが。疑問を浮かべる前にいきなり進藤上等兵の焦った声を聞いて困惑する。いつものほほんとした彼女がいきなり鋭い声を出したからだ。
　しかし、タイミングの悪いことに、何かを破る音が二匹の近くから聞こえた。
『……遅かったか……』
　青木二等兵が思わず呟く。
　一難去ってまた一難。立花軍曹、坂田兵長の目の前には爛々と光る八つの目が二匹を見つめていた。

＊

　Ｋ社では順調に商談が進んでいた。安藤が説明し、石川が補足することで滞りなく進んだ。一通りプレゼンが済んだ後、丁度、お昼時ということで休憩がてらランチを二人は山崎と共に済

ませ、お互いに良い雰囲気であった。
ところが、何事にも山あれば谷がある。再び商談に入った矢先、これまで意見の相違のなかった両者で初めて食い違いが発生することとなった。
「……ですから、弊社としては、原材料については国内産を取り入れることはできません」
　山崎は困った顔でそう言った。
「そこを何とかならないのですか？」
　安藤は必死に山崎に訴える。石川は腕を組み、考えを巡らせているようだ。
「私としては、確かに国内産というキャッチフレーズはとても魅力的です――」
「なら――」
「しかし、これは、まだ企画の段階なのです。確実に利益が出るという証拠がない以上、人件費や諸々を考えれば、弊社としては外国産のものを取り扱うという選択を取る他ありません」

　ここで、石川が口を挟む。
「山崎さん、最終的な商品の値を上げるということも不可能ですか？」
「はい、それにつきましては各販売店との相談になりますので、私からは何とも……」
「そうですか……分かりました。では、国産品を使用する冷凍食品の割合を減らすということでどうでしょうか」
「石川さん！」
　安藤は石川に非難するような目を向ける。
「安藤君、少し落ち着きなさい」
　対して石川は落ち着いて安藤の目を見つめる。安藤はまだ何か言いたげだったがそのまま口をつぐんだ。そして、石川と共に、山崎の返答を待つ。
　山崎はしばらく考えた後、携帯を取り出した。
「少し失礼」
　そう言って会議室から一時退出する。

　「大変失礼しました」
　少し経った後、そう言って山崎は戻ってきた。席に座ったところで石川が話しかける
「どうでしたか？　山崎さん。今のは確認の電話でしょう？」
「ええ、そうです。……今、確認を取ったところ、その案でしたら大丈夫でしょうとのことでした。これで合意ということでいかがでしょう」
　石川はその答えに一つ微笑み、頷いた。

「今日はとても有意義な一日でした。しかし、石川さんはやり手ですね。結局、国産品の使用は

認めることになってしまいました」
　山崎のその言葉に、安藤はハっとする。石川は最初からこれが狙いだったのかと。あらかじめ高い要求をして、そこから徐々に下げることで目標のものを引き出すという、よくある交渉術ではある。今回は安藤の高い要求から、国産品の使用というところまで引き出したということだ。安藤はダシに使われて不満を覚えてはいるが、それ以上に石川のその手腕に感心したのだった。
「いえいえ、そうでもないですよ。それでは、今日のところはこの辺で」
「ええ、ありがとうございました」
　三人は互いに握手を交わし、会議室を出る。安藤と石川はそのままＫ社から出て、自社であるＡ社に報告に向かう。

　石川と共にＡ社まで戻る電車の中、安藤は誰の目から見ても落ち込んでいるのが分かった。新年度一発目とあって、やる気が入り過ぎていたものあるだろうと考えるが、それは言い訳にしかならず、かといって開き直ることのできる豪胆な精神を持ち合わせてもいないため、悶々と悩み続けるしかなかった。
「悩むことが出来るのは、若者の特権だよ安藤君。それこそ経験さ。今の内に悩むだけ悩み倒して、将来、悩むことの無いようにすることが大事なんだよ」
　そう石川は言うが、安藤には気休めにしか聞こえなかった。
「石川さん、そう言っていただけるのはありがたいです。……やはり、そういうものなんでしょうか」
「そういうものだよ、安藤君」

　「今日は歩いて戻ることにします」
　　安藤は電車から降りるなり開口一番そう言った。普段なら駅からはタクシーで五分程なのだが、経費から落ちるため、皆遠慮せず利用する。ただ、今日の安藤は歩きたい気分だった。
「うむ、そうか。では、先に戻っているよ」

　丁度、安藤がＡ社の玄関口に差し掛かった時、ふと、今朝も聞いたような声が安藤を引き留める。
「あれ？　安藤さんじゃないですか」
「……佐藤さん？」
　同僚の佐藤花だった。
「安藤さん、今戻ったばかりですか？」
　そういう彼女もちょうどたった今戻ってきたところのようだ。とんだ偶然もあったものだ。
「はい。今、まさしくちょうど戻ったところです」
　佐藤は、安藤の今朝のやる気に満ち溢れていた様子と今とでは、どこか違うような違和感を感じる。

「ん？　安藤さん、どうしましたか？　なんか元気ないですよ」
「ええ、実は――ということがありまして」
「はー、なるほどー、安藤君らしい悩みだね」
「そうかもしれませんね。まぁ、今歩いてきて頭を冷やしてきたところなので、明日にはまた頑張れそうですよ」
　一通り愚痴を聞いてもらって、ある程度すっきりしたようだ。そんな安藤を見て佐藤は一つ微笑み、あっと自分のスーツのポケットを探る。
「佐藤さん？　どうしました？」
「あ、いえ、どうってほどでもないんですけど……あ！　あった」
　と言って、佐藤はポケットから包み紙に包まれた飴を取り出す。
「人からの貰い物なんですけど、よかったらどうぞ。これはレモン味です。私の分はありますので」
「ああ、なんか申し訳ないです。気を遣わせてしまって」
　と言いつつも、安藤は飴を受け取り、口に含もうとする。
　しかし、包み紙から出したその時、飴は、手から転がり落ちてしまった。
「「あ」」
　と二人は声を揃えるが時すでに遅し。隣にある花壇の中に落ちていってしまった。
「もう、安藤君！　何してるんですか」
「す、すみません……」
　安藤が謝り、一瞬沈黙が二人の間に訪れる。
　しかし、数秒を置いてプッと二人は笑い出し、もうしょうがないと会社の中に入っていった。その後、安藤は佐藤からもう一つ飴を貰えたとか貰えなかったとか。

＊

　所変わって、Ａ社裏手、そこでは極度の緊張感が辺りを支配していた。その中心にいるのは、立花軍曹と坂田兵長、そして彼女らの前に姿を現した地蜘蛛であった。
『『ひっ』』
　突如姿を現した地蜘蛛に恐れを抱く立花軍曹と坂田兵長。それもそうだろう。いきなり天敵が目の前に現れれば誰でもそうなる。
『た、たいちょー！　どうするんですー？』
『とりあえず落ち着くんだ。すぐに下の二匹を襲わないあたり、なにかあるんだろう』
　すると青木二等兵が何か思い出したようだ。
『隊長！　確かに、地蜘蛛は我々の天敵ではありますが、ひどく臆病だとも聞きます』
　竹田衛生兵もそれに続く。
『もしかしたら、つい、出て来たはいいけど巣からは離れたくないってことなのかしらね』
『なら……軍曹！　兵長！　そのままゆっくり下がって距離をとるんだ！』

　地蜘蛛は普通、巣の表面に餌となる小動物が触れた時に出てくるのだが、今回は先に出てしまっている。その上に極度の緊張感に呑まれてしまっているようで、逃げるなら今しかない。
　立花軍曹は持てる限りの勇気を引き絞って隣の兵長と共に、じりじりと距離を開けていく。
『坂田兵長、ゆっくり……ゆっくりですよ』
『りょ……了解であります』
　ここまでは順調にきている。それでも、隊長にはどこか拭い切れない不安が頭の中を支配していた。なにか見逃していることがあるのではないか。蜘蛛から距離をとっていき、ある程度離れたところで、助かるのでは、という空気が漂う。だが、その油断が命取りだった。
　――ズルッ
『やば！』
　完全に気が抜けていたのだろう。立花軍曹が足元を滑らせて転倒する。地蜘蛛はそれを見た途端、緊張の糸が解けたのか、二匹へ猛然とダッシュしてきた。
『――やっぱりか……軍曹！　兵長！　全速撤退！　我らも救助に向かうぞ！　全員で攪乱すれば逃げ切れるはずだ！』
『うっそー結局、こうなるのー！』
『いいから足を動かせ！』
『私、衛生兵でこういうのは苦手なんですけどー！』
『ぐ、軍曹！　何してるっすか！』
『ご、ごめんなさーい』

　『『『『『はあ、はあ、はあ、ぜえ、ぜえ』』』』』
『……全員無事か？』
　表の巣の近くまで逃げてきたところで、隊長がそう他の班員たちに呼びかける。後ろを振り返るが、もう地蜘蛛の姿は見えなかった。どうやら逃げ切ったらしい。
『はい……なんとか。一匹も欠けていません』
　と青木二等兵。
　ホッと息を吐くα班員たち。
『でも、結局、今日は収穫ゼロよねー』
　と、進藤上等兵は肩を落とす。
『も、申し訳ありません』
　最後の最後までやらかした立花軍曹は今にも土下座しそうなくらい申し訳なさそうな顔をしている。
『しょうがないわよ。それに、収穫がないのは軍曹のせいってだけではないのだし』
　竹田衛生兵はそう立花軍曹をなだめる。
『でも、今日は本当に厄日だったすねー』
　軽く放心状態になりながら、へたり込む坂田兵長。

　他の班員達が揃えて肩を落とす中、ただ、隊長だけはその顔に笑みを浮かべていた。
『……お前ら、まだ幸運の女神様は我らのことを見捨てた訳ではなさそうだぞ』
　隊長が見つめる先を班員達は目で追う。そこはＡ社の玄関口の花壇。丁度、蟻達の巣の近くにまだだれも手を付けていないあるものがあった。
　それを見た青木二等兵は思わず声を出す。
『……あ、あれは！』
　丸く黄色い、少しだけ太陽の光に当たり溶けてしまってはいるが、それは紛れもない……
『『『『『飴だ！』』』』』
　班員達は今までの疲労を忘れる勢いで飴に群がっていく。
『……ふう。これで、今日のところは一安心だな』
　隊長はそう呟くと、部下とともに飴の運搬に勤しむのだった。

＊

　夕方、安藤は社内での報告を済ませ、書類をまとめて退社するところだった。玄関口まで来たところで、そういえば今朝の蟻達はどうなったかと花壇を覗き込むと、先程、自分が落としてしまった飴をせっせと運んでいるところだった。会話もまばらに聞こえてくる。
『――いやー、幸運でしたね、隊長』
『――お前ら！　早く運べ！』
　そんな蟻達の会話の中に、安藤は気になる言葉聞いた。

『――やっぱり、働くっていいですね！』

　今日も安藤の長い一日が終わる。後半は落ち込んでいたようだが、帰りの電車の中、彼の表情は晴れやかだった。
「――明日も一日頑張ろう」
　そう呟き、彼は布団に入る。

　夜、
『――さて軍曹、……分かっているな』
『え、い、いや、そ、その、……い、いやだあああああああ！』
　誰かの悲痛な叫びがＮ市に木霊していた。

ドラゴン・メッセンジャー(古井龍)

ドラゴン・メッセンジャー
古井　龍

　規則正しくも荒々しい音が、普段は物静かな林道の奥から響いて来た。
　――嫌なモノがやってきたな。
　アレンは苦虫を噛み潰したような顔をした。音はガラリガラリと繰り返し鳴り響き、林の中を反響しながら、徐々に音を大きくしていく。
　呆然と佇んでいると、それはすぐそこまでやって来た。
　彼はその小さな体躯をとっさに端に避け、それの道を譲った。木綿のマントと短く切った茶髪が静かに揺れる。
　――筋肉を強張らせた黒牛たち、商人特有の衣装、麻布を被せた何十人も乗れそうな大きな荷車……やっぱりか。
　アレンはその様子を流し目で観察していた。重たい車輪を転がす音を聞いた時点でアレンの答えは出ていたが、それでも違うモノだと信じたかった。
　――人狩り……か。こんな片田舎まで最近は来るのか。
　果物や酒と同様に、最近は人間も同じ商品として売られていた。アレンの脳裏に過去の記憶が蘇る。
　――……質的にも量的にも都会の方がいいモノは手に入るはずだ。客のところに移動するにしても、わざわざ道が整備されていないここを通るのもおかしい。なんでこんなとこを通る？
　彼が考えを巡らせていると荷車が石を撥ねたのか突然跳ね上がり、後ろ側の覆いかぶさっていた布が捲れ上がった。
　その瞬間、アレンは石の如く静かに硬直した。
　うつむき、すすり泣くモノ。天を仰ぎ、懇願するモノ。うなだれ、壁に凭れるモノ。
　しかし、アレンの眼が見据えていたのはそれらのモノではない何かを見据えていた。
　それは燃えるような赤い瞳だった。
　アレンはその少女の鋭すぎる眼から絶対に生き延びてやるという強い意思とこんな目に合わせた奴の喉笛を確実に喰いちぎってやるという執念を感じた。紅蓮の瞳と髪は命の灯を表すとともに己の怒りを体現しているようにも見えた。
　荷車を引きずる音が過ぎ去ったころ、アレンはハッとして我に返る。咄嗟に身体を北側に九十度捻ったが、そこには静寂しかなかった。
　アレンは深く息を吐き出すと、空を舞う鳥たちを眺めた。

Ghastly　Triad（文音憂）

Ghastly　Triad
文音　憂

「十二番線ドアが閉まります。ご注意ください」
　帰宅ラッシュの中、私はいつものように神田駅から山手線に乗りバイト先へ向かう。代わり映えのない景色に眼を移して、昨日とは違うちょっとした変化を見つけながら退屈さを紛らわせていた。しかし今日の景色は昨日と全く同じだった。全てが自分の眼の中をただ通り過ぎていくだけだった。電車は秋葉原を過ぎ上野にさしかかった。電車の扉が開き、サラリーマンの群衆がホームの階段へ駆け出す。この瞬間が私にとっての束の間の休息。車内の淀んだ空気に涼しい風が入ってくる。発車メロディーが鳴り終わるころにはもう人に波に押され外をなんとなく見ている余裕がなくなる。発車とともに車内が揺れ、隣にいた女性に足を踏まれた。
「うっ･･･」
　ヒールの脚が、昨日箪笥の角にぶつけた小指にヒットしてしまい思わず小さくうめき声を漏らしてしまった。
「すみません」
　女性はそう言うと、人の波をかき分けて私の視界から消えていった。ふと外を見ると電車は日暮里駅にいた。人の乗り降りもあまりないままホームを後にすると曇った空が視界に入ってきた。今日も折り畳み傘をカバンに入れず外出してしまっていた。扉の上にあるモニターの天気予報は九時ごろから雨が降ることを告げ、昨日と同じ過ちを繰り返す私自身に若干嫌気がさしてきた。草臥れたスニーカーに足を向けていると、電車は西日暮里に着き電車を降りた。北口改札を出て、空模様を気にしながら少し速足にバイト先へ向かった。

「お疲れさまです」
「あっ、タイちゃんお疲れ」
　控室にいたのはミハル一人だけだった。今日は三人のシフトのはずだったのを思い出した。
「あれ、副店長はまだ来てないのか」
「なんか、夏風邪引いたとか言って今日来ないらしいよ。代わりに清水さんが来るんだって」
　私はつくづく今日はついてないと思った。ここで働き始めて一か月、不慣れな私に丁寧に仕事を教えてくれる副店長が心の支えになっていたが、仕事での失敗をネチネチと言ってくる清水だけとはシフトがかぶらないようにいつも緻密な計算を脳内に繰り広げていたが、どうやら計算ミスをしてしまったようだ。
「そういえば、今日の三限さぼったでしょ。タイちゃん大丈夫なの、そんなにさぼっちゃって」
「うるせえなぁ。今日は安田の授業に出る気分じゃなかったんだよ」
「どうせその後の授業も自主休講にしちゃったんでしょ」
「大きなお世話だよ」

図星だった私は些か乱暴に返してしまった。ミハルは私と違って、模範的な大学生といっても過言ではない存在だった。授業はきちんと出席して、ゼミでも積極的に発言するし、学部内での成績もトップテンに入るほど優秀らしい。そんな奴と一緒にいるとまた少し自己嫌悪というか、惨めな気持ちになる。
「せっかく安田の授業のレジュメ貰ってきてあげたのになぁ。タイちゃんこれ以上単位落とすとやばいんじゃない」
こんなことをしてもらうのは正直自分の中の小さなプライドが許さなかったが、背に腹は代えられないと思いそれを受け取った。
「何か私に言うことがあるでしょ」
「ありがとな」
間もなくして清水がやってきた。私の緊張が少し高まった。気が重い。早く仕事を終わらせて帰りた願望が強くなった。
「おい、こんなところに荷物を広げるんじゃねーよ。誰だ」
私はすぐに謝った。
「あっ、すみません。すぐ片付けます」
「ったく、狭い部屋なんだから少しは使い方を考えろよな」
「すみません」
私は再び謝って、レジへ向かった。

今日は運がいいことに客の入りが少なかった。正直この仕事には向いていないと思っていた。しかし、ミハルが紹介してくれたからなんとなく文句も言いにくかった。実際のところ、今は次のバイト先をいろいろと探しているところだ。いいバイトが見つかったら早々にここをやめるつもりだ。次こそは自分にあった職に巡り合えるよう心静かに祈りながら時計を見ると仕事の時間は残り五分になっていた。私はもう少しで家に帰れると思い少し気分がよくなっていたが、五〇代位のみすぼらしい格好の男の客が入って来た。男はすぐにレジに向かい、
「キャスターを一つくれ」
私はまだタバコの銘柄を覚えきれてない。
「すみません。番号を仰っていただけますか。」
「一二〇番だよ」
男は乱暴な口調で言った。
「こちらでございますね。四三五円になります。あっ、年齢確認のボタンの方を押して下さい」
男は何が気に入らなかったのか、さっきよりも強い口調になった。
「お前、俺が未成年に見えるのか。なんで押さなきゃいけないんだよ」
「一応、そういう決まりになっておりますので」
「そんなのはお前の都合だろ。黙って俺にタバコを売ればいいんだよ」
何度言っても聞く耳を持たなかった。
「今、上のものを呼んでまいりますので少々お待ちいただけますか」

私はすぐにその場を離れた。寧ろ、逃げ出したかった。助けを求めて控室の方に行こうとすると、棚の整理をしていたミハルが私に声をかけた。
「あとは私がやっとくから、もうあがっていいよ」
状況を見かねたミハルが気を使ってくれた。幸いにも清水は外のゴミの整理をしていたのでこの事態に気づいていなかった。
「ありがとうな」
自然とさっきと違う口調になっていた。控室に戻り着替えを済ませると、早々にバイト先を後にして駅へ向かった。

時間は十時を回っていた。この時間になると座席に余裕が生まれてくる。内回りの電車に乗り空いている座席の腰を下ろした瞬間、一気に体の力が抜けた。そして深いため息をつき、音楽プレーヤーで自分の世界に入り目を瞑り、外界とのかかわりの一切を遮断する。しばらく頭の中を空っぽにして電車に揺られていたが、池袋についたときふと目を開け、向かいの窓を見ると埼京線の電車が止まっていた。向こうの車両はまだ少し混んでいた。私は再び目を閉じようとすると、向こう側に見覚えのある男がいた。確かにどこかで見たことがある。しかし、それが誰だったか思い出すのに少し時間がかかった。
「ああっ！」
過去の記憶が掘り起こされ、電車にいることを忘れ思わず大きな声を出してしまった。周りの目を気にすることなく反射的に電車を降りようとしたが扉が閉まってしまった。私はその男が見える窓に顔を近づけ何度も確認した。こちらの電車も向こうの電車もそれぞれ反対方向に発車してすぐに男の顔が見えなくなった。突然の出来事に頭の整理がつかず、しばらく、その場に立ち尽くしていた。頭の中に様々な情報が錯綜し、いつもの自分ではいられなかった。少し落ち着いたころには降りる駅に着いていた。私は空を見上げることなく歩き続け、いつの間にか家についていた。六畳一間の万年床にカバンを下ろし、ささやかな夕食の支度をする。ラーメンをすすっている間も私はさっきの男のことで頭がいっぱいだった。
「たしかあいつは…いや、そんなことが」
私は信じたくなかった。いや、信じられるはずもなかった。タカシは三年前に…。

翌日、昼休みにミハルをテラスに呼び出した。突然の呼び出しに向こうは些か戸惑っていた。
「何、話って？」
私は言葉が出なかった。こんな話を信じてもらえるはずがない。しかし言わずにいれば、自分は何れ計算法則の通用しない世界に入ってしまいそうな気がした。
「覚えてるか」
「何を」
「その…えっと…」
「どうしたの。もったいぶってちゃ分かんないでしょ」
「タカシ…」

「えっ」
「タカシだよ。ほら、高校の時の。三年七組のクラスメイト」
　その名前を聞いた瞬間ミハルの表情が曇った。
「ええ…覚えてるわよ…。でも何でそんなこと聞くの」
　ミハルがそういうのも無理はなかった。我々三年七組にとってタカシという名前はなるべくなら思い出したくないものだった。
「見たんだよ。昨日、埼京線に乗ってるタカシを。本当だ」
「何言ってるの。だってタカシは三年前に…死んでるのよ。タイちゃんの見間違えじゃないの」
　私自身も何度も見間違えだと思った。見間違えだと信じたかった。けれど、あの顔立ち、表情、縁の細い丸メガネ、間違えなかった。ミハルの言葉を聞いた後、私は昨晩、突如目の前に現れたタカシのことを説明し続けた。それでも、死んだはずの人間がいるわけがないとミハルに諭され、私の話を信じようとはしなかった。時計は午後の授業が始まる五分前をさしていた。私も午後の授業があるので納得のいかないまま話を切り上げ、教室へ向かった。その日は学校が終わり家に帰るまで大きな胸の痞えがとれなかった。

　布団に横になり、切れかかった蛍光灯が光る天井を見ながら、あの時の記憶を正確に辿っていた。自分が目撃した光景が間違えだとやはり信じたかったからだ。

「合宿も明日で終わりか」
「長いようであっという間だったな」
　十日後に最後の大会を控えていた三年生は、様々な思いを抱きながら午後の練習のための準備をしていた。合宿最後の練習は、大会を想定したコースでのタイムアタック。部員たちは緊張した面持ちでスタート地点に向かった。私も自転車の調整を終えて皆と一緒に移動しようとしたとき、タカシに呼び止められた。
「タイチ。ちょっと先生と打ち合わせしてくるから、先に行っててくれ」
「ああ、早く来いよ」
「分かってるって」
　準備を整え合宿所を出る。近道をしようと思い、裏手の険しい坂道を上ろうとした。ふと、タカシの自転車が目に入った。あの時の私はどうかしていたと思う。なぜあんなことをしてしまったのだろう。私の心に悪魔が宿った。

　スタート地点に着いてから十分ほどして、タカシがやってきた。
「遅いぞ、タカシ。」
「すまん。打ち合わせがちょっと長引いて。さあ、最終レースを始めよう。」
　全員の準備が整った。そして、スタートの合図を待った。頭から足の先まで全ての神経を集中させ、ハンドルに手をかける。
「スタート五秒前、四、三、二、一」

スタートのホイッスルが高らかに響く。全員がゴールを目指して疾走する。コースの序盤の長い下り坂。まず、ここで勢いをつけ、舗装された林道に入っていく。カーブの連続する林道を上手く切り抜けていく部員たちを、後ろから見ていて逞しさを感じていながら、羨ましさも感じていなかったといえば嘘になる。林道を抜けて海岸沿いの道へ出た頃には、先頭を走るタカシに距離を開けられていた。同時に私の脚のケガの跡も疼き始めていた。海岸沿いの直線はラストスパートをかけるための格好の場所だった。但し一か所だけの難所を除いては。私たちの部活は毎年ここにきて大会前の調整を行っている。このコースも歴代の先輩方が走ってきたコースだ。だからコースの特性についてもよく知っていた。新入生がこの場所でレースをする前に必ず海岸沿いの道の最後の急カーブだけには十分注意するよう喚起する。無論、二年生、三年生もここに注意しないと大変なことになる。私も聞いただけで確かな情報かどうかがわからないが、十年ほど前に一人死んでいるらしい。

海岸沿いの難所の急カーブが見えてくるところまで来た。脚のケガもそろそろ限界だった。その時、前方で鈍い音がした。私は嫌な予感がした。カーブの所で部員たちが集まっていた。私も痛みをこらえて急いだ。自転車を降りてみんなに近づいた。
「一体どうしたんだ」
「浅田先輩が…」
その続きを聞かなくても、すべてが手に取るように分かった。歪んだガードレール。崖下の大破した自転車。それらが全てを物語っていた。部員たちは目の前の光景に何もできず、ただ崖下を見続けていた。私は、この状況を何とかするために部員たちに呼びかけた。
「おい、誰か救急車を、あと警察も。電話を持ってるやつはいないか。藍沢、早く先生に連絡しろ。急げ」

その日は警察の事象聴取やら現場検証が行われ、慌しくも、重たい空気に包まれた一日だった。翌朝早々に合宿所を離れいつも通りの練習に戻った。私はタカシの代わりに補欠からレギュラーメンバーに入り、最後のレースを終えた。大会が終わると部活を引退し、受験生としての生活が始まった。幸いにも東京に有名私立に合格することができ、今ではそれなりにキャンパスライフを楽しんでいる。

全てを思い出しきり、頭が疲弊し上手く働かなくなった。今日はもう寝よう、身体がそういっている。目を瞑り眠りに就こうとした瞬間、大事なことを思い出した。そう、あれは先生が警察の人間と校長室で話しているのをたまたま聞いてしまった時のこと…。

大会一週間前の或る日、土曜日の補習で学校に来ていた私は、日本史の川崎先生の所へ質問を持っていこうとしていた。職員室の隣に校長室があって、そこから話し声が聞こえてきた。
「そうですか。それで、浅田君の家族の方が遺体を引き取りたいと申されておりまして」
「お願いします。なるべく早く浅田を家族の元へ返してやりたいんです」

校長と顧問の田辺先生の声が聞こえた。扉の隙間から覗いてみると警察の人間もいた。
「それがですねぇ、見つかってないんですよ」
「見つかってないって何が」
「ですから…浅田君の遺体が」
私は、耳を疑った。事故の発生から三日経っている。タカシが見つからないはずがない。みんな事故現場を目撃している。崖下に落ちていったタカシを。私が見た男はもしかしたら…もしそうだとしたら…。もしもう一度会えたら…。今更許してもらえるとは思えないが。

翌朝、いつものように身支度を整え大学へ向かった。今日は午後からの授業だけだったので、通勤ラッシュを避けて電車に乗ることができた。さすがに昼前の電車は空いている。扉が開くと早々に席に座った。しばらく電車に揺られ、日暮里駅に着いた。内回りの電車も向かいのホームに着いていた。向こう側の電車の中に、偶然にも一昨日見たタカシを見つけた。彼はここで電車を降りた。私も急いで電車を降り彼を追いかけた。走って改札のところへ向かうと、改札を出て西口の方へ歩いていくのが見えた。急いで追いかけて彼を呼び止めた。
「おい、お前タカシだろ。そうだよな」
この顔立ちは確かにタカシだ。しかし、彼は怪訝そうな顔をしてこちらを見ている。
「俺だよ。高校の時同じ自転車競技部だった笹原タイチだよ」
彼の表情が少し変わったような気がしたが、ただ男はまだ釈然としない表情だった。
「タカシ、会って早々こんなことを言うのもあれだけど…その、本当にすまなかった。覚えてるよな、高三の時の合宿でお前はガードレールに衝突して崖下に転落した。実は、あの事故を引き起こしたのは俺なんだ。お前に自転車のブレーキに細工を…」
私はそれから夢中になって釈明を続けた。話も支離滅裂になっていたかもしれない。しばらく話してから、胸中にしまい込んでいた動機を告白した。
「高三の春に俺は練習中に俺とお前が転倒事故を教えたのを覚えているだろ。幸いにもお前は軽傷だったが、俺は一か月も自転車に乗れなかった。あの場では、とりあえず和解していたが、やっぱりお前のことが許せなかったんだ。結果、レギュラーメンバーから外されることになったから。それで、どうしてもレギュラーに入りたいと思っていた俺は…お前にあんなことを…」
全てを話し終えると、涙があふれてきた。すると目の前の男は思いもよらぬことを口にした。
「あの、何か勘違いされてませんか。たしかに僕はタカシですけど…。失礼ですがあなたのお思いになっているタカシさんの本名は」
「浅田…浅田タカシだよ」
「何か大変な思いをされていろいろなこと仰ってくれたのだと思いますが、私は遠藤といいます」
そんなはずはないと、何度も自分に言い聞かせた。しかし、目の前で名刺を見せられては何も言い返すことができなかった。確かに遠藤タカシだった。
「すみません、もうよろしいですか。先を急ぎますので」
そういうと男は足早にその場を去っていった。私はどうかしていたのだろうか。いや、あの男は

タカシに間違えない。どうしても納得がいかなかった。しばらく考え込んでようやく我に返った。切符を買い直し大学へ向かった。当然こんなことがあって、授業に集中することができるはずもなかった。大学が終わり、どんよりとした曇り空の下、駅に向かった。早々に家に着くと、布団に横になりすぐに眠った。

　それから長い時間眠っていた。時計を見ると午前五時を回っていて、外は明るくなっていた。幸いにも今日は土曜日。空は鉛の雲で覆われていた。珍しくテレビをつけてみると今日の東京は雨らしい。雨が降り出さないうちに出かけようと思い、シャワーを浴び家を出た。ちょっと出かける時間が早かった。ショッピングに行こうと思っても、大抵の店はまだ閉まっている。しばらく券売機の前で考え込んで、今日はお金をかけずにどこかを散策することに決めた。上野行きの切符を買い、上野公園を久しく訪れていなかったので行くことにした。ホームへ向かうとすぐに電車が到着した。
「二番線ドアが閉まります。ご注意ください」
　土曜日の朝の電車は東京の電車とは思えないほど空いていた。私はしばらく頭を空っぽにした。ここ数日間の出来事を考えたくなかった。心身の疲れがまだとれていなかった。長時間の睡眠でさえ、今の私には効果がないのだと感じた。しばらくすると電車は上野にいた。発車メロディーが聞こえて急いで電車を飛び出した。ホームから外を見ると傘を差した人が行き来している。私は仕方なく駅の売店に向かいビニール傘を買った。売店を去ろうとして振り返った瞬間、人にぶつかってしまった。
「すみません。大丈夫ですか」
　声をかけても男は反応せず、下を向いたままだった。そんなに強くぶつかってはなかったと思うが、心配になり顔を覗き込んだ。
「あの、大丈夫で…」
　顔を見た瞬間、戦慄が走り、足が竦んで倒れた。男の顔にはノコギリで断裂されたようなケロイドがあり、顔の半分程を覆っていた。恐怖のあまり、声を出すことも、手から離れたビニール傘を取ることもできなかった。男は冷たく悲しい目で私をずっと見ていた。その視線がどうしても私には耐えられなかった。そして男が口を開いた。
「タ・イ・チ…だろ」
「あっ…あぁ…」
　男の言葉に反応する少しの冷静さを取り戻した私は、もう一度男の顔を見た。その瞬間自分の目を疑った。死んだはずの、いや昨日駅で会ったタカシの顔だった。
「お前、その傷…。昨日何があった。」
　こんな大きな傷を負った人間が、昨日今日で無事でいられる訳がない。すると今目の前にいる男は、少なくとも昨日のタカシではない。床に倒れたまま冷静さを失いながらもそんなことを考えていると、男が不気味な笑みを浮かべてこう言った。
「ミ・ツ・ケ・タ…」
　そう言うと男は懐から黒い塊を取り出した。その瞬間一発の銃声が上野駅に轟き、私の視線は

天井に移った。私の周りでたくさんの悲鳴が聞こえた。意識が朦朧としていく中、人々の喧騒とともにもう一発の銃声が鳴った。やがて視界が真っ暗になった。

「いい景色だねぇ」
「来てよかったでしょ」
「でも私のお目当ては景色よりも、美味しいって評判のレストランなんだよねぇ」
　晴れ渡った空の下、私はサキと一緒に休日を利用し軽井沢に来ていた。八時ごろに東京を出発して、計画通り昼前に着くことができた。お目当てのレストランは開店前から人が並んでいた。三十分ほどしてようやく席に着くことができた。二人は注文を済ませ他愛もない会話を始める。
「ねぇねぇ見てよ。携帯新しくしたんだ」
「いいなぁ。私も買い替えようかな」
「これ、めっちゃ画質いいんだよ。テレビとかもきれいに映るし」
　電波を受信すると携帯にはちょうどお昼のニュースが流れていた。
「では次のニュースです。今日午前八時ごろJR上野駅で二十代の男性が拳銃を使って自殺する事件が発生しました」
　突然流れてきた物騒なニュースに二人は釘付けになった。自分たちが住んでいる場所が近かったということもあった。
「自殺を図ったのは、明立大学に通うササハラタイチさん、二十歳で、ササハラさんは上野駅不忍改札の売店の近くで傘を購入した後その場に倒れ込み、突然拳銃で頭部を打ち抜いたとのことです。警察はササハラさんの親族や関係者に事情を…」
「嘘でしょ。何で」
「ミハルどうしたの」
　ミハルの表情が一気に青ざめ、携帯が床に落ちた。サキが様子を窺うとミハルは口を開いた。
「自殺した人…私の同級生なの」
　それからミハルは一言も口を利かなくなり虚ろな表情を浮かべていた。サキはこのままではいけないと思い、すぐに店を出て東京に戻る手はずを整えた。
「お客さん、携帯忘れてますよ」
　店の人間が携帯に気付き足早に店を去る二人に声をかけたが届かなかった。携帯からはまだニュースが流れていた。
「では次のニュースです。三年前、秋田県の海岸で自転車に乗ったまま崖から転落した浅田タカシさんの遺体が白骨化した状態で発見されました。近隣住民から海岸に人の骨が打ち上げられているとの通報を受け、近くにあった遺留品や歯形などから、三年前に転落死した浅田さんと身元が特定されました。秋田県警の調べによると浅田さんは自転車競技の練習中にカーブを曲がり切れず崖下に転落、警察の懸命の捜査にもかかわらず事故直後に遺体が発見されませんでした。今回の捜査で、遺体とともに浅田さんが身に付けていたと思われる名前が書かれたヘルメットも発見されました。続いては関東周辺の天気予報をお伝えします」

　梅雨前線の活動は弱まり、日本中は高気圧に覆われ、私の上には雲一つない青空が広がっていた。

猫が眠りにつくところ（加々美翔）

猫が眠りにつくところ
加々美翔

「今日は、誰が死んだの」
　毎日のように、お互いの休憩時間を使って会う中でこの質問をしたのは何回目になるんだろう。自分で言っておきながら無神経というか、優しくない言葉だ。とはいえ例え優しい言葉が言えたって、今のエルにはあんまり関係ないんだろうけど、なんて。隣で泣きじゃくる友達を横目に思う。
「……女の、子……まだっ……六歳だったのに」
　しゃっくりをあげながら、途切れ途切れの言葉でエルは今日の朝死んだという少女の事を話す。歌を一緒に歌ったとか、花が好きだったとか。たわいもない思い出を僕はただ聞くだけ。涙でふやけていくエルのパンを視界に、萎びたリンゴを齧った。俯いているから表情は見えない。それだけは良かったと思う。
　だって――、この時のエルの顔が僕は一番苦手なんだから。

「しょっぱい……」
　ぺしょぺしょになった黒パンを口に入れてエルは顔をしかめた。そんなの当たり前じゃん。思わずため息を吐いた。
「キト、交換しない？」
「やだよ、他人の体液まみれのパンなんて」
「た、体液とかいうなよ！」
　言い方に悪意があると、喚くエルはさっきまで子供のように泣きじゃくっていたとは思えない。目は少し赤いけど、普段通りに戻って僕はほっとする。
「午後の仕事は？」
「別の患者さんのお世話だよ。また新しい人がきたからね」
　新しい人。仲良くなれるかなと朗らかに笑うエルに対し、僕はいずれ来るであろう未来を思い浮かべてしまう。エルの仕事場は小さな病院。働いてる人たちは良い人だけど設備は最低。だからくるのは向こうの大きな病院に見捨てられた人。
「キトは？　今日も荷物運び？」
「今日は煙突掃除だよ」
　パンパンとズボンをはたいて立ち上がる。休憩はおしまい。ちょっとギリギリかも。急がないと。走り出そうとした僕の背後からエルの声がした。
「キト、ありがと！」
　……お礼なんて言われるほどのこと、出来てないのに。

　いつもの場所に行くと先客がいた。
　陽光を浴びてうたたねをしている黒い塊は僕が近寄るとのそっと顔をあげて、金色の瞳をこっちに向けた。
「黒猫……？」
　珍しい。生きてる猫なんて久しぶりにみた。なんとなく近寄らないで見ていると、猫は僕への興味が無くなったのか、またすっと寝る体制に戻る。流石に警戒心がなさすぎなんじゃ……。
「キト今日は早いね、って何見てんの？」
「黒猫」
　ぱあっとエルの顔が華やいだ。抜き足差し足で猫に近寄るとそっとその手を黒い毛並みに添わせる。
「わわわ、見てみて逃げないよこの子！」
　黒猫を抱き上げたエルは興奮してぴょんぴょん跳ねる。うん、嬉しいのは分かるけど猫かわいそう。
「どこから来たのかな。一人なの？　お腹すいてる？」
　膝の上で大人しくしてる猫を構い倒すエル。猫の方も初対面とは思えないくらいエルにすり寄っている。なんだろう、面白くない。一緒に撫でようとしたらひっかかれた僕は大人しく横でパンを齧った。
「猫ちゃんじゃあれだしなんか名前が欲しいよね」
「飼い主が他にいたらどうすんの？」
「いいじゃん。それはそれで。キトなんか良いの無い？」
　よりにもよって本人（？）に嫌われてるっぽい僕に聞かなくてもいいのに。しかたないなあ……。
「えっと……『ネイト』とかは？　昔読んだ物語に出てた奴」
「ネイト？　なんかかっこいいね。流石キト」
　じゃあ君は今日からネイトだ、とエルは黒猫を撫でた。黒猫もとい、ネイトはきょとんとした顔でエルを見つめてから、なぁぅっと鳴いた。まるで返事をしたみたいでちょっと可笑しい。
「明日もおいでよ。今度は君にもご飯を持ってきてあげるから」
「猫ってきまぐれだしあんまり期待しない方が痛っ」
　余計な事を言うなと言わんばかりにネイトが僕の足に爪を立てた。思わず睨みつければふんとそっぽを向かれる。……可愛くない奴。
「キトとネイトってなんか似てるよ」
「え、どこが」
「キトも黒髪で目は金色だし」
　それ完全に見た目じゃないか。なんとなく釈然としないものを抱えつつ、エルの膝の上から降りたネイトを見やる。ツンとすましたように尻尾を揺らしながら林の中に消えていく姿は僕なんかよりずっと強くてきれいに見えた。

『二人』が『二人と一匹』になった夏は駆け足で過ぎていった。相変わらずエルは誰かを看取る度に泣いていて、僕はそんなエルを見るのが苦手で。そしてネイトもエルにはびっくりするくらい懐いているのに僕にはつれないまま。
　時間は経って、季節は変わる。秋の気配が顔を出し始めた。
「寒くなってきたね」
　水仕事で赤くなった手にエルは、はあっと息を吹きかけた。もうすぐ冬。憂鬱な季節だ。乾燥した空気のせいか、季節の変わり目のせいなのか。朝から止まらない咳に、見かねたエルがあったかいお茶をくれた。
「嫌そうだね。キトは冬嫌い？」
「嫌い」
　冬は寒くて暗くて、いい思い出なんてない。仕事は辛いし、なにより人がよく死ぬ。僕の母さんも、兄弟同然だった子も。どっちも冬に死んだ。大事な何かが無くなる季節、それが僕にとっての冬だった。好きになんてなれない。
「エルはどうなの」
「前は嫌いだったけど今はちょっとだけ好きだよ。だってキトと会ったのは二年前の冬だから。ちょうど初雪が降ってた」
「そうだったっけ……よく覚えてるね」
「キトはこの町で最初の友達なんだよ？　しってた？」
　初耳だ。エルが違う町から来たのは知ってたけど。
「一人ぼっちじゃなくなったのはキトのお蔭。だから今でもキトは一番大事な友達だよ」
「……あのさ、なんでそういうこと照れずにいえるの」
　言われたこっちが恥ずかしくて死にそうだ。真っ赤になってるだろう顔を見られたくなくてフードをかぶって隠す。
「言葉は言わなきゃ意味ないよ。もっと言おうか？」
「ああもう。勘弁してよ……」
　僕だって、ほんとはそうさ。大事な友達。いつからかエルの泣いてる顔が一番苦手な物になっちゃって、でも放っておけないから隣にいてあげたいと思っちゃうくらいには。
　心の中だけで言い返してる僕を、エルはニヤニヤと笑って覗き込んでくる。ああもう、いっそ逃げ出そうか？　そうヤケになった時だった。
「ふみぁあ……」
「あ、ネイト！　遅かったね」
　エルがすっかり顔馴染みになった黒猫を抱きかかえる。標的が変わって僕は一安心。素直すぎるのも考え物だ。なんて、しばらく呆けていた僕はエルの心配げな声でようやく現実に戻った。みればエルが不安げな顔で腕の中のネイトに話しかけている。
「どうしたの？」
「キト……なんかネイトが変。なんか元気がないみたい」
　言われてみれば、どことなく今日のネイトは大人しい。目を閉じて、くたっとエルの手の中に

収まっている。試しに僕が手を伸ばしても何も抵抗せずに撫でられるがまま。
「どうしよう……とりあえず先生に聞いてみた方がいいかな」
「人間のお医者さんだけど……でも他にないね」
　分かったと言ってそのまま走り去っていったエルを見送って僕はその場を後にした。初めてネイトをまともに撫でられたけど、全然うれしくなかった。

　結局先生も専門外じゃあどうしようも出来なくて。ネイトはとりあえず安静ってことになった。この町に獣医なんていないし、結局これが精いっぱいというわけだ。
「ネイト、ほら食べなきゃ死んじゃうぞ」
　仕事にいかないといけないエルの代わりに、今日は休みで暇な僕がネイトに餌をあげる。口元に少し強引にスプーンを押し付けて少しずつ、少しずつ。全部終わる頃にはものすごく疲れた。エルは毎日こんなことしてるんだ……。やっぱりすごいや。
「頑張って、ネイト」
　眠るネイトの体を撫でる。ほら、僕に触られるの嫌いだろ、ひっかいてきなよ。なんて心の中で話しかけながら。痛いのは嫌だけど、抵抗しないネイトはネイトじゃないみたいで悲しいし、なによりエルが不安がってる。今日もぎりぎりまでネイトの傍に居たがってたし。
「……寒いね」
　病院で働く人たちの住んでるこの部屋は今は僕とネイトだけ。コホコホと空咳をしながらぎゅうっと膝を抱えて縮こまった。部屋の静寂があさい眠りを連れてくる。誰かが泣いてる夢を見た気がした。

　ネイトがいなくなった。
　吹く風が一層冷たくなったその日、エルが起きた時にはもうネイトの姿は消えていたらしい。二人であちこち探し回ったけど、あの黒猫を見た人はだれもいなかった。
「どこ行っちゃったんだろうネイト……」
　エルは今にも泣きそうだ。ゆらゆらと不安定に揺らめく青い瞳は落ち着きなくあちこちを彷徨っている。
「エル、大丈夫だって。もしかしたら元気になったから遊びにいってるだけかもしれないよ」
　下手な慰め。昨日まであんなにぐったりしてたのに急に元気になんてなるわけないと、僕の心に嫌味な声が響く。
「そう、だね……ネイトは野良猫だし。ずっと部屋の中で飽きちゃったのかもしんないね」
　エルは眉を下げて弱弱しい笑みを浮かべた。帰ろうか、と冷え切った手が僕の手に重なった。
「いいの？　エルはまだ探したいんじゃ……」
「もう暗くなるからこれ以上は無理だよ。それにキトも風邪悪化する」
　最近ずっと咳きしてるの気付いてるんだよ、と真面目な顔でエルは僕の手を引っ張って帰り道を歩く。ネイトの事で如何にも頭いっぱいって感じだったのに。いやむしろそのせいかな。
「一回先生に診てもらおうよ。風邪だって油断できないって」

「え、でもお金ないし。乾燥してるだけだって平気だよ」
　エルの手伝う病院でさえ、僕らのような貧乏人には手が出ない。そのことを差し引いても、病院なんて行きたくなかった。
「お金ならなんとかしてもらえるように頼んでみるから。二人で出せば、少しくらい……」
「だからいいって。エルに出させるわけにはいかないよ。ネイトのためにもう色々切り詰めてるじゃん」
「でも、でも……」
「だから大丈夫だって！」
　食い下がるエルに、自分でもびっくりするくらい大きな声が出た。びくっと肩をふるわせたエルが目を丸くして僕を見る。
「僕はネイトじゃないよ。だから、そんな顔しないで」
「ご、ごめん。そんなつもりじゃ……キト！」
　掴まれていた手をふり払って、帰り道を走った。エルの声が聞こえなくなるまで走って走って。気が付いたら真っ暗な道を一人だった。
「ケホッケホッ……ああもう、何、やってゴホッ……」
　エルは本当に僕を心配してくれただけなのに。後悔しても遅い。あんな微妙な空気にしちゃったら明日から気まずいのに。
「ケホケホケホ……やばい止まんなゲホッ、ゲホッ」
　喉に何かつっかえたような違和感がとれない。なんだろこれ。
　――ゲホゲホゲホ……ベチャ。
　あれ？
　微かな、でも聞きなれない嫌な音。ついで、口の中に広がる独特の鉄さびに似た不快な味。手にねっとりと絡みついた唾液とは違う……赤。
「これ……血？」
　吐いた。僕がこれを。信じられなかった。信じたくなかった。夢だったらいいのに。浅はかに願う僕の心と裏腹に、再び咳きこめば、手から溢れて地面にまで点々と染みができる。
　何が……平気、だ。さっきエルに言い放った言葉が脳裏をよぎる。僕はバカだ。ぽたぽたと勝手にあふれてくる涙をぬぐうこともできずに僕はその場に立ち尽くした。
　なんて言えばいい？　どんな顔して会えばいい？
　僕もうすぐ死ぬみたいなんだ、なんて。

　合わせる顔がない。どんよりとした灰色の雲の下、今日何度目か分からないため息を吐いた。
「ひっどい顔。そんなにその猫可愛がってたのか？　この世の終わりみたいな顔してるぜ」
　仕事仲間の少年が話しかけてくる。そういえばネイトのこと話してたっけ。そのことで僕が落ち込んでると思ってるらしい。まさか自分が死ぬかもしれないからとは言えない。あいまいな感じで頷けば、元気出せよと肩を叩かれた。

「……なんで急にいなくなっちゃったかなあ」
「あれだろ。猫ってさ、死を悟ると消えるっていうぜ。飼い主に自分が死ぬところを見せないようにって。それでいなくなったんじゃないか？」
「そんなことがあるの」
　うわさ程度さ。と彼は肩を竦めて仕事に戻っていった。死に際を見せないために消える。何のために……？　でも本当だったら、ネイトはやっぱり自分が死ぬのが分かって、だからいなくなったんだろうか。
「……なおさら会いにくくなった」
　昨日までは待ち遠しかった休憩時間を憂鬱に感じる日が来るなんて思わなかった。どことなく足が重いのは気分のせいだけだと思いたい。
　林を抜けて、いつもの裏庭に入る。まだエルの姿はなかった。少しだけほっとしつつ、そのまま待っている気になれなくて裏庭から表へと足をのばした。ちょっとした好奇心で、いくつかある窓のうちの一つから中をのぞいて、僕は後悔した。
　ボロボロと涙を零すエル。その手が、横たわった人の骨ばった手を握っている。まさに今、エルの前で一つの命が消えようとしていた。それが、近い将来訪れる僕の未来だと認識した瞬間、僕は逃げ出した。
　やめて。そんな顔しないでよ。走って走って、ふり払いたくてもふり払えない。想像するまでもない。僕が死ぬときも、きっとエルは同じ顔をする。僕のせいで。そんなの見たくない。
「お前も……こんな気持ちだったの……？」
　消えた黒猫を想う。こんなの僕の勝手な妄想だ。でももしかしたら、あの賢そうな猫ならあり得るのかもしれない。もう死んでしまっているのかもしれないけれど。でも……。
「生きてるかも」
　そう思うことも出来る。死んだという事実さえ見なければ。そうだ……見せなければ。

「辞める？！」
「うん。今日で。もう親方には言ってあるよ」
　大してない所持品は処分して、服と毛布と食料だけを小さなリュックへと詰めていく。
「な、なんでだよ。つか辞めてどうすんだ明日から」
「宛はある。……大丈夫だよ」
　背負ったそれは思いのほか軽かった。何も無くなったベッド。僕の居た痕跡は、これだけの作業であっさりそこから消えた。
「宛って……ほんとかよ」
「嘘ついてどうすんのさ。それじゃあね」
　何か言いたげな顔の同僚に手を振って、足早に宿舎を出た。
二年間、帰る場所だった此処ともお別れだ。
「さて、どこへいこうか……」
　鈍色の空のしたを歩きながら呟く。人の目に触れない所を探して、町の外れへと出た。ちょう

ど病院からは真反対で普段めったに来ない。見捨てられた無人小屋がぽつぽつと建っていた。
「ここで、いっかな」
　元は多分農具か何かを入れていたんだろう。小さな小屋。勝手にはいってごめんなさい。埃だらけの小屋を見渡してから隅の方に蹲る。埃のせいでまた咳きこんだ。血は出なかったけど、胸のあたりが少し痛い。僕の息遣いの音だけがやたらと響いた。
「……静か、だな……」
　当たり前か、一人なんだから。

　――いたい。いたい。胸がぎゅうっと握りつぶされてるみたいな痛み。いたいいたいいたいよ。のたうち回りたくても動くことさえままならない。咳は止まんないから息も出来ない。くるしいくるしいよ。床に突き立てた爪がボロボロの木に傷をつけた。割れた爪から流れた血は吐いた血と混ざる。ああ、毛布ぐちゃぐちゃ。破けて血に染まって涙にぬれて。
　いたいよ、くるしいよ――……はやくはやくはやく！
　もういいでしょう？　全部全部終わらせてほしいのに。遠くなる意識はそのたび胸から背中に走る痛みに、息ができない苦しさに、引っ張り戻されて。また固い床の上、無言でもがく。
　まだ、死なない。まだ、死ねない。
　そのことに、――ほっとしてる自分がいた。
　自分で、自分のために一人になったのに。僕はバカだ。
　さびしいよ。
「会いたいよ……エルっ」

　――――にゃぁ……。
「……ネイト？」

　久しぶりにその声を聴いた気がした。鉛のような体を起こして辺りを見てみる。何もいない……幻聴？　なら、そろそろ死んじゃうのかな。今は痛みとか落ち着いてるけど……。
「にゃぁあ」
　え？　あれ……？
「ほんとに、ネイ、ト？」
「にゃーー」
　黒い毛、金の目。僕にはやたらとつれない黒猫が小屋のドアをほんの少し開けて滑り込んできた。まさか……本当に？
「生きて、たの？」
　近寄ってきたネイトは当たり前だと言わんばかりにじっと僕を見据えた。金の双眸にボロボロの僕がうつる。最後にあったときと完全に逆になった現状に、なんでだろう。でもなぜか僕は笑いそうになって、次に聞こえた声に固まった。
「……キト？」
　恐る恐る顔をあげた。完全に開いたドアの所で、エルは茫然と立ち尽くして僕を見ていた。その目線が、赤く染まってボロボロの床や毛布や、僕に順番に向けられた。
「え、エル……あの」
「だから黙っていなくなったの？」
「え」
　靴音を響かせて小屋の中に入ってきたエルは僕の前にしゃがみ込んだ。
「どうせ死んじゃうならその前に消えればいい。僕のせいで悲しむ人がいないようにって。そんなとこでしょ、間違ってる？」
　エルの淡々とした迫力に押されて僕は首を横に振らざるを得ない。エルは俯いてはあっとため息を一つ吐いた。
「キトの大バカ野郎」
「痛っ！　な、なにするのさ……」
「何ってデコピン。これくらいで済んで良かったと思え」
　睨みつけられた。ああやっぱり怒ってる。そうだよね。
「ごめん」
「何で謝るの」
「エルに、ひどいことしたから」
　結局、僕は僕の事しか考えてなくて。エルの気持ちなんて何にも考えてなかった。それで、逃げた。……なのに。
「やっぱりこわかった。ここで、一人で誰にも知られないまま死んでいくんだって思ったら、自分で望んだのに」
　ごめんごめんと繰り返すしかできない僕を、エルはぎゅっと抱きしめた。
「キトはバカだなあ……いいんだよ、そんなのあたりまえじゃん。みんな死ぬときは自分の事でいっぱいいっぱいなんだよ。なのにさ、なんで自分から苦しい所に行くの？」

　最期くらいなにしたっていいよ。肩越しに聞こえたエルの声に、せきを切ったように言葉があふれ出てきた。
「エルが泣くのが見たくなかったんだ。だから僕が死ぬところ見せたくなかった。でもここで一人で居たらこわくてさみしくて……エルが来てくれて、やっぱり嬉しかった」
　エルの肩を涙で濡らしながら、僕は泣きじゃくる。
「こわいよ、エル……死ぬの、こわい」
　自分の体なのにもう全然動かせないのが。見えなくなってく視界が。エルの温度が、分からなくなっていくのが。
　死んでいくのが、ひとりになるのがどうしようもなく怖い。
「うん、そうだね。だからここにいるよ……ずっと、いるから。ね、キト。一人になんてならないよ。ちゃんと、いるから」
　子供をあやすようにポンポンと背中をエルの手が優しく叩く。一定のリズムをもって繰り返されるそれと、耳に届くエルの声が、恐怖をとかしていく。止まらなかった震えも、いつの間にか収まっていた。
「キト、頑張ったね。一人で……辛かったよね。気付いてあげられなくて、ごめんね」
　泣くのをこらえているエルの声。ああ、結局泣かせちゃうんだ。ごめんねは僕のほうだ。けどそれより言うなら今はこっち。
　ありがとう。
　声ともつかない、かすれた音しか出ないけど、届いてるといいな。エルの言う通り、言葉は言わないと意味がないね。もっと前から言っておけばよかったよ。
　霞がかった視界に黒い何かが横切った。あれはネイトかな。エルを連れてきてくれてありがとう。お蔭でわかっちゃったよ。なんであんなに死にそうだったのに、死ねなかったのかさ。

　さよなら。エル、ネイト。僕の友達。
　僕はきっと『ここ』で死にたかったんだ

ＥＮＤ

ヴァルキュリアの葬列（文月遼、）

ヴァルキュリアの葬列
文月遼、

——ぼくたちは、青春を駆け抜けねばならないと思っている。
——昔の詩人の言葉（疾風怒濤の時代）に従って。
——崩れつつある橋を駆け抜けるように。
——立ちどまれば、まっさかさまに落ちてしまう。
——そんな恐怖に駆られてる。

気分が落ち込むことがあると、押井克洋（おしいかつひろ）は映画館へ行く。
映画館と言っても大きなシネコンではない。パチンコと一緒に、道楽でやっているような小さな場所へ。
四月の陽気だと言うのに、克洋の足取りは重たい。表情も暗く、つまらなそうな顔をしていた。スモークの薄いサングラスの後ろにある眼はどこか虚ろな印象を与える。昔、虫のようだと言われたこともある。その直後も、彼は映画館へ行った。
パチンコの賑やかさ——大きさだけは一丁前のチープな音楽と、湿気た学生や無精ひげを生やした男たちが出入りすることを、賑やかと言えるのであればだが。それと比べれば、映画館は静かなものだった。閑散と言い換えても良い。
平日の昼間に、映画を見ようなどと思うのも、おかしな話か。克洋は自嘲的な笑みを浮かべ、ポスターを見る。
いかにも無理をしていることが分かる、人気漫画の実写化。
真っ白な病室で、ガウンを着たやたら血色の良い男と制服姿の女性が抱き合う、能天気極まりない恋愛映画。
セクシーを売りにしたアイドルのチープなお色気スプラッタ。
やたらと悩む、アメリカのヒーロー映画。
低俗に紛れて輝く一枚のポスターが、彼の眼を惹いた。
夕日が沈む暗い空をバックに、串刺しにされたナポレオンフィッシュが映るポスターだった。ナポレオンフィッシュの青、そして夕日の赤の対比。暗い色調にも関わらず、それが克之にはとても眩しく思えた。
腕時計と上映スケジュールを見る。迷う必要は無かった。
「十三時からの『ソナチネ』、学生一枚」
「学生が、こんな時間にかい」
「ええ。半日だったんです」
老人と言って差支えの無いチケット売りの男の顔に克洋を見下ろした。克洋はどうもおかしいぞと思った。何度も通って、この老人と顔を合わせているのに、まるで初対面の様ではないか。少し前までは、世間話をする仲だったのに。
席の指定は聞かれなかった。どうせ、指定するほど人がいないからだ。古い映画の再上映だから、多分一人だけだろう。
「何か食べるかい」

「ポップコーンのMサイズ。それとオレンジジュース」
　いつものセットを頼むと、老人が奥に消え、すぐに戻る。持って来たポップコーンの入ったバスケットはやけに大きいし、紙パックにはデフォルメされた牛が入っている。
「ちょっと、おじさん。注文が――」
「ガタガタ抜かすな。女の子みたいなナリして。でっかくなれねぇぞ」
　お代は注文のでいいから。そういって老人が笑った。黄色い歯を見せつけるような笑い方が、克洋の神経を逆なでした。
　どうにか克洋も苦笑いを返す。一五〇〇円と引き換えに大きなバスケットと牛乳を受け取って、小さなシアターに入った。
　克洋は高校二年生だ。四月二日に産まれ、同学年で最も早く十七になる。最も大人が近いはずだった。しかし、今日の身体測定で言い渡されたのは、一五七という残酷な数字だった。
　十七歳の平均身長は、男が一七〇。そして女が一五七だ。
　克洋はポップコーンを抱きかかえるように持って、顎を撫でる。つるりとした感触だった。俳優のようなセクシーな髭には程遠い。廊下に飾られた安っぽい鏡が、彼の横顔を映す。柔らかな髪質に白い肌。すっきりと通った目鼻立ち。長く、カールした睫毛。精一杯それを誤魔化そうと、校則ギリギリの濃さのスモークが入った、サングラスをしている。
　克洋という名前とは程遠い姿だ。よく言えば優しそうな、克洋の最も嫌う言い方をするならば、女性のような顔立ちをしていた。喉仏だってあるはずなのに、声も高い。
　思春期の男にとって、それらは受け入れがたい、残酷な事実だった。
　サングラスを外してタバコ臭い座席に座る。やる気のないＣＭ、やたらと誇大な映画の宣伝。流し見しながらラージサイズのポップコーンをひとつつまむ。手が油でべたついた。ご丁寧に、バターまでたっぷりとかけているようだった。
　世界が暗くなる。克洋はシートに深く沈み込み、映画に沈み込むことにした。読書であれ、映画であれ、娯楽作品に沈むことは好きだった。全てを忘れることが出来る。伸びない身長の事も、男らしさとは程遠い体格の事も。
　映画自体は、淡泊に進む。けれども、克洋を夢中にさせた。静かな沖縄の光景。そこで不意に挟まれる、生々しい暴力。ヤクザであるはずの彼らが沖縄の海で無邪気にはしゃぐ一方で、ヒットマンに次々と消される、ヤクザの部下たち。
　まるでクラッカーのような軽い銃声で人が死ぬ。真っ赤な血と海、空の青が残酷なまでに美しい。
　まだまだ物語の中盤であるにも関わらず、克洋は静かに涙を流した。どうしてか、涙が止まらない。
「失礼、隣。いいかな？」
　ふと声が聞こえて、克洋は慌てて涙を拭った。ふと横を見ると、彼は現実に引き戻された。
　同じ学校の制服を身に纏う少女だった。と、言っても克洋よりも背が高い。多分、一六〇の前半だろう。克洋は悲しくなったが、それよりも彼女に目を奪われた。
　どこか柔和な笑み。肩甲骨ほどまでに伸びた艶のある黒髪。暗い館内と映像の明るさが、顔に影を与える。その陰影の美しさに、克洋は頷くしかなかった。
「『ソナチネ』か。いい趣味ね……あまり減っていないようだけれど、大丈夫？」
「ええ。ちょっと食べきれなくて……よければどうですか？」
「いただこうかしら」
　少女は彼と同じようにシートに沈み込んで、差し出されたポップコーンをつまむ。結構なペー

スだ。儚げな外見に反して、遠慮も何もないらしい。
　克洋は少女に視線を向けた。膨らんだブレザーの頂点に、青いアネモネをかたどったブローチが飾られていた。それが彼女の美しさを際立たせる。
　二人は静かに映画を観続けた。ラスト。　銃口炎（マズル・フラッシュ）　だけで表現する銃撃戦。そして、帰路の途中で静かに拳銃を自分のこめかみに突きつけるラストシーン。また、克洋は静かに涙を流した。
　多分、忘れられない作品になる。克洋は今日から人生が変わるような気がした。
「面白いとは思わない？」
　少女の呟きに、克洋は涙を拭ってから振り向いた。
「この映画が作られたのは一九九三年。その後に何が起きたか分かる？」
　久石譲の感情を抑えた、それでいて咽び泣くようなテーマソングを聞きながら、克洋は少し考え込んで、こう返した。
「そう言えば、彼の顔が歪んでいませんね」
「そう。この直後、彼は自損事故を起こしたの。ほとんど、自殺のような。面白いと思わない？
　彼は何で引き金を引き、事故を起こしたのか、私はこれを観るたびに気になるの」
　静かに克洋は映画を思い返す。作中の青と、少女のイメージが重なった。そして、鮮血の赤が。
「多分、飽いたんだと思います」
「飽いた？　と言うと」
「村川は、北野武はこの映画の中で、子供に戻っていたんですよ。だから、沖縄の海で無邪気にバカをやれた。人を殺せた。映画自体が、遊びだったんですよ」
　万人受けする作品ではありませんから。克洋はそう言った。映画を観ながら物事を喋るのは苦手だったが、不思議と彼女相手には気安く喋ることが出来た。
「その虚しさに気が付いた、と。それが泣いた理由？」
「ええ」
　克洋は俯いた。恥ずかしさに頬が赤くなるのが分かる。再び眼が潤んできたから、袖口で涙を拭い、サングラスをかける。
「えーと……君も」
「押井です。押井克洋」
「カッコいい名前ね、不良少年」
　くすりと少女が笑う。屈託の無い笑みに、さらに顔が赤くなるのが分かった。
「私は北村なつき。茶化しているんじゃないよ。押井、君も何かに飽いているの？」
「ええ。ぼくも、こんなナリですからね」
　克洋は立ち上がった。きっと身長が伸びるだろうからと買ったブレザーは少し袖が余っている。サングラス程度では隠しきれない、幼い顔立ち。なつきはまじまじと克洋を見た。
「なるほど。押井、君も村川と、北野と同じ？」
「ええ、多分。そうじゃなきゃ、こんな時間に映画館に来たりはしませんよ」
　そう。なつきは相槌を打ってゆっくり立ち上がる。腰に手が伸びていた。克洋はそれに気が付かなかった。胸元のブローチと表情を交互に見つめている。
「今日は、身体計測の日だったものね」
「ええ。今日が身体計測の日だったから」
　突然のことだった。腰に伸ばしたなつきの手から、黒い塊が、銃が現れた。あまりの自然さに、克洋は魔法のようだと思った。

「飽いた？」
「ええ。多分」
「じゃあ、撃っても、文句は無い？」
「それ、本物なんですか？」
　一切のためらいなく、まるでそうあるべきだというように、なつきは引き金を引いた。オープンハンマーが弾丸に装填された弾丸のお尻を激しく叩き、同時に火薬が弾ける。銃身の内部に彫られた溝に沿って、銃弾が回転し速度を増す。放たれた弾丸が克洋の頬を裂き、殴られたような衝撃を受けて顔を背ける。
　顔は人体の中でも最も毛細血管の多い部位でもある。ほんの少し弾丸が掠めただけで、どくどくと克洋の頬から血が流れて、学ランを濡らした。克洋は血でぬらぬらした頬を押さえた。
　遅れて、真鍮製の薬莢が床に転がった。じゅうと音がして、安っぽいカーペットを焦がす。
「――っ」
「次は頭を撃つ。逃げたければ、非常口から逃げなさい」
　硝煙の臭いがした。それと一緒に、花の匂いがつんと克洋の鼻孔を撫でる。なつきは突きつけるように彼に銃を構える。
「今度は、外さない。ほら、どうしたの。逃げて」
　くいくいと、銃口でなつきは緑の照明を示す。
　何かが違う。克洋は思った。多分、彼女は引き金を引くとき、もっと自然に引くだろう。引くのであれば、相手から銃口を外したりはしない。
　彼女は、ごく簡単に命を奪えるはずだ。けれども、そうしないのには何かがある。そんな気がしてならないのだ。はったり半分、本心半分で克洋は口を開く。
「だったら、撃ってください。ここで死ぬのも、悪くない」
　飽いたから。そう聞かれる前に、克洋は続ける。
「心を揺さぶられる映画を観て、それについて語れる美人に殺されるなら、悪くない。そう思ったんです」
　ごくりと、なつきが唾を飲む。これは本心だった。クレジットが終わり、申し訳程度の照明が灯る。今度こそ、完全な沈黙がシアターを埋め尽くした。頬に感じる痛みにも関わらず、克洋はまっすぐになつきを見つめ返した。
「あなたは。肝っ玉が大きいの？　それとも、お馬鹿さん？」
「……どっちだと思います？」
　美和は静かにため息をついた。再び、流れるような仕草でホルスターに収める。変わりに取り出したのは、薄手のハンカチだ。シルクの柔らかな感覚が克洋の頬を撫でる。薄い布地にじわりと血がしみる。
「今から、それが分かる」
　なつきは克洋の手を取り、ハンカチをおさえつけるように持って行った。冷たく、柔らかな女の子の手の感触に、克洋の身体が一瞬こわばった。
「あの、これは」
「あげる。着いてらっしゃい」
　言い終えるやいなや、なつきがすたすたと歩き出した。慌てて克洋が出口の方へ消えた小さなお尻を追いかける。
　出た瞬間、克洋がつんとした臭いを感じた。酸っぱい臭い。なつきと、その腰にあるものと同じ臭いがした。火薬だ。

チケットを売っていた老人が、カウンターに突っ伏したように転がっていた。居眠りをしているように見えたかもしれないけれど、頭にあいた穴が、それを否定している。
弾丸が、こんなに大きな穴を開けるのか。克洋は言葉を失った。食い入るように、亡骸を見つめている。
「血が流れていない……」
「当然。あなた、ＳＦを読んだことはある？」
「多少は」
「十分よ。じゃあ、人造人間が人間の世界に紛れ込み、秘密裏に征服しようとしているって設定はどう思う？」
なつきの言葉に克洋は頷いた。そんな映画を観た気がする。人の手によって作られた人造人間が人の世に紛れるのだ。ハリソン・フォードの不機嫌そうな顔が印象に残ったくらいで、内容は覚えていない。
克洋は息を呑んだ。言いたいことが分かるのと、受け入れられるかは全く別の話だ。
「バカげてる」
克洋は静かに呟いた。それを聞くや否や、なつきは拳銃を抜いた。立て続けに発砲。息絶えた老人の後頭部に弾丸が突き刺さる。その衝撃でべろんと頭皮がめくれ上がる。中にある丸い、機械の塊に、無数の焦げ跡が走っている。血は流れなかった。衝撃で吹き飛んだ眼球が、ごろりと克洋のブーツにぶつかった。こちらへ来るなら受け入れろ。虚ろな目がそう語った。
「これでも、バカげてるって言い張る？」
「世界って、滅茶苦茶だって思いました」
「そうなの？　押井。自分の顔を見てみなさいよ？」
克洋はガラスに映る顔を除いた。唇が歪に歪む。
「今のあなた、凄い笑ってる」
克洋は表情を引き締めようとした。けれど、無理だった。
「この滅茶苦茶に、巻き込まれてみたいと思わない？」
何かが変わると思った。あまりに陳腐な表現。けれども、色の無い世界が突然鮮やかになった。
息絶えた老人から。
転がった薬莢から。
そして、なつきから。
克洋は頷いた。
「そう」
静かになつきは微笑んだ。女神のように、静かな微笑だった。その表情に克洋がどぎまぎとしている時、小さな影が躍り出た。
「ナツ先輩！　向こうはクリ……その人は？」
頬を微かに上気させた、子猫のような少女だった。人工のものと分かる金髪を、鋭角的ツインテールに結っている。今時の女性らしく、派手な外見だった。吊り目がちな眼を際立たせるようなメイクをしている。背丈こそ克洋よりも低いが、短いスカートやすらりと伸びた脚。自分の魅力を理解した格好は、それはそれで克洋に苦手意識を持たせた。手にしたなつきと同じ型の拳銃と、悪魔の鉤爪を思わせるナイフを含めて。
「新入部員。ここを見られちゃったし」
「はぁ？　何言ってるのさ、ナツ先輩！　いつも通りサクッと薬で眠らせるなり消すなりなんで

もすればいいじゃん！」
　さらに目を吊り上げて、少女がまくしたてる。突如出て来た物騒な言葉に、克洋が鼻白む。なつきも困ったように頬をかく。
「気に入ったの。撃って脅して、〝スナッチャー〟を見せて、まともに受け止められる人間は貴重じゃない？　後は一押し」
「だからって！　こんなチビで、やれるっていうの？」
「その言葉。そっくりそのまま、返って来ちゃうけど」
　なつきが金髪の少女頭を軽く撫でる。恥ずかしがって頬を赤らめているが、逃げようとしているわけでも無い。
「そういうことだから、来て。この子も悪い子じゃないの」
「はぁ……」
　引っかき回されているな。そんな気がしながらも、克洋は彼女に従うまま、映画館を後にした。
　外に出ると、先程まで聞こえていた筈の下品な音楽はどこにも無かった。変わりに、自動ドアが何かにぶつかっては閉まろうとする音だけだった。戸惑う克洋に噛みつくように、金髪の少女が詰め寄る。
「押井だっけ。アタシは安藤千尋。ナツ先輩はああ言ってたけど、信用できない。だから、ちょっと、見て貰わなきゃね」
　千尋が、押井にパチンコ店の入り口を見せつける。
　生首が、自動ドアに挟まれていた。
　とんでもない力で殴り飛ばされたのだろうか、後頭部が陥没して千切れた首が転がっていた。眼は飛び出さんばかりに見開かれ、濁ったそれは全く別々の方向を向いている。克洋は顔を伏せる。そうはさせまいと、千尋が顔を押し上げ、すかさず瞼をぐいと押し広げられて、その光景を見せつけられる。
　克洋の眼にじわりと涙がにじむ。
「へっ。見てよナツ先輩！　ぶるって泣いちゃってる！」
「生理現象よ。意地悪は止めなさい」
　けれど、なつきはそう言って克洋を見つめる。銃を向けたあの時よりも、冷たい顔だった。
「けれど、千尋の言うことも間違いでは無い。人造人間の、〝スナッチャー〟のしでかしたことよ。目に焼き付けておいて」
　転がる生首を軽くつま先でつついて、なつきはパチンコ店に入り込む。
　原色で飾られた眩しい空間。そこを弾痕の黒と鮮血が、てらてらした淡いピンク色の脳みそが、およそ人体が外も中もひっくるめて全部見せうる限りの色がぶちまけられていた。
　タバコや金属の臭いさえもかき消す、血と臓物と糞尿と硝煙の臭い。驚いて深く息を吸ったあまり、克洋はむせ返る。辛うじて先程胃袋に納めたポップコーンと牛乳をぶちまけそうになるのを男としての矜持が堪える。千尋はともかくとして、なつきにだけは情けない姿を見せたくなかった。
「人のやれることじゃ、ないですね」
「ヒトの形をした、『何か』ならやれるの」
「それが、〝スナッチャー〟ってことですか」
　克洋がうんざりしたように言うと、千尋は意地悪な笑みを、なつきは目にかけている生徒が期待通りの答えを言った時の教師を思わせる笑みを浮かべた。

「なに、アンタって死体でおっ勃てるタチ？」
「まさか」
　そこでようやく、克洋は自分が笑っていることに気が付いた。それが異常なことであると、正常であると信じたがる理性が告げる。克洋は表情を引き締める。それが、パチンコ玉を口に詰め込まれ、何度も殴打された死体だから、なかなか悪趣味だ。椅子にもたれる死体の周囲に、赤くぬらぬらした白と鈍色が転がって、濁った照明を照り返していた。口は真っ赤だ。歯と言う歯が砕けたのだ。
「目的も、出自も不明。けれども、一つ確かなことは」
　なつきはそこで一度言葉を区切る。
「連中は、人を殺してなりかわる」
「そう。そして、殺しが大好き」
　ごとりと何かが動く気配がした。なつきや千尋が小さく身構える。とっさに克洋が身構えて、なつきの前に立った。
「殺し損ね？　千尋、後でおしおきだから」
「……ん」
　なつきの冷たい声に、どこか湿った吐息で答える少女を見て、克洋もようやく千尋の倒錯に気が付いた。裸の彼女達が絡み合う様子を夢想しかけたが、飛び出して来た、顔のめくれ上がった〝スナッチャー〟の姿を見て、それも一瞬でかき消えた。〝スナッチャー〟は千切れた人の腕を握っていた。突き出た骨を斧のように構えている。
「邪魔よ、お嬢ちゃん！」
　克洋の身体が、千尋に引っ張られる。細い腕にも関わらず、その力は強い。多少踏ん張ったところでどうにもならない。克洋がほとんどパチンコ台にぶつかるようにつんのめった。
　克洋の後ろから、流れるような動きでなつきの細い腕が伸びた。少女の手に相応しい、美しい拳銃が握られていた。
　リズミカルな二連射を四セット。四肢に計八発の弾丸を受けて、その〝スナッチャー〟は地面に転がった。それでも身体を芋虫のようにくねらせて前に進もうとする。がちがち、と歯が音を鳴らしている。なつきはホールドオープンの起こった拳銃のマガジンを交換する。克洋は自分のやったことがあまりに馬鹿げていることだと気付いて、己を恥じた。
　彼女達が、この殺戮の原因を倒したのだ。自分が呑気に映画で泣いている間に。前に出る必要なんてなかったのだ。彼女らにとってはこれは当たり前のことなのだ。克洋の眉が自己嫌悪に垂れ下がる。
　それを見たなつきが、ふと克洋の前に拳銃を突き出した。克洋の手を取る。指の冷たさに、銃の重さに、克洋が驚いた。
「ファブリカ・ダルミ・ピエトロ・ベレッタ。Ｐ×４。私の知る限り、世界で最も野蛮で、美しい武器よ」
　突然の説明に、克洋は呆然となつきを見つめる。
「これが凄いのはちょっとしたパーツ交換で強力な弾丸を使えるようになること。今入っているのは.45　ＡＣＰ（オートコルトピストル）。獰猛なフィリピン人を殺すために産まれた、強力な弾丸」
　まるで初恋の話をするような、甘さを含んだ語り。
「撃ってみる？」
　克洋はなつきと拳銃を交互に見た。ニヤニヤと千尋が自分を見ていた。指の一本一本を絡めるよう、なつきは銃を握らせる

じわりとベレッタを握る手が汗ばんだ。普段なら気持ち悪いと感じる手汗が、今日はどうも心地よく感じた。青春を賭けられるものは、他にはないと思った。
ここで引けなければ、なつきと千尋は自分を見放すだろうという想像がついた。大した気負いも無く、彼女らは出来るのだ。
殺しも、殺させるのも。それが当然の世界で生きているから。
克洋はゆっくりベレッタを持つ手を伸ばす。引き金に指をかける。北野武の演じるヤクザのように。人体工学に基づいた銃は、恐ろしいほど克洋の手に馴染んだ。強化プラスチックの冷たさだけが、それは異物であると伝えている。
克洋の額に汗が滲む。眼を大きく見開いて、息を整える。引き金に少しずつ力を込める度に、呼吸が荒くなる。どくどく。はあはあ。全身のあらゆる細胞を意識出来るような気がした。
ゆっくりと近づいて来る〝スナッチャー〟と、眼が合った。虫のようなそれを見た瞬間、克洋は引き金を引いた。
反動で銃が跳ね上がる。それの目玉が弾け飛んで、動かなくなった。それでも、克洋は何度も引き金を引いた。引くたびに、自然と笑みが込み上げて来る。
人(正確には違うけれど)を殺すことは、簡単なことだった。
「おめでとう。構え方は修正する必要があるけれど」
握らせる時と同じように、なつきは彼の手からベレッタを取ってホルスターに戻した。克洋はやわらかな感触と火薬と清潔な石鹸の匂いに包まれた。一瞬遅れて、なつきに抱擁されているのだと気が付いた。なつきの肩越しに食い殺さんばかりに犬歯を剥き出しにする千尋も忘れ、克洋はその感覚に酔った。
克洋も、彼女達と一緒の場所に来たのだ。
克洋は大きなことを成し遂げた達成感に包まれた。それもひとりではなく、なつきたちと共に。その決断を強いたのは彼女らであるけれども。手口はマインドコントロールとか、カルト宗教のそれだ。そんなことは分かっている。これは儀式だ。
それでもいいと克洋は思った。彼女らとならば何でも出来る。達成感に満たされた。死体まみれのパチンコ屋の中で。
ぬらぬらとした血だまりとジャンクの上で、克洋は思う。
「三か月だ。三か月で君を一人前の殺し屋にする」
「それまでにくたばってみなさい。アタシが殺すから」
「……はい！」
※
三か月の間、克洋は徹底的に自分を苛め抜いた。なつきから渡された特訓メニューは限界という細い綱を渡るようなものだったし、格闘戦の訓練になれば、千尋は半分以上殺しにかかって来ていた。それでも、克洋は耐え抜いた。憧れの人の傍にいれることは勿論だったが、単純に、楽しかった。
そう、楽しかったのだ。殺しのために肉体を改造することも。弾丸を一日千発以上消費することも。模擬訓練用のペイントナイフで、千尋の容赦ない攻撃を凌ぐことも。
身長は伸びなかったが、克洋の身体の線はより細くなった。けれど、体重は増えた。全身がしなやかな凶器になった。
健全な精神は健全な肉体に宿ると言ったもので、克洋はその数か月の間で、身長を気にしなくなった。なよっとした女顔も変わらないが、けれどもその下地に芯のようなものが出来た。
世界を変えるのは難しいが、自分を変えるのは、簡単だ。

世界を面白くするよりも。世界は面白いと思う方が、簡単だ。
それが部活動であろうと、勉学であろうと、休日にカラオケに行くことであろうと。そして、人殺しであろうと。
気が付くとサングラスも外していた。
唯一の不満と言えば、自分が現場に行けないことくらいだ。
彼らの学校から割り当てられた部屋で、克洋はソファにもたれていた。驚くことに、〝スナッチャー〟殺しの活動は学校からも認可されているようで、顧問もいた。でっぷりとしたビール腹の、さえない数学教師だった。
部活の名前は〝清掃部〟。あまりにまんまだから、克洋は〝スナッチャー〟にバレやしないかと時々不安になるほどだ。部室というよりは、家だ。暮らすことだってできるかもしれない。
「驚いた。たった数か月でこうも変わるものとはね」
「なつき先輩のおかげですよ」
ソファにもたれ、なつきは50インチの液晶テレビで映画を観ていた。夭折したＳＦ作家の作品がアニメ化されたものだ。死んでさえも名前を使われるのは、なかなか忙しい男だ。
そのテレビさえも、備え付けのものだから、克洋は銃を持つことに対する見返りの大きさを感じずにいられなかった。
「そろそろ、君に仕事を任せたい」
どくんと克洋の身体が熱くなるのを感じた。銃を握れる興奮に、磨いた技術を活かせることに、心が踊った。部活と言うものにろくに参加したことはなかったが、きっとレギュラーに選ばれた時はこんな気持ちだろうと克洋は思う。
「メンバーは、あと時間は」
「私と千尋。そして君だ。〝スナッチャー〟の小規模な集団が根城にしている場所が見つかった。今日の夜に襲撃をかける」
「映画館とパチンコ屋の次はどこですか？」
「そう急かない。焦る男はモテないよ」
場所は小さなスポーツジムだった。〝スナッチャー〟が成り代わるのは、基本的には成人だった。子供の骨や筋肉の成長を再現できないからとも噂されている。とはいえ小学生に殺しを任せるわけにも行かないから、高校生が殺し屋をやるのだ。
「隠れ家にはうってつけの場所ですね」
「そう。ドンパチするにもうってつけ」
「不謹慎ですよ。今から、人殺しをするのに」
あら。そう言ってなつきは振り返る。
「撃ちたくてうずうずしてるくせに」
「……その言い方、ずるいですよ」
なつきは色々な顔を持っている。飄々とした女性。容赦なく銃を撃つ殺し屋。千尋や克洋に厳しい訓練を課す嗜虐的な教官。マイケル・ベイのダメ映画もケラケラ笑って見る、無邪気なシネフィル。そのいずれの顔にも、克洋は惹かれたの。
高揚が彼の心を満たす。けれども、それは戦いの為ばかりではない。なつきの裸身を思うのも、一度や二度では無い。
「仕事が終わったら、映画にでも行きませんか。今度の休日」
ふと、なんという計画も何も無く、克洋はそう言った。頬が熱くなるのが分かる。なつきはテレビに視線を戻した。

映画も佳境のようで、聖歌を思わせる荘厳なコーラスが流れていた。それをぼんやりと見ながら、なつきはぽつりとぼやく。
「二人で？」
「ええ」
克洋は一度唾を飲み込んでから、強く頷いた。
「二人で」
ふふっ。となつきは吹き出した。くすりと笑った。甘い息に、克洋はばつが悪くなって眉を下げた。
「いいよ。仕事の前に、未練を作るのは悪い事じゃない」
やっぱりずるい人だ。克洋は声には出さずにそう言った。多分、克洋が彼女を慕っていることくらい、気付いているはずだ。多分、千尋が慕っていることも。気付いた上で、それについて手を伸ばさないのだ。
「ちょうど、見たい映画があるんだ」
ゆっくりとなつきは立ち上がる。そのまま、棒立ちになった克洋に近付いた。彼は頬に柔らかな感触を感じた。
「ナツ先輩ーっ！」
それが何か、克洋が気が付く前に、なつきは猫のような俊敏さでソファに身を隠戻した。
バガンと扉が開き、千尋が姿を見せる。
「先輩、今から仕事ですよね！　やりましょう！　今度の休日でも、ご飯行きませんか？」
「あー……ごめん。ちょっと先約入っちゃって」
なつきが頬をかいた。千尋がしゅんとする。鋭角的ツインテールが垂れ下がる。その理由を知られれば、半殺しに遭うことは分かっていたので、克洋は準備に取り掛かった。
厳重に鍵のかけられたロッカーを開く。今ではもう馴染んだ匂いだ。酸っぱい火薬の臭い。金属と油の臭い。
「武器はどうします」
「サブマシンガンまでなら承認されてる。ボディアーマーも」
了解。克洋は軽く返して、いくつかの武装を取り出した。口径はいずれも統一してある。なつきと千尋はベレッタＰ×４ピストル。克洋は自分用にタウルス社製のガヴァメントを。いずれも口径は統一してある。.45ＡＣＰ弾。サブマシンガンのクリス・ヴェクターも同じ口径の弾丸だ。
〝スナッチャー〟であれ、人であれ。殺すにはこの程度で十分なのだ。何もアクション映画のようにバカでかいライフルを使う必要などない。
弾切れや故障に備え、最低限の自衛措置として、克洋はサバイバルナイフと数本の鞘も手に取った。千尋用には、鉤爪を思わせるカランビットナイフ。指を差し込む穴があって、それを起点に、操るのだ。
克洋はナイフの扱いが得意とは言えなかったが、千尋は別だった。まるで手足の延長のように彼女はナイフを操り、首をかき切ることが出来た。
制服の下に着込むボディアーマーも、手軽なものだ。防弾性能はおまけ程度のものだが、数発であれば耐えられるのは、大きな安心感を与えてくれる。ゲームで例えるなら残機性になったようなものだ。それと、戦場でもお構いなしに、スカート姿で駆けずり回る女性たちに、膝や肘を保護するプロテクター。
「なつき先輩が、膝小僧を擦りむいてまわるとは思えないけど」
「へぇ。アタシはいいんだ」

黙々と、三人は装備を整える。長いストッキングの上から、なつきはプロテクターを備える。長い脚に不釣り合いな、無骨なプラスチックの隆起は、それはそれで不思議な色気があるものだと、千尋は唾を呑んだ。その様子が、克洋はなんとなく克洋は面白くなかった。マガジンに弾丸を込めながらこっそりと脇を小突く。
「おい。何じろじろ見てるのさ」
「脚」
「じゃなくて」
「アンタこそ、見とれてるくせに」
なつきは、克洋に向かい合うようにして弾丸を込めている。プロテクターが邪魔になるにも関わらず、脚を組み替えている。その様子を、それとなく克洋は視線を追う。テレビの光で照らされる太腿が眩しい。今度は千尋が小突く番だった。
「スケベ」
「……プロテクターが邪魔だと思っただけ」
「良いじゃない。美女に武器と防具。ヴァルキュリアみたい」
死者を導く乙女か。既に殺され、すり替(スナッチャー)えられた魂に本当の死を与える。確かに、言われてみればそんな気もする。
だとすれば。彼女に導かれ、銃を握ったぼくはどうだろうか。そんなことを思い、彼はマガジンを挿し込んだ。
「ぼくはさながらエインフェリアか」
「そんなに立派なもんじゃないっしょ」
脛を小突かれ、克洋が顔をしかめた。それじゃあ、女神に仕立て上げるのも誇大過ぎやしないか。なつき先輩だって人間なんだぜ。そう言えば、千尋が余計に怒ることが分かっていたので、止めた。
千尋はどうも、なつきを神聖視している。彼女の為なら、全てを捧げるだろう。自分の頭を撃ち抜くことだって、厭わないはずだ。『ＢＲＯＴＨＥＲ』のヤクザみたいに。
「あと五分もすれば、迎えが来るわ」
クリス・ヴェクターを肩のスリングでひっかけながら、なつきは立ち上がる。克洋も、彼の手には少しばかり大きなガヴァメントをホルスターに納める。その重さが、克洋を安心させる。武器を持つと安心する。克洋はそう思っている。拳銃には力がある。その力が、持つ人間を安心させる。
身長が低かろうが、性別が女だろうが、引き金に一キロばかり力を加えるだけで、いともたやすく人を殺すことが出来る。
力とは優位で、余裕なのだ。
けれども、そこまで彼は気が付いていなかった。
克洋も、スリングを引っかけるようにしてヴェクターを背負う。プラスチックのようなちんけなそれも、わずか二秒で三十の死をばらまくことが出来る。
「どう、今の気分は」
なつきは、昂ぶりを抑えられないでいる克洋を見て、柔和な笑みと共に尋ねる。
「最高です」
克洋は出来るだけその昂ぶりを勘付かれないように、感情を抑えた声で、静かに答えた。
「上出来。そう気負わないで、最初だから、楽な仕事よ」
まるで映画に出て来る兵士のように、なつきは克洋の胸を小突いた。克洋も返そうとしたが、

胸元に見える膨らみとブローチを見て止まった。流石に、女の胸を触るような真似をしでかすわけにはいかない。仕事もまだで千尋に殺されたくはない。
車のエンジンが響く。迎えのミニバンが来たようだった。
「行こう。死なないようにね」
　ヴァルキュリアが、前に進む。克洋と千尋は静かに頷いて、後に続く。魂を導かれる戦士のようだと、心が踊った。
※
　スポーツジムの受付が、無数の弾痕で醜くめくれ上がっていた。あちこちで、死体が散らばっている。臓物をぶちまけて白い床を汚していた。血の海に、バラバラになった〝スナッチャー〟の残骸が散らばっている。
　狭い室内を、銃の放つ閃光が満たす。誰かの咆哮が響く。それが誰のものなのか。克洋は気が付かなかった。
「下がるよ、お嬢ちゃん！」
「でも！」
「でもも、何もない！」
　それでも。克洋は叫ぶ。叫ばずにはいられなかった。ほとんど、言葉をなしていない、獣のような声だった。
「なつき！」
　克洋の数メートル先、大小さまざまな火線が幾重も飛び交う廊下。そのど真ん中で、仰向けになって、なつきが倒れていた。
　理性や魅力を湛えた瞳は床に散らばる澱や血と同じ色に変わっていた。すっかり濁り切っている。
　長い艶やかな髪は、血の中に散らばって広がっている。血の海に沈むオフィーリアのようだった。
　そして、なつきの身体には、小さな穴が、ぶすぶすと開いていた。腕に、お腹に、胸に。そして首に。本当に小さな穴だった。そこから、どくどくと血が溢れている。
　首に開いた穴が、銃弾の熱で醜く盛り上がっていた。血が溢れ、少し前までは口や鼻から出ていた筈の空気と混ざり合ってごぼごぼと血の泡を作っている。
「ぐずぐず言うな！」
　ほとんど泣きそうになっている克洋を見て、千尋は彼よりもいくらか冷徹に、けれども金切り声になって、叫ぶ。
「アンタも死ぬぞ！」
　その一言と同時に、一際酷い銃火が煌めいた。地面を裂き、切り上げるように放たれた弾丸が、なつきの身体を、二人の隠れていた遮蔽物を引き裂いた。
　少女の身体が弾けた。
　少女が肉の塊になった。
　散らばった服の断片が、克洋の前に転がった。鮮やかな青いブローチが目に入る。それをひっつかんで、踵を返した。
「ほら、早く！」
　千尋が二挺のサブマシンガンを連射しながら〝スナッチャー〟たちを牽制する。けれども、圧倒的に不利なのは間違いない。向こうは、肉体も何もかもが人間を上回っていて、それでいて銃を持っているのだ。

自分たちの特権だと思っていた牙を、敵が持っていたのだ。
自分はおもちゃを手に入れて粋がっていた子供に過ぎないのだと、克洋はようやく気が付いた。
千尋の援護を受けながら、克洋もろくに照準を合わせることなく、ガヴァメントを連射した。
泣きじゃくって、ブローチを握り締めて、弾倉を交換して、撃ちまくって、克洋は逃げた。出来ることはそれだけだった。
最初に入って来た扉が目に入った。足元に、首元をかき切られた〝スナッチャー〟の残骸が転がっていた。千尋はいい仕事をした。なつきは言うまでもない。克洋も全力を尽くした。それでも、死ぬときは死ぬのだ。一切のドラマも何もなく、当たり前の自然の摂理であるかのように、
なつきは死んだ。
ヴァルキュリアは存在しないのだ。
※
薄暗い部室。唯一の照明は、青い画面を映している50インチのテレビだけだった。克洋は腫らした眼を、スモークの薄いサングラスで覆い隠していた。ソファにもたれ、ぼんやりとテレビを眺めている。部屋には無数のＤＶＤがある。なつきの私物だったらしい。その中の一つを、彼はぼんやりと見ていた。
青い空と海、そして自然の中に切り開かれた不自然な道路を、一台の車が駆けている。運転手は、虫の眼をしていた。画面の照りが、克洋の顔を映した。同じ眼をしていた。
やがて、その車は路肩にふと停まった。
ほとんど無音の空間。克洋はぼんやりと、テーブルの上に置かれていた、青いアネモネのブローチに視線をやった。花弁に、乾いて黒くなった血がこびりついていた。花言葉は「待望」、「期待」、そして「見放された」。最後はいい塩梅だと彼は思う。
この数日の間、不思議と涙は出なかった。何をしたか克洋はよく覚えていないけれども、ガヴァメントは手放さなかった。
テーブルの上に放り捨てられた携帯電話に、メールが届いた。ほとんど義務感のような調子で、克洋はそれを開く。スパムだ。
そう言えば、なつきからメールアドレスを聞いていなかったなと思い出した。最近はチャットアプリが便利だから、メールアドレスを教え合うこともなくなった。
ディスプレイに、映画サイトへのショートカットがある。大手のシネコンの予約やスケジュール確認に使えるそれは、二席ぶんの予約がされていることを示していた。
それで泣けるかと思ったが、逆にバカバカしくなって、克洋はそれも放り投げる。映画に集中することにした。
映画の中で、男は拳銃をこめかみにつきつけていた。
克洋も、それに倣ってガヴァメントをこめかみにつきつけてみる。不思議と気分が落ち着いた。力とは余裕だ。その方向がどこに行こうが、安息を与える。たとえ自己破壊を試みる時も。
『押井です。押井克洋』
『カッコいい名前ね、不良少年』
克洋の双眸に、涙が滲んだ。
――ぼくは、立ち止ってしまった。
――あとは、落ちるだけだ。
――ぼくは不良少年だ。
そう思えれば、あとは早かった。ぐっと引き金に力がこもる。

必要なのは、勇気でも覚悟でもなく衝動だ。
※
乾いた銃声が響く。
克洋の足元にかしゃんとガヴァメントが落ちた。
こぼれる涙と血でぐちゃぐちゃになった液体が胸元を汚した。

ああ。
――ぼくは、死ぬことすらできやしないのか。

パルティール考古堂業務報告書 Ⅲ
幼夏

　濡れた土の香りで目を覚ます。細く開いた窓の向こうから、時折風に乗って、霧雨が吹き込んだ。
　春のパルティール考古堂は、明るいピンクの絨毯の上に鎮座する。広大な土地に敷き詰められた芝桜は、小春の日傘〈ピンクパラソル〉という品種らしい。
　いつもより、随分と早い起床になってしまった。今日は「客人」のある日だ。いつもより少し飾り気のある服を選んで、袖を通す。
　居住スペースの二階から、「店舗」である一階へ降りる。寝ぼけ眼を擦りながら、店に足を踏み入れると、そこには既に「客人」があった。どうやら、今来たばかりらしい。客人は恰幅の良い中年の男性で、考古堂には似つかわしくないモダンなサマーコートを羽織っている。コートや革靴についた水滴を、使用人が丁寧にふき取っている。
　客人に対応している店長――バシラス・サブティリーが、「こちらへどうぞ」と私に目配せする。
「こんなに早い来客だなんて、聞いてませんよ店長」
　私が店長の耳元で囁くと、店長も困ったように笑う。
「十四時からの約束だったのですがね。どうしても、とおっしゃるので」
　尊大な客人は、ようやくコートを使用人に預けた。店長が客人用のソファを勧める前に、断りもなく椅子に座る。
　この店に来る客人は、二種類いる。一つは、この考古堂に並べられた、アンティークの品々を買いに来るお客だ。偶然、この店を発見した人間か、古くからのお客である。そしてもう一つは、この店「本来のサービス」を利用しに来た客人だ。今回のお客様は、見るからに後者だった。
　ソファの背に体を預け、大股を広げる客人の隣で、その使用人が頭を下げた。
「こちらの都合で、このような早朝に、申し訳ございません」
　使用人が六人。ここに来訪する際は、通常、最小限の使用人しか連れてこない。それでいて六人連れてきている、ということは、相当な家の人間か、もしくは考える頭が足りないか。どちらかに限られる。
　店長は微笑み、物腰柔らかに応対する。
「構いませんよ。お足元の悪い中、感謝します」
「早速だが」
　客人が、口を開く。酒に焼けているのか、潰れた喉から零れる声は、年齢以上の老いを感じさせる。
「一つ質問がある」
「はい、なんでしょう」
「どんな相手でも、暗殺出来るというのは、本当なのだな」
　男は、神妙な面持ちで語り掛ける。
　そう、「暗殺」こそが私たちの「本来のサービス」だ。貴族や実業家たちの間で秘密裏に語り継がれてきた、私たちの存在。
「――もちろんです」

店長は笑みを絶やすことなく、平坦に返答した。
「さらに問うが。仮に、暗殺対象が誰なのか分からなくても、出来るのか」
店長が、ほお、と表情を変えた。
「詳しくお聞かせ願えますか」

＊

依頼主である大柄な中年男――ボレリア・スピロヘータは、使用人に恭しくコートを着せられ、大股で店を出て行った。出際、わずかに振り返った彼の顔には、すがるような思いと焦燥が浮かんでいた。
「今回の件、厄介だね」
背後で話を聞いていたのだろう、少年は唐突に口を挟んだ。
「ラクト……あなたがこんな時間に目を覚ますなんて、珍しいわね」
私がからかうと、少年――ラクト・ガルビエは一度きょとんとした顔をして、遂には吹き出した。
「ベニス、いったいどの時計を見てた？」
この考古堂に置かれている時計は、どれ一つとして正しい時間を刻まない。こちらの時計はお昼時、あちらの時計は朝もやに取り残されていた。どうやら私は、都合のいい時計の時間ばかりを目で追っていたらしい。正しい時間を刻む私の腕時計は、九時を指していた。
「つまり、私たち、三時間近く彼の話を聞いていたってこと？」
「そうなりますね」
店長が苦笑する。
「宗教家というのは、どうも話が長くてかないません」
ボレリア・スピロヘータは、五大公爵家のひとつ、スピロヘータ家の長男だ。スピロヘータ家は、この国の最も主要な宗教である「ヒエリア教」を強く信仰していることで有名だった。
「『宗教家』と言うより『狂信者』といってもおかしくない様子だったけど」
「だからこそ、今回の依頼に踏み切ったのでしょう――」
今回の暗殺の標的。それは、「異教徒の扇動者」だ。
彼らの言葉を借りれば、ほんの数か月の間に、彼の屋敷を「悪魔の子が占拠し始めている」らしい。異教徒を誘い出し、どれだけ『排除』しても、その数は減ることはなく、寧ろ増加の一途を辿っているらしい。やみくもに屋敷の人間を処分したはいいものの、何の成果も得られず――じわじわと、信仰の侵攻は進行したようだ。彼の焦りが、彼をここへ連れてきたのだろう。
「異教徒にはほとんど共通点がないんでしょ？　メイドだったり、絵師だったり――」
「一応、見つかった異教徒は、みんな数字の焼き印が入ってたみたいだけど……」
「四二、八六、一一〇……だっけ？　これもばらばらじゃん。本当に扇動者がいるかどうかも怪しいし、大丈夫かなあ、この依頼」
ラクトが心配そうに首を捻る。実際、何から手を付けていいのかも分からないような事件だった。異教徒が見つかるようになった頃に、勤め始めた使用人はいないのかと尋ねたが、明確な答えは得られなかった。本人も、屋敷に出入りする人間を把握しきれてない様子だった。
「ともあれ、情報を集めないことにはどうにもなりません。ベニス嬢、行ってくれますね？」
ボスの呼びかけに、私は力強く頷いた。

＊

土地の広さは、何よりも明確に富を反映する。スピロヘータ公爵家がいかなるものかは、庭の様子からして瞭然だった。
「これは、通いの使用人がいないわけだ……」
思考が口から零れたが、その声を聴く者はいない。屋敷にたどり着くまでの途方もない時間、いったい何人の庭師とすれ違っただろうか。庭の各所に設けられた深い人工池には、コイからワニまで、あらゆる『水辺の生き物』が飼われていた。高い生垣は、外界の視線を一切受け付けない。ここまで徹底した隔離は、潔癖症の主人を想像させた。
しかし、屋敷についたとき、重くなった足の疲れさえ忘れる程の衝撃を受けた。屋敷と呼ぶのが躊躇われる――この建物に反射的な畏怖を抱いてしまうのは、私も幼い頃、ヒエリア教を教え込まれていたからかもしれない。
屋敷は正に、教会そのものだったのだ。

＊

『それで、どうだったの、この一週間』
週末、ようやく一人になれる時間を見つけ、ラクトと連絡を取った。
「今週は、仕事を覚えるので精いっぱいだったわ」
『仕事？　ベニスの仕事はただの掃除婦でしょ？』
「ほかの屋敷とは勝手が違うのよ。――ヒエリア教経典の、第二章第一節、言える？」
『無理だね。僕――おれは、神様って信じてないんだ』
「『人は命に寄り添って生きるもの。常に命を傍らに置きなさい。静かな朝は生花に口づけ、夜が深まれば小鳥に歌を教えなさい』」
『ベニスがそんなに熱心なヒエリア教徒だったなんてね。初めて知ったよ』
「違うわ、暗唱させられるの。それに、自然と覚えるのよ」
『自然と？』
「だってこの屋敷、経典になぞらえて、全ての部屋に鳥かごと活け花が置かれているんだから」

電話を切ると、掃除婦宿舎の窓に目をやった。こんな屋敷の末端でさえ、全ての窓にステンドグラスがはめられている。あしらわれているのは、万能神ヒエリアの十三子の一人だ。後頭がベールに包まれた横顔に、笑みはない。これは、何番目の子だっただろうか――
「これだけこだわっていて、異教徒が紛れ込もうものなら、耐え難いのも分かるわ」
四人部屋の宿舎に、私一人。いや、一人と一匹と言うべきか。静かな部屋で、小鳥が歌っている。今週末は、五公爵が集まるティーパーティーが開かれるため、屋敷の中はがらんとしていた。今日までの一週間で成し遂げられたことは、屋敷を隅々まで歩き回って、マップデータを集めることだけだった。ラクトの手にかかれば、明日にでも屋敷の地図が完成することだろう。
「ここにずっといても、仕方ないよね」
私は、屋敷内の散策に出かけた。こんなに人気のない屋敷内は初めてだ。聞こえるのは、小鳥の声ばかり。
中庭に面する廊下に出ると、大理石の床が少し濡れている。雨上がりの庭に集まった光は、あらゆる場所に飾られたステンドガラスを通過して、色の柱を成している。

不意に、色の柱が鮮やかな音色を奏で出す。
メロディーの源は、もちろん光ではない。よく耳を澄ませると、その音が上階から響くピアノの音であることに気が付いた。
中庭に面している上階の部屋で、ピアノが置かれている場所は――
「楽師室？」
おかしい。楽師はみなパーティーの余興係として連れ出されているはずだ。私は音に耳を傾けながら、楽師室へ向かう。

楽師室は、この屋敷の中で最も空に近い場所にある。十三部屋ある楽師室は、大聖堂――建物を下から大きくえぐったような、五階分の吹き抜け――の上に並んでいる。ピアノの音は、十三番目の楽師室から響いていた。
少々強めに、四回ノックした。『弾き手』は私の存在に気が付いたらしく、ピアノの音はぴたりと止んだ。
「どなたかしら？」
扉の向こうから、凛とした女性の声が聞こえてくる。声の主が誰かは、問わずともすぐに分かった。
「お、お嬢様……どうして楽師室に」
ゆっくりと戸が開き、部屋の中から悪戯っぽい笑顔を浮かべたこのお屋敷のお嬢様――ナティア・スピロヘータが現れた。
「パーティーならお断りしましたの。わたくし、お茶はお部屋でゆっくり飲むものだと思うのだけど、いかがかしら」
ナティアをこんなに間近で拝む機会はない。私がどう答えるべきか思案していると、「お茶にしましょう、ということよ」と手招きされた。
誘われるがまま、楽師室に足を踏み入れた。部屋は随分と広いが、置かれているのは中央のグランドピアノと、活け花、そして簡易的な家具が少しだけだ。この部屋には、鳥かごがない。
「あなたのお顔、初めて拝見しますわ。いえ、それでいてどこかであったことがあるような――不思議なお顔ね」
「つい先日、お屋敷に上がらせて頂きました。お嬢様、私は」
言いかけたところで、ナティアに唇を封じられた。
「ローザ。あなたの名前はローザですわ。そうでしょう？　はい、ローザ、お茶をどうぞ」
どんどんナティアのペースに呑まれていく。本来、お茶を自らの手で入れることなどないはずの令嬢が、ガラスのティーポットにお湯を注ぐ。ガラスの容器の中で、縮こまっていた花弁が、ゆっくりとほぐれていく。お湯を注ぎ終えても、花弁は少しの間ポット内を上下した。
ナティアが椅子に腰かけ、ピアノを奏でる。本来存在しないはずの『第四のペダル』を踏むと、ピアノの真下以外の床が、突然抜けた――ように見えた。床が、フローリングの目に沿うようにして、開いたのだ。鉄骨の網目があるに限られた足元は、今にも落ちてしまいそうでぞっとしない。
彼女の指先が紡ぎ出す音楽が、網目から零れ落ちるようにして、真下の大聖堂に降り注いだ。
「ねえローザ。ヒエリア様は、本当にいらっしゃるのかしら」
「ヒエリア様は、いつも私たちを見守ってくださっています」
覚えた通りのセリフを口に出す。
「でも、おかしいわ。ヒエリア様は、『人に寄り添う命』を授けてくださったはずですのに。何

の命にも寄り添われることなく、孤独と眠る人がいるというのは、おかしくありませんこと」
　沈んだ花弁がこすれ合う。香りが立つ。
「ローザ。あなたはいつも、命に寄り添われているのですか？」

＊

　どんな話をしたのか、具体的なことは思い出せない。とりとめのない話をしたのだと思う。しかし、確かに分かったことは、ナティアは父親ほど、ヒエリア神を愛していないということだ。愛するための根拠を見失っている、そんな風に思えた。
　ナティアのもとまで、布教の波は、伝播しているということなのだろうか。異教徒を嫌う父親にとって、娘が『悪しき宗教』を信仰していることほど、辛いことはないだろう。ことは急を要する。
「ベニス嬢、ここ二週間で、何か進展はありましたか」
　ボスが私に微笑む。電話越しではないからこそ分かる、彼の表情。二週間強の時間が流れたこともあり、私は考古堂に呼び戻されていた。仮病は、潜入捜査の切り札だ。二度三度とは使えない。
「ええ、はっきりしたことが二つ。一つは、扇動者の身分がかなり高いということ。ナティア・スピロヘータまで、思想誘導が働いているみたい。ナティアに接触できる人間は限られているわ」
「なるほど。もう一つは？」
「もう一つは、異教徒と化した使用人たちが、自ら勧誘活動を行っている様子はないということ。それでもこれだけ広がっているのだから、扇動者が直接、盛んに布教活動を行っているとみて間違いないわ――それはもう、『扇動』とは呼べないかもしれないけど」
　ボスは黙って頷いた。その背後では、ラクトが足をばたつかせて、くつろいでいる。
「そういえばラクト、地図、役に立ってるわ、ありがとう」
「それはよかった」
　照れ隠しなのか、ラクトはこちらを見ない。しかし、つい先ほどまで所在無げにしていた足が、ピンと伸びていた。
「でもラクト、地図には黒く塗りつぶされた場所があったから、そこを訪ねてみたの。でも、部屋なんてなかった」
「うーん、それね」とラクトがようやくこちらを向く。
「構造上、そこに部屋がないとおかしいはずなんだ」
「不思議な話もあったものですね」
　ボスは愉快そうに笑っている。
「笑い事じゃないわ、ボス。このままじゃ、ナティアまで洗脳の餌食になってしまう」
「構いません。それは依頼内容に入っていませんから。それに――彼女が、そもそも扇動者かもしれませんしね」
「そんな――」
　真剣に言葉を交わしていたとき、考古堂の入り口に下げたベルが鳴り響いた。からんころん、という小気味のいい音と共に、義手の少女が店に入ってきた。
「お久しぶりでございます、バシラス様」
　彼女の名前は、シフォン・オーラン。訳あってバシラスになつき、度々店を訪れている。

「シフォン、ここにきては行けないと言ったはずですよ」
「そんな、冷たいです」
　シフォンは少しも悪びれる様子もなく、バシラスに近づく。最近はより快活になり、旧家の地下に閉じ込められていた身とは思えない明るさを見せている。ボスがこれほど大きなため息をつく様は、滅多にみられるものではない。
　以前、何故シフォンの命を救ったのか、尋ねたことがある。
「腕骨が、欠失してしまっていますので、殺しても価値がないからです」などと述べていたが、冗談か否かは――。
「バシラス様、頼まれていた薬草を仕入れてまいりました」
　シフォンの一言を聞いて、ボスの顔色が変わった。
「ありがとうございます、おいくらですか」
「デート一回分です」
「……随分とお高いですね」
　二人の目線は、絡まったり解けたりを繰り返す。
「バシラス様、冗談です。五グラムで、金貨三枚です」
「構いません。頂きます」
　金貨三枚、なかなかの額だ。つつましく暮らせば、半年は食うに困らない。――余程、欲しかったらしい。ボスが本当の笑みを浮かべている。
「ベニス嬢、貴方にいい『お薬』を預けられそうです」

＊

　『空白の部屋』の探索は続いていた。そこに、扇動者の決定的な手掛かりが隠されているかもしれない。しかし、結局隠し扉のようなものは、未だに見つかっていなかった。
　外は雨だ。経典の二章五節に、雨についての記述がある。雨は、「人に寄り添う命」同様、「神の子が人に与えし恵みのひとつ」だと言われている。強い雨脚と、叩かれては僅かに揺らぐ地面を眺めていた。大きな雨音に紛れて、ピアノの音が聞こえる。楽師室が使われているのだろう。また、ナティアが弾いているのかもしれない――そう考えて、私は上階へ向かった。

　結論から言って、楽師室はどれも楽師が使用していた。使用中の部屋には、楽師の名札が下がっているのだ。あの日、ナティアが使っていた十三番楽師室にも、名札は下がっていただろうか――思い出せない。
　楽師たちが思い思いに奏でる、極上の調べに後ろ髪を引かれながらも、その場を後にしようとしたその時だった。楽師室のひとつから、メイドが一人飛び出してきたのは。
　メイドは前も見ずに駆け出したため、私に体当たりするようにして、倒れ込んだ。
「ど、どうしたの」
　声をかけると、メイドが怯えたように顔を上げる。瞳には涙が浮かんでいた。それと同時に、彼女はエプロンスカートを強く引き伸ばし、足を隠したように見えた。
　私の問いに答えることなく、再び逃げ出そうとするメイド。私は、反射的にその腕を掴んだ。そして、大きく息を吸い問いかけた。
「ねえ、あなた。ヒエリア様は、本当はいないと思わない？」

＊

「そうならそうと、早く言ってくれたらよかったのに」
　ティーポットの中で、花弁が開く。その様子には、見覚えがあった。先ほど知り合ったばかりのメイドは、自分の淹れた紅茶を飲んで、ようやく落ち着いたようだった。
「ええ、タイミングが、なくて」
　適当に話を合わせる。
「さっきはごめんなさい。私、あまりに痛くて、びっくりしちゃって。驚いたわよね」
「痛くて、って――」
「ああ、これよ」
　彼女がスカートをたくし上げる。そこには、「一一五」の焼き印が入っていた。つい目を見開いてしまうのを、顔の向きを逸らして誤魔化す。間違いない。この焼き印は、異教徒の印だ。
「私は一一五番。あなたは？」
「いいえ、私は、まだ」
「そうなのね。もうすぐなら、一一六かなあ。おめでとう、貴方も『選ばれし者』なのね」
　メイドは心底嬉しそうだ。先ほどまでの怯えた表情が嘘のように、晴れやかな顔をしている。
「私も、お茶を頂いてもいいかしら」
「ええ、どうぞ」
　私は、ティーポットを受け取り、そっとソフトカプセルを中へ滑り込ませた。そして、彼女に微笑みかける。
「二杯目はいかが？」

＊

「ラクト、スピロヘータ家の使用人名簿、引き出せるかしら」
『もちろん。ここ二年分が手元にあるよ』
　ラクトの情報網には頭が上がらない。電話越しに、ラクトの得意げな様子が伝わってくる。
「ヒドリド・メガテル。楽師の一人のはずよ。経歴を教えてほしいの」
『ちょっと待ってね。――えっと、楽師は今、二十人雇われてる。でも、その名前は、名簿に無いよ。最新版だけじゃないね。該当する名前は、二年分の名簿のどこにもないよ』
　通話を終えて、愕然とする。ボスから預かった『自白剤』の効果は、てき面だった。メイドは、ありとあらゆる情報を吐いてくれた。
　新興宗教団体「ヒドリド教」は、焼き印を入れて初めて仲間と認められること。焼き印を入れてもらうためには、教祖から直接「選ばれる」必要があること。そして教祖の名前――
　しかし、『ヒドリド・メガテル』は存在していない。前方に広がっていた道が、突然断たれたかのような気分だった。このままでは、八方ふさがりだ。
「ラクト、グリシアを派遣して」
『グリシアを……？　何をする気なの？』
　私は何も言わず、電話を切った。

＊

　人の寄り付かない、屋敷の倉庫前。私の隣には、白髪灰眼の少女、グリシア・ストレプトが立っている。その手には、可愛らしいバスケットが握られているが、中身がものものしい肉断ち包丁だとは、誰も思うまい。
　今日も、雨が降っていた。
「グリシア、一つだけ約束して」
「うん」
「私が指を鳴らしたら、迷わず目の前の人間を『立てないように』して。あとは、ついてくるだけでいいわ」
「うん、わかった」
　グリシアは、素直にうなずいた。

『ベニス、準備はいい？』
　耳元から、ラクトの無線ナビゲーション。もう後がないのだ。なんとしても、『ヒドリド・メガテル』を見つけて、処分しなくてはならない。
　私は、「空白の部屋」に、ヒドリド・メガテルが潜んでいるのではないかと考えていた。空白の部屋に繋がる扉は、どこを探してもなかった。廊下に扉がないとなれば、どこか、探索不可能な部屋に『空腹の部屋』の入口が存在している可能性が高い。
　この可能性には、随分前に気がつき、ラクトに分析を頼んでいた。しかしその結果、最も『入口』として有力なのは、依頼主であるボレリア・スピロヘータの部屋であるということが分かったのだ。依頼主が、犯人をかくまっているなどということはあり得ない。そう考えて、この可能性は排除していた。
　しかし、もしヒドリド・メガテルが、ナティア・スピロヘータと同一人物だとしたら――空白の部屋は、ボレリアが用意した、『愛娘の秘密基地』という見方が出来る。
　私は予定通りの時間に、予定通りの道を歩き始めた。

　大回りしたために、目的の部屋――ボレリア・スピロヘータの自室――にたどり着くまでには、ずいぶん時間を要した。無事たどり着き、扉をノックする。
　――不在の様だ。室内に依頼主がいたら、「何らかの手段」が必要だった。しかし手間が省けたようだ。襟元に忍ばせていたピンを取り出し、ピッキングで鍵をこじ開ける。
　この部屋唯一のセキュリティは、随分あっさりと諸手を挙げた。グリシアの後に続いて部屋に入る。
　部屋は、これでもかという広さがあった。異様に広い部屋の中央では、キングサイズの天蓋付きベッドが存在感を放っている。四隅に置かれたかごの小鳥は、人気に気づいてか、一斉に鳴き出した。小鳥に向かって「静かにして」とジェスチャーするが、通じるはずもない。
「ベニス、これ」
　グリシアに促されるまま、絨毯を見る。本棚の手前に、何かを引きずったような跡が残されていた。グリシアと見つめ合い、頷き合う。私たちはその本棚を、絨毯に残った筋をレールにし、ゆっくりと動かした。――案の定、そこには扉があった。

　薄暗く短い廊下を超えた先には、もう一枚扉があった。息をのみ、その扉を押し開ける。
「なにこれ――」
　戸を開いた瞬間、私に「十三の視線」が突き刺さった。

暗い部屋の中に、十三個の大きな鳥かごが並んでいる。
その中には、美しい容貌の少年少女が座っていた。一つのかごにつき、一人。白く透き通った肌と、人形のように整った顔立ち――性別の判断は難しい。
黙って一番手前のかごに近づき、中の様子を観察する。少年だ。後頭を覆うように長いベールをかぶり、翼を模した装飾を担いでいる。髪飾りは、生花で出来ていた。かごには、大きく「〇〇一」と記されている。そして、全く同じ〇〇一の刻印が、額にも刻まれていた。この服装、どこかでみたような気がしてならない。しばらく眺めていると、少年は細く口を開いた。
「われはヒエリア神十三子の一人、人に寄り添う命を与えし者」
うわごとのように、呟く少年。その眼には何も映っていない。ほかのかごも観察しようと、腰を上げるが――
「な、何者ですか！」
何者かの大きな声に振り返ると、怯えた表情の使用人が立っていた。
私は迷わず、右手の指を打ち鳴らす。瞬く間に、彼は膝を地に着いた。男の意志が介在する余地はない。グリシアの手によって、見事なまでに足の腱が『断ち切られた』のだ。肉断ち包丁が、鮮血を含んで鈍く光る。グリシアは、頬にとんだ返り血を、白い指先で優しく拭った。
歩く術を失い、恐怖で声も出ない男性の顎を、思い切り掴んだ。喉の奥に、ソフトカプセル五粒を押し込む。あとは、肉断ち包丁を彼に与えるだけだ。それだけで、自動的に「片が付く」。
私たちは、足早にその部屋を後にした。

＊

「ベニス、ベニス、包丁、あげちゃったの？」
「ごめんなさいねグリシア。こうするしかなかったの」
できれば死人は出したくなかったが、仕方がない。今頃彼は、自らの体に絡みつく『何か』を見て、自分の体を切り刻んでいるだろう。ボスの作った自白剤は、二粒を超えると劇物になる。
私は上階へ急いだ。母屋の五階突当りにあるダストシュートは、旧廃棄場に繋がっているはずだ。現在使われていない旧廃棄場には、ボスが待機している。グリシアをここで回収する算段だった。
「グリシア、ちょっと急ぐわよ」
前を向いたまま、小声で指示する。ラクトに指示を仰ぎ、少しずつ上階へ登っていく。時間はかかったものの、誰に見つかることもなく目的地にたどり着いた。古いダストシュートは、五十センチ四方ほどの大きさがある。グリシアが入るには十分だ。
「ここから降りるわよ、グリシア――」
勢いよく振り向く。しかしそこには、ついてきているはずのグリシアがいない。驚きのあまり言葉も出ない。
雨の音に交じって、かすかにレクイエムが聞こえ出した。

＊

誘導されているのは明らかだった。しかし、その誘導に従うほかに、術はなかった。
楽師室の前までくると、レクイエムのメロディーラインは、明確な輪郭を持ち始める。十三部屋ある楽師室のうち、音を放っているのは一つだけだ。最も大きな楽師室である、一番楽師室。

その扉にかけられた名札には、確かに「ヒドリド・メガテル」と記されていた。
　息をのんで、楽師室の扉を開ける。
　途端、室内からは強烈なバラの芳香が漂ってきた。部屋に足を踏み入れると、香りの正体が鮮やかに目に飛び込んでくる。
　部屋の中央に置かれたグランドピアノの回りには、一面にバラのドライフラワーが敷き詰められているのだ。ドライフラワー独特の、死体のような赤色が、部屋全体を染め上げている。
「ごきげんよう」
　出来るだけ平たんに、ピアノを奏でる男へ話しかけた。
　彼は演奏を止め、体ごとこちらを向く。
「ようこそ、僕らの楽園へ」
　彼はゆっくり立ち上がった。
「ベニス！」
　彼の背後では、グリシアがピアノに繋がれていた。
「グリシア――！」
　近づこうとする私を、ハンドサインで制止する男。
「さて、僕が君をここに呼んだのは他でもない、君が『選ばれし者』だからだ」
「それはどうも」
「おかしいと思ったことはないか。ヒエリア教の教えは、僕たちに似合わない。ヒエリア教の経典は、全て貴族のために作られている」
　彼は怒涛の勢いで話す。こちらが思考する暇もないほど。
「そんな教えはおかしいじゃないか。僕らを救ってくれない神を、なぜ讃えねばならない」
　口調は、自信に満ちていた。彼自身の容貌も美しく、神秘的な存在に見えなくもない。中性的な顔立ちと、しわの無い肌。年齢を推測できない。少年の様であり、老いぼれの様でもあった。長い前髪が表情を見えにくくし、より一層神秘性を高めている。
　この部屋にこもったバラの香りが、頭の芯をしびれされ。思考を鈍化させる。
「ヒエリアという偶像は、雨は恵みだと宣う。しかし、この世にどれだけ、肌を刺す氷雨から、身を護る傘を持っている人間がいるだろうか」
「人以外の命が、人間のためにあるなんて、傲慢だと思わないかい。鳥は本来、空を飛ぶ生き物だ。こんな屋敷の、小さなかごに閉じ込められるべきではない」
「命は常に、君に寄り添うか？　違うだろう、寄り添う命を強固に縛り付けるのは、貴族だからこそだ」
「君が信じるべき神はここにいる。僕がこの目で、君を選んだ。選ばれし者にだけ、救われる権利がある」
　彼はほほ笑んだ。思想誘導と呼ぶには、つたない弁舌であるように感じた。しかし、ヒエリア教に反感を持っている人間を誘導するには、十分なのかもしれない。貧しい人々は、貴族を憎むことを生きる糧にしている節がある。その怒りを『新たな神』への信仰にすり替えるだけの話なのだ。
「それで、『私の信じるべき神』は、幼女に手錠をかける趣味があるのかしら」
　私は皮肉たっぷりに挑発する。しかし、彼はほほ笑んだ。
「誤解だ。少女を拘束して愛でるのは、いつだって貴族だ」
　何とか話を長引かせ、グリシアを救い出そうとするものの、隙がない。グリシアの手に刃物が握られていたら、状況は違ったのに。いくら私が右手を鳴らしても、彼女は何もできない。刃物

を手放した丸腰のグリシアは、同じ年ごろの少女よりも、ずっとずっとか弱い。
　周囲を見回す。ドライフラワーが敷き詰められている代わりに生花はない。そしてやはり、この楽師室にも小鳥がいない。どうにか話を長引かせようと、更なる挑発に臨む。
「あなただって、貴族に限りなく近いじゃない。こんなにも美しく立派な部屋を与えられて、好きな音楽を奏でて生きているのでしょう」
「それはちがう！」
　彼が初めて、声を荒げる。
「この練習室に、何故鳥かごがないか分かるか？」
「それは」
　音楽の邪魔だからでしょう、と言いかけて止めた。そんな答えなら、最初から問いはしない。
「答えは、ここが鳥かごそのものだからだ！」
　彼が鍵盤を強くたたく。耳に痛い不協和音が、この部屋を飽和した。
「大聖堂で式典があれば、十三の部屋にすべて楽師が入る。そして。この床が開くんだ。かごの中の小鳥が歌うように、僕らはピアノを弾く。曲ももちろん、ヒエリアの賛美歌ばかりだ。
自由はない。僕らはかごに閉じ込められた『人に寄り添う命』そのものだ――だから、僕はこのかごを壊すと決めた」
　彼が、白い指先を自分の額にあてがう。――私の中で、ひとつの思考が実を結んだ。
　これは、賭けだ。
「貴方の額には、〇〇一の刻印がある。そうでしょう」
　沈黙が部屋を駆け抜けた。彼は目を見開き、そして笑った
「そうだ、この刻印は、僕が教祖である証。そして、三十番までの信者は、誰もが『ヒドリド・メガテル』だ。今、四番が欠員になっている――君にこの席を用意しよう。そうでなければ、君を殺すしかない。君は聡い、目障りなほどに」
「その刻印は、貴方が教祖になったから入れたんじゃない。あなたが幼い頃、十三の子の一人、『人に寄り添う命を与えし者』だったからでしょう――」
「違う！　違う違う違う！　これは僕らの誇り、誇りだ。貴族の戯れと一緒にするな！」
　彼の目から、涙がこぼれる。薄暗い空白の部屋で虚空を見つめていた、美しい少年。愛玩動物として買われ、飼われた幼少期。想像しただけで、おぞましい。彼の瞼の奥で揺れる瞳は、先ほど目にした「かごの中の少年」のそれと重なった。
　部屋に敷き詰められたバラのドライフラワーが、彼の必死の抵抗を投影していた。ペダルを踏めば、大聖堂に死花の雨が降るだろう。そのときのために、ヒドリド・メガテルの賛美歌が用意されているのかもしれなかった。
「つらかったのね。あなたはかごの中の鳥なんかじゃない」
　私は、彼にゆっくり近づく。
「やめろ、来るな――」
「大丈夫。あなたにはたくさんの仲間がいるじゃない。もう一人じゃないわ」
　私は、彼の孤独に賭ける。歩み寄り、彼の涙を拭う。私は今、『本来ヒエリアがこうあるべきだった』彼だけの女神だ。
「あぁ」
　彼の喉から、言葉の形を成せない声が零れる。彼の頭を、私の胸元へ引き寄せる。彼の頭を抱きかかえるようにして、髪を手で梳く。
「お疲れ様です、ベニス嬢」

　ボスの声が響くのが速いか、あるいは針が撃ち込まれるのが速いか。ボスが突きたてた針は、静脈血流に巻き込まれるようにして、神になり損ねた男の首の中へ吸い込まれていった。
　私の胸元から、男の頭を引き離す。これ以上ない穏やかな表情で、絶命していた。
「今回の功労者は間違いなく貴方です、ベニス嬢」
「途中でグリシアを連れ出すなら、予め言っておいてよね」
「おや、気づいていましたか」
「手錠が、店に並んでいたアンティーク品でなければ、最後まで気づけなかったかもしれないわ」
「ベニス嬢なら気が付くと、信じていましたよ。本当です」
　ボスは笑う。ボスの右腕には、一一六の焼き印があった。いつの間に潜入していたのか、さっぱり分からない。私が出会ったとき、既に『教祖』の気が立っていたのは、彼がボスの口車に乗せられていたからに違いなかった。「また、『腕利きの整形外科医』の出番ですね」と腕をつつくと、ボスはまた笑った。
　ボスは、グリシアの手錠を外すと、腰にさしていた肉断ち包丁をグリシアへ手渡す。
「もうひと仕事ですグリシア。頭だけは残しておいてください」
　肉断ち包丁を受け取るグリシアの目は、爛々と輝く。新しい玩具を貰った子供の様に、彼女は笑みを浮かべ、頷いた。
「骨はボスが持ち帰るのでしょう。血の付いたドライフラワーは、頭と一緒に回収するとして――肉はどうするの」
　死花の絨毯の上で、グリシアが死者の肉を捌く様子を眺めながら、ボスは思案するような素振りを見せた。
「知っていますかベニス嬢。どうやらワニという生き物は、死肉も残らず食らうようですよ」

＊

　五月晴れの青空を、たくさんの小鳥が羽ばたいていく。十や二十ではない。数百という色とりどりの小鳥が、初めて水を得た魚の様に、屋敷の頭上を横切っていく。
　ボレリア・スピロヘータは、血まみれの頭をハンケチで抑えながら、震える指先で電話をかけた。
『はい、こちらパルティール考古堂です』
「おい！　ふざけるな！　話が違うじゃないか！」
『その声は、スピロヘータ様。どうなさいました』
「悪魔の子は、ちっとも減りやしない！　小鳥は逃がされ、屋敷中に腐った花がまき散らされている！」
『あら、教祖の頭を見せたとき、それはそれは喜んでくださったではありませんか』
「しかし、奴を殺しても問題は解決しなかった！　金を返せ！　そうでなければ、こいつらをどうにかするんだ！」
『契約の内容外です。お約束したはずですよ、貴方が依頼できるのは、一人分の暗殺だけ――そして、依頼は達成されました』
　冷淡な女の声。返す言葉を失っている間に、電話は切られた。
「畜生！」
　受話器を投げ捨てる。床に落ちた電話機が、大きな音を立てた。彼の部屋の戸を、誰かが叩く

。
「誰だ！」
「お父様、開けてくださいまし」
「おお、ナティア――！」
　愛おしい娘の声に、彼はバリケードを解いた。開けた扉の向こうに、ほほ笑む娘が見える。娘を部屋へ招き入れ、彼はすぐ扉を閉じた。
「お前が無事でよかった、ほんとうに、よかった」
「わたくしの身を案じてくださったのですね。この上ない喜びでございますわ。でも、ここで死んでくださいませ」
「な、なにを――」
「わたくし、お父様に寄り添っていただきたかった。鳥でも花でもなく、ただお父様がいてくだされば よかったのに。幼い頃から、泣かない夜はありませんでしたわ」
　ナティアの瞳から、涙がこぼれる。ボレリアは、ヒエリア十三子の第八子が人間に与えた「身を濯ぐ清らの水」を想起していた。――状況を飲み込めていない。
「わたくしは、わたくしに寄り添ってくださる方を見つけました。ですのに、お父様は彼さえも、わたくしから取り上げた！」
　ここでようやく、娘の手にナイフが握られていることに気が付いた。逆手持ちの刃物に、明確な殺意が滲んでいる。
　彼女は、ナイフにそっと口づけた。
「お別れですわ、お父様」
　ステンドグラス越しに差し込む、色、色、色。磨き上げられたナイフは、彼女の胸元に刻まれた、「〇〇二」の焼き印を反射していた。　　おわり

深白に溶けゆく浪漫講　Valse des flocons de neige（高天美月）

深白(みしろ)に溶けゆく浪漫講　Valse des flocons de neige

1

「いやあ、さすがやで、ミヤコぅ」布団の上で捨て猫のように胡坐(あぐら)をかいたキョウは、欠伸(あくび)をまた噛み殺しながら、手に持った目覚まし時計をしげしげと観察している。「備えあれば……、っちゅうやつやな」
「まあなあ」隣でセーターから首を出したばかりのミヤコが、足元に転がった目覚まし時計……、だったものを眺めながら、溜息をついた。「でもなあ、いくらなんでも、三つとも壊すか？ふつう」
「一個は無事やろ」キョウの手元の時計は、今も正確に、五分後の時刻を示している。
「二個も壊した」
「数学的にいえば、どっちも同じ」
「いぃや、鯨と蟻と人間を足して三匹ぃ、ちゅうとるもんや」
「それを三で割ったら、同じになるやろ？」
「ならんよ」
「ならんか」
「ならん」
「でも、」キョウは手元の時計を叩いた。「これは鳴るな」
「うちが抱いて寝たからな」
「うえぇ、これを？」口を曲げながら、キョウはスイッチを押した。スピーカーから、周波数の合っていないラジオのようにノイズが吐かれた。彼女は耳障りな音に顔を顰(しか)め、すぐに切る。「うちの爺さんが洗面台でえずいとるかぁ思ぅたで」
「もう十年くらい前やからな、そら歳も取るで」
「犬か」
「それはランドセルや」
「ああ、付喪神(つくもがみ)な」
「いや、たしか、妖精やなかったか？」
「妖精はえずかんよ」
「付喪神もえずかん」
「まあどっちでもええ、ミヤコんお蔭で起きられたしな。それに……、」キョウは左手をぱたぱたと払った。「幽霊やなくてよかったわ」
「え、怖いん？」
「ああ……、まあなあ、うん」キョウは言い澱む。
「あら珍し」ミヤコは眼を丸くした。
「会(お)うたことないからやろ」
「え、あんの？」
「は？」キョウは髪をかき上げた。「子供んときはな、そら怖かったで」
「ほぉん……、可愛い頃もあったんやなあ」

「どういう意味や」
「別にぃ」笑いを堪えながら、誤魔化(ごまか)すようにミヤコは言うと、「ほら、ええ加減に支度(したく)せんと……、」ベッド脇のカーテンを一気に引き開けた。「あら」
「眩(まぶ)し」キョウは咄嗟(とっさ)に俯く。「ん……」そして、瞼(まぶた)を少しずつ開きながら顔を上げる。「ははあ」
思わず声を漏らしたキョウは、まるで水を打ったように、眠気が霧散していくのを感じていた。ぼさぼさだった髪でさえ、電気でも浴びたように萎(しお)らしくなったみたいだった。
彼女の眼には、部屋が冷たい光に濡れているように見えた。光源を辿って見ると、窓の向こうは、白銀だけが世界のすべてだった。水飛沫(しぶき)のように鋭い光は、しかし手元に届く頃には、いつの間にか、淡く、そして仄(ほの)かに、和らぐ。それはシャボン玉が指に触れた瞬間に、割れてなくなってしまう、嘘みたいな儚さのように。
「雪……、かぁ」
期せずして二人の言葉が重なった。ただ、キョウは、あまりにも白すぎる光の中に佇(たたず)むミヤコから眼を離せなかった。はじめは逆光に全くぼやけていたのが、眼が慣れるにつれ、雪の妖精が姿を顕(あらわ)すように、徐々に浮かび上がるミヤコの影に、言葉もなく、キョウはしばし見とれていた。
「なぁに、ぽけっとしとんねん」ミヤコはいつの間にか振り向いて、キョウの頭をぽんぽんと叩いた。
「ポケット？」キョウは首を傾げて、胸や腰を探った。「んなもん、ないで」
「どっかには需要があるんとちゃうか？」ミヤコが手を差し出す。
「何じゃ、そら」その手に引っ張られ、キョウはようやく立ち上がった。腕を組み、躰(からだ)を捻(ひね)るように伸びをし、欠伸を漏らす。「あぁあ……」
「はよ着替えんか」
「だから一緒に寝よ言うたんや」窓の外を眺めながらキョウは言った。「うぅ、寒(さぶ)」
「はあ？　誰が一緒に寝るか」
「ちぇ」
「当たり前やろ」ミヤコは溜息をついた。「そんな前日にぃ……」
「そか」キョウはウインクをしながら、「じゃあまた今度な」
「う……、」ミヤコは顔を背け、クロゼットから服を投げ渡した。「はい、つべこべ言わんと着替える！」
「あぁあぁ、皺(しわ)になる皺になる」
十五分後、ミヤコに投げ渡された服に着替えたキョウは部屋に戻ってきた。
「あれ、早いな」部屋に入ると、机で専門書を読んでいたミヤコが振り返った。「まだぁ……、」携帯電話でちらと時刻を確認する。「余裕あるで」
「あんなあ、知っとるか？　朝風呂はよくないで」
「へえ……、何で？」
「集中力とか、なくなるらしい」
「へえ……、何で？」
「何でって……、疲れるから」
「へえ……、」ミヤコは本を閉じた。「まあ、夜に風呂に入らんと、寝ても疲れが取れんからやな。朝風呂が悪いわけや必ずしもない」
「知っとるならそう言うてや、恥ずかしいやんか」言いながら、キョウはベッドに腰を下ろした

。「だいたい、それ、いじめやろ」
「いやいや、自慢げだったのはそっちやろ」椅子を回転させて、ミヤコが肩を竦(すく)めてみせる。「ほんにしても、今日は随分と殊勝やな」
「なんや、今さら気ぃがついたんか」
「え、うちのせい？」
「そう、結露が蒸発してクリアになった窓ガラスのように……、」キョウは立ち上がって、ミヤコの瞳を見下ろすように腰を曲げた。「つまり、時代がうちに追いついた、ちゅうことや」
　ミヤコはその視線を見つめながら微笑んだ。「それは単に、キョウが留(とど)まっとるだけかもしらんけど」
「もぉう……、」キョウは躰を仰(の)け反らせ、ベッドに倒れ込んだ。右手を顔の上で振りながら、「だめだめ、今日はあかんわ、何や刺々(とげとげ)しゅうて敵わん」
「たしかに。悪かったわ。大人げなかった」
「だからぁ、そういうのやって……、」
　キョウは飛び起きようとする。しかし、途中でぴたりと止まってしまった。
　呼吸も瞬きも、
　止まってしまった。
　近い。
　ミヤコの顔が眼の前に。
「わ・ざ・と」
　眼の前の、ミヤコの唇がゆっくりと言葉を紡いだ。
　瞬間……、彼女の言葉が呪文のように頭の中で反響し、キョウはまるで、催眠術にかかったみたいに、躰中の力が抜け、再びベッドに倒(し)れ込む。スプリングの反動で、呪文は拡散し、やがて霧散した。いや、実はその逆で、全身に沁み渡った、といえなくもない。これは、しばらく夢に出るな、と思った。
「かあぁ……」キョウは声を漏らした。
「何、それ」
「ふぅん」
「あれ、怒った？」
「ぷい」
「ちちん」
「ぷい」言ってから、キョウは舌を鳴らした。「今の、なし」
「それはどうかなあ……」
「かあぁ……」
「だから、それは何なんや」
　キョウは何も答えず、ただ天井を見つめる。白い。染みでも数えようかとも思ったのに、全く、嘲笑うように白い。あまりに殺風景だ。少しだけ視線を上げると、窓の外、真っ白い空が見える。不思議な言い回しだが……、空と天井は、まるで地続きにさえ思えた。そう、つまり、繋がっている。そういえば、ベッドも同じくらい白い。もしかして、自分はすでに、雪の中に横たわっているのではないか、そんな錯覚さえ過(よぎ)る。
　しかし……、雪は今も降っているだろうか。なにしろ、周囲はすべて白いのだ。その中を、たとえ雪が降っていても、気がつかないのではないか、自分の膚(はだ)で触れるまでは。そう思ったときには

、口から言葉が出ていた。
「この窓、開く？」
「はあ？」ミヤコが声を上げた。また、机に向かっていたらしい。彼女は振り向いて、キョウを見た。「そないなとこから落ちたら、死ぬで」
「ここからじゃあ死なん」
「でも、骨は折れるで」
「うーん……、」キョウは頭の中でシミュレーションをした。しかし、その時点でもう、どうでもよくなっていた。何がどうでもよいのかさえ、すでに曖昧だ。「まあ、折れるわな」
「でしょ？　せやから……、」
「大丈夫大丈夫」
「大丈夫って、何が……」
「ああ、そう、落ちひんよ、ちゅうこと」
「ふうん……、」ミヤコは背凭れに躰を預けた。「じゃ、期待しとるで」
「あんまり期待されても……」
　苦笑いしながら、キョウは立ち上がった。両手を腰に当て、仁王立ちになる。実は、そんなポーズをした仁王は見たことがないな、と考えながら、躰を捻る。そうしているうちに、ああ、そうか、今度は自分が、さっきみたいに見られるのか、と思った。少々気恥ずかしい。
　キョウはそのまま窓の方に向かい、改めて雪景色を見つめた。
「ああ……、白いな」
「そうやな」
「白い、そう、まるで……、」
「まるで？」
「まるで、」キョウは振り返って、ミヤコを見た。「うちの答案用紙のように」

2

　外に出ると、雪はすでに止(や)んでいた。傘を差さなくてもいい、というのはありがたい。見上げると、空は依然として白い。雲が覆っているからだが、翳(かげ)っているわけではない。重なった雲を透(とお)して、太陽光がここまで届くからだ。ちょうど、白い脚がワンピースの薄い生地に透けるように。
　しかし、それにしても、道路や屋根や枯れ木に積もった雪だけで、景観は昨日までとまるで違って見えた。何故だろう、雪が街並みを白一色に塗り潰してしまうからだろうか。それも、ムラがなく、どこまでも均等に。そう、たしかに、このような自然現象は他にない。そう考えれば、世界の終わりには雪が降る、というイメージにも納得できる。世界の終わりとはどういう状況なのか、いまいちわからないが。
　例年と比較すると積雪量は多いようだ。いつもはすぐに融けてしまって、路面がどろどろになってしまうから、こんな風に雪を踏み締めるのは、実は珍しい体験だ。雪の魅力を存分に味わえる。もちろん、かき氷にして食べるわけではない。
　それにしても、ブーツを履いてきて正解だった、とキョウは白い息を吐いた。だが、手袋を忘れたのは不味(まず)かった。これでは手が悴(かじか)んで、巧く字が書けないかもしれない。
「ほら、」隣を歩くミヤコが、自分の嵌(は)めていた手袋を片方、差し出した。「ええよ、使うて」
「え、伸びるで？」

「誰がそないな使い方をするか」
「でも、マフラーはそうやろ？」
　キョウは首に巻いた赤いマフラーを見る。自分たちは小指姫か、と思いながら毛糸を辿ると、ただ一本のマフラーは、自分とミヤコ、二人の首に巻かれていた。
　これは元々、キョウがミヤコのために編んだものだから、つまり、一人分の長さしかない。二人はかなり密着して歩いている、ということがわかる。どんなに仲のよいカップルでも、ここまで密着してはいないだろう。
　それを自覚した途端、キョウは、誰かに見られてはいないだろうか、と辺りを見回した。両脇はずっと煉瓦（れんが）の壁……、そういえば、この辺に黒猫がいたな、と思ったり、いや、そもそも誰かに見られて困るのか、と考えたり、何故、黒猫が横切るのは悪い兆しなのだろう、と首を捻ったりした。
「そう、引っ張るなて」ミヤコが言った。
「ああ……、ごめん」
　結局、更に距離を縮めることになった。あと少しで日付が変わる、という瞬間の時計の針のように。けれど、これがもしもシンデレラだったら、おそらく、魔法は永遠に解けないだろう。幸か、不幸か……。
「おお、温（ぬく）い」ミヤコの手袋を左手に嵌めながら、キョウは言った。
　するとミヤコが、今度は裸の手を差し出した。雪と同化するように白い。「はい」
　その手をじっと見つめるキョウだったが、「ああ……、え、もう返すの？」
「ちゃうわ」ミヤコが素手で腹を軽く叩いた。「もしかして、わざと？」
「何が？」
「だからあ……、そう、右手を出してみぃ」
「ほい」
　言われたとおり、キョウは右手を差し出す。
　と同時に、ミヤコがその手を、何も言わず握ってきた。
「いっ」
　思わず立ち止まる。見えない壁にぶつかったのか、いや、崖っ縁に立たされた、というのか。首輪から伸びるリードがぴんと張った犬のように、息が一瞬詰まった。脚が斬られたのか、とさえ思えた。
　それとも……、凍った？
　ああ、きっと、そうかもしれない。風もないのに、冷気が膚を掠めた気がした。なるほど、身の毛がヨダツ、とはこういうことか、と遅れて思い至った。ヨダツがどういう意味かはわからないが。そういえば、樵（きこり）の片割れだったか。
「はっ、え……、何？」ぶるっと震えた後、キョウはようやく言葉を発した。
　ミヤコの横顔を見る。表情はわからない。右手の指を動かそうとしてみたが、動かない。何かに押さえられている。今度はその手を見る。
　手だ。
　自分の手を握る、別の手が。
　それは、ミヤコの手だ。
「何って……、」ミヤコがキョウを見た。少しだけ、首を傾げる。「何が？」
「いや、この手……」
　しかしミヤコは、「え、何を言うとるのかわからん」という顔で、「手袋が一組しかないん

やし、こないするんが普通とちゃうか？」
「うーん……、」キョウは眼を瞑(つぶ)った。たしかに、理屈ではそうとも言えるだろう。とはいえ、もう少し考えてもらいたいものだ。この時間はいくら人通りが少ないとはいえ、ここは道のど真ん中なのだ。
　そう思っているうち、ミヤコが指の間に指を滑らせ、まるで氷柱(つらら)を伝う水のように絡めてきた。
「はあ？」キョウは咄嗟に手を振りほどく。「いやいや」
「ああ、やっぱ、えろぅ冷たかったね」ミヤコが呟いた。
「え？」
「ごめんな、もう少し早う気づけばよかったね」
　言いながら、ミヤコはまた手を伸ばす。キョウはそれを微妙に躱(かわ)しながら、「何の話？」
「え？　キョウの手ぇが、超、冷とうて、あ、これは、うちのせいかな、と」
「手袋を忘れたのは、うちのせいやで」
「でも、ほら、」そう言って、ミヤコは、今度はキョウの頬に手を伸ばす。「ここも、こない冷たい」
「だあ！」キョウは眼を見開いた。ミヤコの手首を掴むと、その手を下げた。「あんなあ……、もうちょい、そのぅ……」
「でも、手ぇが悴むやろ？」
「平気やって」そないな問題やない、と思ったが黙っていた。
「ふぅん、じゃあ、手袋、返してくれる？」
「え？」
「だって、平気なんやろ？」
「いやあ……」平気なわけあるか。しかしそんなことは言えない。
「平気なら、手袋、いらんやろ？　うちは寒いもの」
　キョウは黙っていた。
　自分はいったい、何を考えているのか……、いや、考えていたのか。それを思い出そうとしている。本当は何も考えていたはずはないのだが、必死にそれを考えている。いや、そんなに必死でもない。現に、答は出ていない。
「どっち？」ミヤコが白い息と共に尋ねる。
　キョウの眼は、ミヤコの長い黒髪をぼんやりと捉えている。後ろ髪が、マフラーでほんの少し、ふわりと膨らんでいるのが印象的だった。緩やかで悩ましい曲線。風にそよぐカーテン、その一瞬を留めた写真のように。
　そして、彼女の肌はやはり白い。けれども、僅かに露出した小ぶりな耳は、少しだけ赤い。たぶん、触ったら冷たいだろう……、本当に触る気はないが、想像だけはできる。右手をそっと伸ばして、優しくつまむのだ。そうすると、不意をつかれたミヤコは、自分と同じように、もしかしたら、飛び上がるかもしれない。
　それとも……、
「ちょい、耳貸して」
　と口を近づけ、そのまま、甘噛みしてしまう、というのは、どうだろうか。ミヤコの耳は、アップルパイのように柔らかく、甘いだろうか。息を吹きかけたら、どんな反応をするだろう。だって、冷まさなければ、熱くて食べられない。猫舌なのだ。
　そこまで想像してから、キョウは心の中で頭を振った。いくらなんでも、飛躍しすぎだ。第一、ミヤコの耳は、どう考えても冷たいのだ。いや……、そういう問題ではない。だが、どういう

問題なのだろう。ああ、己は阿呆か。いや、言うまでもなく、阿呆だろう。
　キョウは妄想を希釈するように冷気を吸い込み、そのまま何も言わず、右手を差し出した。
「素直でよろしい」
　ミヤコはその手をゆっくりと握った。今度は、キョウもミヤコの手を握り返した。巧くやられた、と思ったが、次の瞬間には、なんや、ミヤコも可愛いところがあるやないか、こない手ぇが冷とうなるまで……、と微笑ましくさえ感じるのだった。
「ん、何にやにやしてんの？」
「それはミヤコの方やろ」
「んなわけ……」
「あるある」キョウは笑いながら、ミヤコの手を引いて歩き出した。
「あ、誤魔化したな」
「さあ、何のことやら……」

3

　歩くうち、また、ほんの少し、雪が降り始めた。しかし、傘を差すほどではない。あと十分ほどで着くし、舞い落ちる雪片（ゆきひら）がまるで、天使の羽にも思えたからだった。
　ふと、頬に触れた瞬間、くすぐったいような、軽やかな優しさ、夢のように冷たい心地に震える。けれども、頬を撫でるとすでに、羽は融け、冷たさもなく、僅かな水分だけが手袋越しに伝わり、はたして、どんな夢を見たのだったか、と想いを馳せるように、キョウは再び眼を閉じる。
「危ない危ない」まるで遠くから、ミヤコの声が聞こえる。
　意識のほとんどはもう、躰から遊離しているみたいだったが、頭の片隅では、手を繋いどるから平気、という意見と、あんだけ嫌がってたのに、という指摘と、嫌がってたわけやない、という反論、そして、ほんなら何なんや、という異議が飛び交っていた。
　自分はその議論の様子を、高く、遠くから、ぼんやりと俯瞰（ふかん）している。議題はどんどん逸脱し、飛躍し、結局は収束する。それも、やはり、元の議題に戻ってくるのだ。つまり、堂々巡り。
　けれども、その、元々の議題は何だったのか、というと、さあ、いったい何なのか、それはよくわからない、と苦笑するしかない。それとも、本当は知っているかもしれない、だけど、知りたくない、いや、知らない振りをしているだけ、そんな予感がする。期待するくせに、その期待通りに行くのは、つまらないからだ。それにしても、自分のことなのに「予感」とは、なんとも他人事（ひとごと）だが、しかし、仕方がない。こんな、煮えきれなさが、どうにも心地よいのだから。
　口笛でも吹きたい気分だったが、止めた。そもそも吹けないし、それよりも、もっと素晴らしい音が流れている。
　ミヤコの声だ。
　彼女は自分に話しかけている。本当は、何も言わず、ただずっと、その声を聴いていたいのだが、実はしっかりと受け答えをしている。森の奥の静かな湖も、妖精の麗（うるわ）しい髪も、ときおり、思い出したように吹くそよ風に靡（なび）くから、美しい。
　真剣に聴いてはいるが、ミヤコが何の話をしているのか、それは関係がない。食事だって、何を食べるかは、問題ではない。それに、どんなに盛りつけが綺麗でも、味には何の影響もない。もっと曖昧な、そう、雰囲気を咀嚼（そしゃく）し、楽しんでいる。それも、質素で、どちらかといえば地味な、け

れど、完璧にクリアではない、つまり、限りなく透明に近いだけ、なんとも微妙な色合い。教会のステンドグラスが陽光に透かされ、床に淡く模様を映す、そして見えないけれど、静寂に満ちる空気でさえ、本当は色づいている。その中に、眼を瞑って、独り佇んでいる。そこで感じる暖かさ、あるいは冷たさこそが、寂しさ、孤独の姿ではないか。

そう……、何もない、のではない。

振り返れば、二人分の足跡がどこまでも続いているだろう。窪みが影を作り、あたかも波打ち際のように一続きに伸びている。そして、これからも遺(のこ)されてゆく、ブーツの底が雪を食(は)む音と共に。ある意味では、蹂躙(じゅうりん)ともいえる。しかし、足跡を遺さずに雪の上を歩くことは不可能だ、醜(みにく)い口内を晒さなければものを食べることができないように。これは、どちらを取るか、という話ではない。それらは不可分の、いや、相反し、矛盾を孕(はら)みつつも、同値、同じ行為なのだ。新陳代謝と同じようなもの。

綺麗事ならばいくらでも並べ立てることはできる。たとえば、瑕(きず)一つない一面の雪に立ち尽くす夢。けれどもその場合、自分の足許(あしもと)にだけは雪がないか、靴底で雪を躙(りん)らなければ、それはあり得ない。つまり、だから夢なのだ。

空のガラス瓶に「綺麗」というラベルを貼って海に抛(ほう)ったけれど、どこにも辿り着くことはなく、やがては海の底に沈む。暗く深い海底には、大昔に滅んだ文明の遺跡のように、沢山のガラス瓶が積もっている。せっかく貼ったラベルも、すでに腐蝕している。瓶の陰や隙間に棲むのは、臆病な魚だけ。地上の人間は誰も、海底に沈んだそれらをけっして掬(すく)おうとはしない。ラベルに書かれた文字など、彼らにはもう、とうに読めないのだから。

結局、綺麗事など、その程度の価値しかないのだ。人間が存在しなければ、綺麗事も生まれない。だから、人間が滅びた後には、ただ、純粋な、「綺麗」だけが残るのだ。

風はなく、雪片ははらはらと舞い落ちる。しかし、呼吸をしているし、歩けば風が生まれる。その度(たび)に、波紋のように、微小でも風は伝播(でんぱ)する。自分の吐いた息と、ミヤコの吐いた息。その上を、花びらが漂うように、雪片は滑り、ちょうど、波紋が交わるところで、溶け合い、混ざり合い、一対の翼になる。あるいは、抽象された心臓を象(かたど)るだろう。

また、靴の音、呼吸の音、心臓の鼓動、二人の会話……、冬の白い朝はあらゆる音に満ち、彩られている。しかし耳を澄ませば、雪片の舞う音、地上に降り立つ音、それさえも聞こえるほどの静けさ。

そう……、静けさ。こんなにも、周囲は音に満ちているのに、静寂を感じる。それは……、つまり、静かなのは、自分の内側なのだ。「内側」といっても、「体内」という意味ではない。ではどこか、というと、それはわからない。どこでもないのかもしれない。どこにもないのかもしれない。けれど感じる、たしかな静寂を。

宇宙のように無音。

胎児のように空っぽ。

自分こそが、ガラス瓶になってしまったみたいだ。

しかし、もしも今、この瞬間、自分だけしか存在しないとしたら、静寂を感じることはないだろう。光がなければ陰は生まれない。どちらか片方しかなかったら、自分が立っているのが、光なのか陰なのか、わからない。もちろん、五月蠅(うるさ)ければよい、というわけでは当然ない。落ち着いていて、そう、高貴でなければならない。

やはり、同じだ。

光と陰が交錯し、滲んでいる、そのぼやけた境界にあるのが、静寂と、そして孤独なのだ。ステンドグラスを透かす陽光は、教会の外から差す。自分は教会の内側に佇んでいても、浴びる光は

外側のもの。いや……、そんな区別は無意味だ。どちらもが、渾然一体となって、自身を取り巻く。きっと、最後には……、自分も、なくなるだろうか。
　文字どおり、静寂とは、静かで、寂しいもの。それはまさに孤独と同じだ。
　そして、それを……、
「ロマン」と言うのだと、
　自分はそう思う。
　けれど、本当のところはわからない。そもそも、「本当」とは何だろう？　たとえそんなものがあるとしても、それを決めることに、価値はあるのだろうか。「本当」には価値があり、「本当でないもの」には価値がない？　ただ、少なくとも、ロマンと呼ばれるものには、価値がない、いや、価値を求めることは無意味、不可能だろう。何故なら、この世に一つしかない、一度しかないものだからだ。それについて、価値を決めることはできない。価値とは、相対的な評価だ。
　しかし考えてみれば、この世に同じことは二つとしてない。似ていることはあっても、全く同じではない。似ているとは、ほとんど同じ、つまり、少し違う、という意味だ。第一、それを見る自分だって、常に同じではないのだ。
　考えれば考えるほど、わからなくなる。いったい、「自分」とは誰なのだろう？　歩いている自分と、こんなことを考える自分。いや、考える、というほど明確な意志ではない。雪とミヤコ、この二つから連想された奔流だ。酸素を運ぶ血流のように、全身を、痺れるように行き渡る。そして二酸化炭素を排出するときに初めて、しばらく呼吸を止めていたことに気がつく。その繰り返し。
　繰り返し……。
　なんだか、とても悲しくなってくる。涙が出そうだ。
　だけど……、
　こんな気分にさせてくれる景色が素敵だ。
　笑みさえ零(こぼ)れそうだ。
　不思議な感覚。
　けれどもすぐに、
　そんな景色も、
　感覚も、
　失われる。
　すでに今、失われている。
　それにつれて、
　痺れる頭、ぼやける思考……、
　やがて脳裏に過るのは、
　ミヤコの唇、
　魔法の呪文を紡ぎだす、
　唇の動き。
　今朝交わしたばかりの会話を、もう憶えていない、しかしあのときの、ミヤコの唇の動きだけは、憶えている。全身が痺れるような、軽やかで、和らかで、甘い……。
「静かやね」
　眼の前の、ミヤコの唇が言葉を紡いだ。
「そう？　じゃあ、うちも黙ってようか？」
「駄目」

「え、何で？」
「自分で言うたんやろ？」
「うそ、声に出てた？」
「嘘」
「でも……」
「言わんでもわかるわ」ミヤコは笑った。
　そして気がつくと、自分たちは全然関係のない話をしている。今のは、夢だったのだろうか？
　まさか、だとしたら、こんな夢を見るなんて、凍死する前兆じゃないだろうな……。
「なあ、ミヤコ……」キョウは言った。
「何？」
「いや……、」キョウは眼を瞑った。「何でもない」
「そう」ミヤコは微笑んだ。「あ、それでな……、」
　彼女の笑みを見て、キョウは自分も微笑んでいることに気がついた。しかもそれは、ミヤコと同じ気持ちから生まれた微笑みなのだ。
　ああ……、
　そうか、
　こんなにも静かだと、
　何も聞かなくても、
　何も言わなくても、
　わかるのだ。
　自分の右手と、
　ミヤコの左手。
　自分の体温と、
　ミヤコの体温。
　それらが混ざり合い、もう、すでに、境界が失われている。
　白一色に塗り潰された景色に、たった二人だけ。
　いや……、もう、一人なのかもしれない。
　もうずっと、一人だったのかもしれない。
　きっと……、いつかは自分たちも、この深い白に溶けゆき、その白すら、跡形もなく消え、やがて失われるだろう。けれども、奇跡的に生まれ変わり、再び巡り逢う。冬が終われば春がまたやって来るように。自分と、ミヤコは……。
　何故だろう、
　不思議と、
　そんな予感がする。
　それは……、
　ああ、
　なんて素敵な、

　予感だろう。

無二
諸木　夕

　祖父が葬式から帰ってきた。
　齢九十にもなると知人友人が――健康であろうとなかろうと――次々に亡くなるらしく、今年初めから昨月までに三度も葬式に出向いている。今日、五月十五日が四度目だ。
　歳が歳なだけにそういった場に行くだけでも自身の先を考えて憂鬱になるようで、葬式帰りの祖父は毎度のごとく不機嫌だった。もともと気の長い人間ではないため、私たち家族にそのイライラの矛先が向くのが常だった。
　それなのに、先ほど帰宅した祖父は、舌打ちをしたりむくれてぶつくさ文句を言ったりする様子を見せることなく、むしろその表情は落ち着いていた。
　妙に思った私は、もしかして祖父が心底嫌っている人の葬式だったのか、などと勘ぐり「何か良いことでもあったの」と探りを入れてみた。
　すると祖父は、一瞬目をぱちくりさせた後、よくぞ聞いてくれたと言わんばかりに誇らしそうに話し始めた。

　その人とは、行きつけのスナックで出会ったという。
　その時祖父は五十代で、つまり今から三十年以上も前の話になる。
　会話のきっかけは、席が隣になったとか、ママが同じ話題をふったとか、そういった何でもないことだった。
　その人はＴ大学で物理を教えていて、祖父よりもいくつか年下だった。同い年の奥さんがいて、子供が二人。寡黙で、あまりぺらぺらと話すほうではなかったが、高い教養に裏付けられた言葉は祖父をたいへん楽しませたようだ。
　もの静かで我を出さないその人とは対照的に、祖父は自信家で、誰とでも打ち解ける明るい性格だった。タイプの違う二人ではあったが、どこか馬が合うところもあったのだろう。何度もスナックで酒を傾け合ううちに、互いにあだ名で呼び合うようになっていった。
　祖父は「兼一（けんいち）」という名前から「兼ちゃん」と呼ばれ、逆に祖父はその人の「浩作（こうさく）」という名前をもじって「コンちゃん」と呼んだ。
　こうして、「兼ちゃん」と「コンちゃん」の長いつき合いは始まったのだった。

　祖父はかなりの旅行好きだ。小さな町工場の社長を勤めていた忙しい現役の頃も、息子二人（うち一人は私の父）と娘一人を連れ、祖母に留守を頼んで日本全国を旅してまわったそうだ。自由な時間が増えた定年後も、高齢者向けのツアーなどに積極的に参加して、未だに年数回ほど家を空けることがあるほどだ。
　そんな祖父は、浩作さんを何度も誘い、旅行に連れて行った。浩作さんはＴ大学を定年退職した後で私立のＦ大学に非常勤講師として再就職しており、その仕事の合間をぬっての参加だった

。
富山の宇奈月(うなづき)温泉、石川の山代(やましろ)温泉、群馬の草津温泉など、様々な温泉地、観光地を二人で旅した。
十代から二十歳にかけて戦争のせいで青春らしい青春を送れなかった祖父は、まるでその時を取り戻すかのように生き生きとして、友人と遊んでいたのだった。

昨年、浩作さんが大病をわずらった。もちろん祖父も見舞いに行き、浩作さんを励ました。幸いにも手術や投薬を経て病気自体は回復したが、入院生活や手術の負担からか、体力ががくんと減ってしまったそうだ。
体力がなくなったことで家から出ることも少なくなり、祖父と出会ったスナック（なんと現在でも営業中）に出向くこともなくなってしまった。祖父はスナックに行くたびに浩作さんがいないか確かめたが、結局浩作さんの姿をそこで見ることはその後もなかったそうだ。

しばらく会うことがなかった二人だったが、たまたま祖父が浩作さんの自宅近くを通りがかった時、たまには顔を見ておきたいと祖父は浩作さん宅を訪ねた。これが昨月末のことだったそうだ。
奥さんに庭まで案内され、縁側に座っている浩作さんと対面した。祖父が体調のことを聞くと、浩作さんは、今も調子が悪く数日後にまた入院することになっているのだと笑った。祖父は身体を心配しつつも、また今度飲みに行こうと励ますように言った。
それから二言三言交わし、身体に障るといけないからと祖父は早めにその場を後にした。

浩作さんが亡くなったのはその一週間後だった。病院で容体が急変し、そのまま意識が戻ることはなかったそうだ。結局、祖父と浩作さんが会ったのは、先日浩作さんの自宅で面会した時で最期になった。

そして今日、浩作さんの葬儀がとり行われた。
しめやかに葬儀が進む中、浩作さんの奥さんが祖父に話しかけてきた。
奥さんが言うには、「先日うちに来た時に『コンちゃん』『兼ちゃん』と互いに呼び合っていることにびっくりした。大学教授をやっていたから先生、先生と呼ばれることはあっても、あだ名で親しげに呼び合う友人はあなた以外にはいなかった――あなたはきっと、あの人の無二の友人だった」と。

そこまで話すと、祖父は口をつぐみ、おもむろに立ち上がったと思うと台所から日本酒とコップを持ってきた。そして椅子にどっかりと腰を下ろすと、注(つ)いでくれ、と私に一升瓶を差し出した。
きっと、今日は酔いたい気分なのだろう。私は差し出されたそれを受け取ると、トクトクとコップに注いだ。

祖父がこうして友人のことを語るのは初めてで、なんだか私は不思議な気分を味わっていた。
今日は私も飲もうかな、と言ってみると、祖父はおう、と一言つぶやいてテーブルに置いてあった別のコップに酒を注いだ。
キン、と乾杯の音が響く。
きっと今頃、天国では「コンちゃん」もうまい酒を飲んでいるに違いない。

終

<あとがき>
四年間在籍してるくせにこれがまだ三作品目です。許してください。
本作品は半分ノンフィクションです。どこがかというと、お葬式で奥さんに言われたこととか、亡くなる少し前にたまたま祖父が会いに行っていたこととか、そこ辺りです。
あまりにも祖父が誇らしげに話すので、文字に起こしてみたくなった次第です。
読んでくださった方、ありがとうございました。

未来（Puney　Loran　Seapon）

未来

Puney　Loran　Seapon

　夜が、赤く染まっていた。
　季節は冬のはずなのに、ひどく暑くて、息苦しい。なにより、辺り一帯が煙と血と生き物の焼ける臭いで充満していたのが、クレア・リングイストをガクガクと震えさせていた。
　先月十歳の誕生日を迎えた、その少女は、知る。
　これが、戦争。
　傍から見れば、小国同士の、さらにその中でも一部の地域の民族同士の争いごとでしかないのだが、そんなことは彼女には関係ない。
　父と母は、きっと死んでしまった。敵の人間に見つかった時、親の最後の意地なのか、愛する我が子だけは逃がそうと、必死で抵抗したのだ。
　もう、今までクレアが住んでいた家は戦火で焼けてしまった。今いるここが、かつて彼女達の住んでいた家のある場所だった。
　戦いが終わるまで、ここに隠れていよう。そう思っていたのだが……屋根は吹き飛び、壁が壊れて玄関の方からは丸見えになっているここでは、隠れていられるのも時間の問題だろう。
　もう、いいや。
　クレアは、生きることを諦めた。親はいない。住む場所も失った。仮に生き延びることが出来たとしても、この先、生きていくあてはない。そう思って、彼女は目を閉じた。
　その時だ。
「――おいっ！　そこに誰かいるのかっ？」
　誰かの声がして、目を開ける。
　煙のせいで、よく見えない。だが、どんどんとこちらに近づいてきていた。クレアは思わず身構える。もういいや、と思っても、反射的に体が反応した。
　やがて、そいつが姿を現した。
　自分より、少しだけ大人びている、銀髪の男の子。
　クレアは思わず小さく悲鳴を上げた。
　両手に持つ、片側だけしか刃がない、二本のナイフ。
　そしてそれ以上に、彼が自分達の敵である『人間』だということに、クレアはひどく恐怖した。
　だから、
「……怖かった、よな？　もう大丈夫だから……怯えなくていい」
　そう彼が言ったことに、クレアはとても驚いた。
　シオン・アーグレスカ。
　それが、後にクレアが一緒に暮らすことになる、男の子の名前だった。
　――数年後。
　ここは商業都市、マートス。
　南東に広がっている海を除けば、高さ十メートルほどの外壁で囲まれている都市だ。
　北に広がるのは、『鬼人』と呼ばれる、見た目に関しては額に小さな角が生えている他は、人間と大差ない種族が作り上げた、小さな村が広がっている。
　その都市から、西に広がるのは『人間』達の作り上げた王都。

王都は、以前はその『鬼人』と呼ばれた種族が創った、大都市で栄えていたのだが……あの戦争で、一夜にして滅んでしまい、今は人間が占領している。去年、城がようやく移転した。
マートスは、以前は王都だったところを、商業都市に変えたのだ。そして鬼人は、差別の対象となっている。
人間と、鬼人との間に出来た溝は、海よりも深い。
そんな中だが、シオンと、鬼人であるはずのクレアは、このマートスの兵士として働いていた。
まあ働いている、といっても、昼間は都内の見回り（と称した散歩）をしているか、門番の仕事（と称したサボり）をしているかの、どちらかなのだが……ごく稀に、忙しい時がある。基本的に、二人が番をしている門に、誰かがやってくることは少ない。それもそのはず。
そこは、鬼人達の村に最も近いところに面したところにある門だからだ。北門。こっちから入ってくれば、ほぼ間違いなく殺されると分かっていて、誰が入ってくるものか。
とは言え、命知らずもたまにいる。二人が忙しいのは、そんな時だった。しかも忙しいとは言っても、他の仕事に比べればという話で、大抵は軽くあしらうだけで鬼人は逃げる。
しかし、今日は勝手が違った。
人間と鬼人。見た目だけなら、額の角あるなしでしか判断出来ない。見た目だけ、ならば。
身体能力に目を向ければ、少しだけ鬼人は人間に勝っていた。
普段からクレアと一緒にいるとは言え、人間との身体能力の差を、シオンは今日ほど目の当たりにした日はなかった。
昼間は喧騒で賑わっているこのマートスも、真夜中の三時にもなれば流石に静かになる。
その、鬼人の村に一番近いところの門の場所を除けば。
銀髪のシオンと水色の髪のクレア。二人の他に、紫髪の女性の鬼人と数人の男の鬼人が戦っていた。
「……ふんっ」
「にゃろう……っ！」
空気を切り裂くような、全長三メートルはある斧槍（ハルバード）の一閃。
穂先が、鼻の頭を僅かに掠めたのを感じて、思わずシオンは呟く。
目の前の紫髪の女性は、クレアや自分と同じくらいの年だろうとシオンは推察したが、よもやこうも苦戦するとは思わなかった。油断していたのだ。
腰の辺りまで届いた長髪。やや日に焼けた、それでいて色気のある肌だけ見れば、とても『戦える』とは思えない。だが、こちらを射抜くような鋭い二つの眼球と、小さいながらも鋭く尖った角を見れば、恐ろしいまでの殺気を感じるには十分なはずだった。
にも関わらず、少しだけシオンが気を緩めてしまったのは、揃いも揃っておっさんのような風貌の鬼人に囲まれてやってきたためか、はたまた彼女を『美人』だと思うほどに顔が整っていたためか。
しかし、油断していたことを除いても、彼女は強い。
ただ単に、人間に対する恨みや憎しみでやってきた鬼人は、これ程までに強くはなかった。
先程から、隙を見てはクレアの方をチラチラと見ているが、それが理由だろうか。
シオンは、そんなことを思いながら、少しだけイラっとして、片手にのみ持っていたナイフを強く握る。
「お前の相手は……俺だっての！」
そう叫んで、シオンは地面を蹴る。まるで「お前のことなど眼中にない」と言わんばかりのこ

とをされては、兵士の中ではそこそこ強い部類に入る彼のプライドにも傷が付くのだろう。
　それに気づき、迎え撃つように顔面へと突かれる斧槍を、シオンは首を僅かに傾けることで躱す。
　このままいけば、伸ばしきった彼女の腕が戻る前に、シオンのナイフの一撃が決まる。だが、
「――っ」
　シオンは咄嗟に、横に飛ぶ。刹那、さっきまで彼が居た場所を、斧槍が通った。
　一回転させたのだ。伸ばした腕の、指の力だけで。
　相当な重量があるはずなのだが……と、シオンのこめかみから一筋の汗が流れ落ちる。
　間髪を入れずに、シオンは伏せる。頭上を、斧槍が通り過ぎていった。そして流れるように頭上から振り下ろされた一撃を、右腕で地面を叩き、その反動で横に飛んで避ける。
　もう一度地面を蹴って突っ込むシオンの喉元をめがけて、彼女は斧槍を振り上げた。シオンはそれも、ギリギリでバックすることによって躱す。
　が、少しだけ浮き上がった彼の足元を、彼女は見逃さない。振り上げた斧槍の軌道を変え、石突の方で彼の足を払う。グラと揺れるシオンの体。そしてそのままの勢いで、体勢を崩した彼の胴体に、斧槍を再び振り下ろした。
　僅かでも宙に浮いているシオンに、この攻撃を躱す術はない。
　万事休す。シオンがそう思った時だ。
　真っ直ぐ下ろされる斧槍の柄の下に、剣が入り込んだ。
　そしてそのまま、斧槍を上に跳ね除ける。
　距離を取る鬼人と、シオンの間に入ったのは、
「シオン、大丈夫ですかっ？」
「……げほっ。た、助かった、クレア！」
　彼女と同じ鬼人。クレアだった。
　間違いなく重いであろう斧槍を、片手で持った剣だけで弾き返すところは、流石は鬼人だ。
　紫髪の彼女とは対照的に、首が隠れるかどうかというくらいの長さの水色の髪を舞わせて、クレアは彼女をキッと睨む。
　背中から地面に落ちたシオンは、息苦しいのを堪えて立ち上がる。ついでに周りに視線を向けると、おっさん風の鬼人は全て、気絶させられていた。
「あなた、私達と同じ鬼人ね？　何故人間の味方をするの？」
　クレアが何か言う前に、紫髪の鬼人が低い声でそう聞く。
「シオンは、命の恩人ですから。私だって、全ての人間の味方などではありません」
「……そう」
　紫髪の鬼人がそう言うと、不意に音がした。そっちの方を見ると、気絶していた鬼人の一人が、目を覚ましたようだ。そして彼女を見て小さく首を横に振ると、紫髪の鬼人は溜息を吐いた。
「……撤収よ」
　そして、勢いよく斧槍を振る。
　シオンとクレアは反射的に後ろに飛び退いたが、斧槍の穂先が切りつけたのは地面。
　舞った土が目くらましになっている間に、敵の鬼人は、気絶した仲間を抱えて逃げていった。
「ちょ、待ちなさい！」
「いや、クレア。深追いするな」
　追いかけようとするクレアを、シオンは手で制す。目的は鬼人を捕まえる事ではないからだ。追っ払っただけでも、最低限の仕事はしたのである。

「……ん？」
　ふと、地面に何かが落ちているのを見つけ、シオンはそれを拾い上げる。小さな麻の袋で、中には厚紙が一枚入っているだけだった。大きさから見て、お守りか何かだろう。多分、さっきの鬼人の女性が落としたもののようだ。
「ラナシスタ・アークヴェル……」
　それが、彼女の名前だった。

　次の日。
　北門近くにある小屋。当直室として使われているそこは、シオンとクレアにとって家同然の場所だ。だって使っているのは二人だけだし。勿論シオンは自分の家は他にあるのだが、大体この当直室で寝泊まりしているので、向こうが『家』だと言われても、いまいちピンとこない。
　そんなシオンの一日は、鳥の鳴く声で目を覚ますところから始まる。
　そして大抵、クレアを正座させる。
「あのね、クレア」
「……むぅ」
「むくれても駄目だ。君のベッドはあっち」
　そう言って、シオンは窓際に置かれた、そこそこ上質なベッドを指差す。
「そんで、俺の寝床はこっち」
　次に、今自分が立っている場所に指を動かした。そこには、よれよれのブランケット。かろうじて、寝具として機能しているレベルだ。
「どう考えてもベッドの方が寝心地がいいのに、どうして毎日毎日、俺の方に潜り込んでくるんだよっ？」
「だってぇ、一人じゃ寂しいんですもん。シオンが私のベッドに潜り込んできてくれるなら、万事解決するではありませんか」
「何も解決してないっての！」
　シオンは溜息を吐く。数年前からクレアと一緒に暮らしているのだが、どういうわけか彼女には人が寝ているところに潜り込む癖があるらしい。クレアは昨日のラナシスタという鬼人に負け劣らず可愛いので、シオンにとってはかなり心臓に悪かった。
「いいかいクレア。俺も君も、もういい年なんだから、恥じらいとか貞操管理とか、もっとこう……」
「ていうか、シオン。やっぱりベッドをもう一つ買いませんか？　こっちは少し体が痛くて」
「そう思うなら、こっちに入ってくるなよ……。大体、ベッドをもう一つなんて無理だって。狭くなるんだから」
　二人暮らしでも、そこそこ広い部屋とはいえ、ベッドを二つ置くと、少し手狭になってしまう。
「そうですか？　ベッド一つくらい余裕だと思いますよ？　今のままでも、もう一人家族が増えても、十分暮らしていける広さはあると思いますが」
「年頃の男の子にそういうこと言うのやめて下さい……」
　意識しちゃうんで、とは言わずに、シオンはクレアから顔を背けた。

　結局諦めて、二人で協力して朝食の準備を始める。こんな毎日だ。
「シオン。今日はまた、都内の見回りですか？」
　朝食を食べている最中、クレアがそんなことを聞く。
「まー、そんなところだろうな。適当に回って、適当に報告して、そんで暇な門番の仕事かな？」
「もっと真面目にやりましょうよ……。本当にいいんですかね？　鬼人の私がこんな感じで仕事をしていて」
　クレアがこめかみを抑えて、やれやれといった感じで首を左右に振る。
「いつものことですが、昨日だって侵入してきた鬼人を追い払っただけですし……よく怒られませんよね、私達」
「そこはまあ、俺達の上司が『人間と鬼人の共存』に理解のある人物で助かった、ってところかな？　多少の不始末はあの人が握りつぶしてくれるし」
「今日、新しい胃薬が発売されるそうですよ？　あの人に買っていきましょう」
　こんな会話は、人前では出来ない。『人間と鬼人の共存』なんて、今の王都からしてみれば反逆もいいところだ。本来なら、昨日のような鬼人は殺しておく必要があるのだが、シオン達はこれまで、一人も殺さず見逃している。勿論、わざとだ。バレれば即、クビである。
　そんな危険を冒してまで鬼人を逃がしているのは、シオンとクレア、そして上司や数少ない仲間達が、『人間と鬼人の共存』を実現させるためだ。
　俺達は、何をしているんだろう。
　あの日の戦争で、それぞれが、ひどい虚無感、虚しさ、形容しがたい後味の悪さを感じたのだ。もう二度と、あんな戦争はしてはならない、そう思った。
　鬼人なんて、人間と比べて、少しばかり身体能力が高い程度の違いしかないのだ。迫害していい理由なんて、どこにもない。
　今のところの目標は、国王の失脚。クーデターも考えてはいるが、それはあくまでも最終手段。なるべく犠牲は少ないほうがいいからだ。何年かかるか二人にも分からないが、必ず実現させるつもりだ。
　ちなみに当然、クレアが鬼人だということは、上司や仲間達も知っている。
「さて、飯も食ったし、片付けて仕事するか！」
「ほとんどサボっているようなものですけどね」
　気合を入れるシオンに、クレアは苦笑いで呟いた。

　真面目に仕事をしているやつなら、都内の見回りというのは中々に忙しい仕事である。
　と、いうのも、鬼人達の村は土が悪くて、作物が育たない。
　だから、王都側の門や、港から、こっそりマートスに忍び込んで、食料の買わなければならないのだ。見回りの仕事は、そんな『忍び込んだ鬼人』を捕まえて、王都に引き渡すことである。鬼人と人間の外見的な違いは、角のあるなしでしか判断できず、鬼人だって馬鹿じゃないから、当然角は帽子か何かで隠しているので、割と神経を使うのだ。
　が、しかし。シオンとクレアにとっては、そんなこと知ったことではない。寧ろ、鬼人だと分かった場合は、本人にそれをこっそり教えて、隠すように注意するくらいである。敵対するのは、昨日のように、鬼人の方から襲ってきた時だけだ。
　だから二人は、いつものように、酒場のマスターのところに顔を出したり、行商に新商品はないか聞いたりと、なるべく目立たないように散歩していた。当然、クレアは額の角を帽子をかぶ

って隠している。
「そう言えばシオン。昨日何か拾ってましたけど、なんだったんですか？」
　その途中、クレアが聞いてきた。『あれ』とは、お守りのことだろうと察したシオンは、ポッケからそれを取り出す。
「これのことか？　多分、昨日のあの紫髪の鬼人が落としていったものだと思うが……」
「あー、これ」
　すると、珍しいものを見た、というように、クレアがシオンの持つ小さな麻の袋を指さした。
「中に、厚紙が入っていませんでしたか？」
「あー、そう言えば」
「やっぱり、メモリーシートですね。懐かしい。私も昔、持っていたんですけどねぇ……」
　懐かしそうに目を細めたクレアに、シオンは少しだけ間を置いてから、尋ねる。
「メモリーシート？　なんだそれ？」
「シオンは知らないんですか？　昔、流行ったと思いますが」
　そう言われて、シオンは唸る。言われてみれば、そんなものもあったような気がしたが、どんなものだったかは、イマイチ思い出せそうにない。
「ほら、あれですよ。自分の記憶を、記録しておける紙です」
「あー……なんかあったな、そんなの。楽しかった思い出とかを、後で、まるでその当時に戻ったかのように体験出来るんだっけ？」
「実際は、見てるだけですけどね。自由に動けるわけじゃありませんし、食べ物の味とか、匂いとか、物に触れた感覚とか、そんなものも記録されませんし」
「本当に、映像だけなんだな……」
「流行ったと思ったら、すぐ廃れちゃいましたしね。そんなものですよ。
　指で擦れば、シートに記録された映像を見ることが出来ますが、どうします？」
「えっ？　これって他人も見れるのか？」
　シオンの問いに、ええ、とクレアは答える。
　そう言われれば、非常に気になった、というのがシオンの本音だ。
　だが、少し長い間考えて、シオンは首を横に振った。
「止めておくよ。勝手に見るのは、気分良くないだろうし」
「ふふっ、シオンはそう言うと思ってましたよ」
　どうやら、答えが分かった上で、敢えて質問したらしい。やれやれ息を長く吐いて、シオンはそのメモリーシートの入った麻の袋をしまった。
　そして、適当な店で昼食をとってから、再び二人でブラブラしていた時だ。
「……っ、シオン。何か聞こえませんか？」
「なんだ？　どうした？」
「……こっちですね」
　そう言うと、クレアは音のしたらしい方向へと足早に進んでいく。シオンも慌てて彼女を追った。
　二人が向かった先は、人目につきにくい、店裏の薄暗い場所だった。
　ある程度広さのある場所。そこで二人が見たのは、
「何をしているんですかっ！」
「あー……なるほどね」
　ガタイのいい三人の男が、紫髪の、二人と同じくらいの年の、倒れた女性を囲んでいるとこ

ろだった。
　女性は、気絶しているのかピクリとも動かない。あちこち蹴られたり殴られたりされたのか、アザも見える。
　シオンは見た。髪の毛で隠れた額から、うっすらと小さな角をのぞかせているのを。
　もっとよく見れば、シオンは彼女が昨日戦った、ラナシスタだということに気が付いた。
「何……ってよう。見りゃ分かんだろ？」
　男のうち、リーダー格らしきやつが、下品なニヤケ顔でクレアに向かってそう言う。
「この女は鬼人だ。鬼人は危険なんだ。見かけたら始末しておかねーとだろう？　言っちまえば、害虫駆除だよ。が・い・ちゅ・う・く・じょ。がっはっは！」
　そいつに釣られて、他の男二人も笑い出す。何がおかしいのか、シオンには全く理解できなかった。
　内心で溜息を吐きながら、ちらりとシオンはクレアを見る。流石にこの仕事を何年もやっているだけあって、激昂するようなことは無かったが、男達を見るその目に光はない。
「クレア、向こうに行っとけ」
「なっ？　シオン、ですが……っ？」
「いいからいいから」
　このまま放っておくと、ボロが出そうだと判断したシオンは、取り敢えずクレアをここから追い出した。そして、ツカツカと男達の方へと詰め寄る。
「お、おう。なんだ。兄ちゃんも、やりてぇのか？」
　ややたじろぎながらも、男はニヤリと笑いながら小声でシオンにそう聞いてきた。どうやら、暴力を振るうに飽き足らず、この場で彼女の体を堪能するらしい。
「あー、そうしたいのは山々なんだが……俺って、これでも王都の兵士なんだわ」
「……は？」
　俺の言葉に、男は眉を顰める。
「ほら、知ってるだろう？　俺等ってさ、鬼人は王都に突き出さないといけないわけ。で、その検挙率が高けりゃ、出世にプラスなんだよ。ボーナスも出るし」
「あ、ああ」
「で、俺もそろそろ見回りの交代の時間でさ、とてもじゃないが、お前等が楽しみ終わるまで待ってらんねーの。つーわけで、俺の金と地位のために、その鬼人は諦めて、こっちに寄越しな」
「なっ？　そりゃねーぜ兄ちゃん！」
　慌てたように叫ぶ男に、他の二人も「そうだそうだ」と喚く。
　この反応は予想通りなので、シオンは男の胸ぐらをつかんで引き寄せ、自分の顔を近づけた。
「……あ？　なんだよ。小市民如きが、王都直属の兵士サマに逆らうわけ？　いや、あれならよ、適当な理由をつけて、お前ら全員牢獄にぶち込んでもいいんだぜぇ？　なぁ？」
　シオンはそう言って、中々に邪悪な笑みを浮かべる。
　男はしばらく口をパクパクしていたが、やがて舌打ちをすると、ブーたれている仲間を引き連れてこの場を去っていった。
「……おい、大丈夫か？」
　しばらくしてから、シオンはラナシスタに声をかける。返事はない。やはり気絶しているようだ。
　仕方ないか、と、シオンはラナシスタを担いで、クレアの元に戻る。戻ると、クレアは頭を抑えて溜息を吐いていた。どうやら、さっきの一部始終をこっそり聞いていたらしい。

「全く、あなたという人は……」
「はっはっは、権力ってのは、ああやって使うんだよ」
「胃薬、もう少し買っておいた方が良かったですかね……？」
「それよりさ、この子の角を隠すのに、何かもってないか？」
　そう言って、シオンはビリビリに破かれた布を見せた。落ちていたから、拾ってきたのだ。どうやらあの男達に破かれたらしく、とてもじゃないが角を隠すのには役に立ちそうもない。
　クレアもそのことに気がついたようで、慌てて自分の持っていた適当な布を、ラナシスタの額に巻いた。応急処置だが、ないよりはマシである。
　彼女を担いで、二人は北門に向かった。あそこからなら、安全にラナシスタを逃せる……そう思っていた。

「……う、ぅぅん？」
　ようやく北門についた時、どうやらラなしスタは目を覚ましたようで、シオンの背中でモゾモゾと動いた。
「げ、目が覚めたか？」
「……みたいですね」
　まだ頭が覚醒しきっていないらしく。しばらくは辺りをキョロキョロと見て、シオンとクレアを交互に見る。
　だが、ようやく二人が誰かということに気がついたのだろう。
「貴様達は……っ！」
　おぶっているシオンの背中を蹴って、ラナシスタは飛んで、二人から少し離れたところに着地した。
　ラナシスタは、どこからともなく短めな棒を取り出して、軽く振る。すると、棒は伸びて、昨日振り回していた斧槍に形を変えた。
「――っ！」
「クレアっ？」
　そして、ついでと言わんばかりに、石突の方で、剣を構えかけていたクレアの顎を打つ。クレアはグラっと揺れたかと思うと、そのまま地面に倒れた。
「……ったく！　こうなると思っていたよ畜生！」
　彼女が目を覚ましたら、きっと面倒になるだろうと思っていたシオン。だから、出来れば北門に置いておくまで目を覚まさないで欲しいと思っていたのだが……結局、予想通り面倒なことになり、半ばヤケクソ気味にそう叫び、ナイフを握る手に力を入れる。
　シオンの装備は、動きやすさを優先する代わりに防御力を削ぎ落としている。斧槍を一撃でもまともにもらえば、それがそのまま敗北につながるのだ。それは彼女も似たようなものなのだが。
「たったナイフ一本で、私に勝てると思うな！」
　そう叫んで、ラナシスタは斧槍を水平に一閃。シオンは一歩退って、穂先を顔面スレスレで躱す。そして、続けざまに振り下ろされた一撃を、今度は体を僅かに左に動かすことで空振りにさせ、地面すれすれで軌道を変え、足元を狙ってきたのをバク宙で避けた。
　シオンは、そのまま地面に足からは着地せず、腕立て伏せをするように伏せた。刹那、上空を刃先が通りすぎる。そして、腕の力で跳ね上がり、ラナシスタとの距離を取って、斧槍の間合いから逃げる――が、それは彼女も予測していたようだ。シオンが着地するころには、再び彼を攻

撃の間合いに入れるとこまで迫ってきていた。
「おまっ、全力で殺しにきてんな！」
「は？　当たり前でしょう？」
　すぐさま横に一閃。かろうじて、シオンは上体を倒し、斧槍の柄をナイフで僅かに叩き上げることで躱す。そして思いっきりバックすることで、返しの一撃も何とか躱した。
「あなた達は、私達の敵よ！」
「その割には、クレアは殺さなかったな」
「……っ、うるさい！」
　クレアを気絶させた時、彼女はわざわざ、斧槍の刃がついていない石突の方で攻撃していた。刃のついた穂先の方で攻撃していれば、致命傷になったはず。鬼人とはいえ、彼女にしてみれば、クレアは人間に寝返った裏切り者だ。ここには、他に人はいない。生かしておく理由はないのだが。
　シオンはその事実が、さっきから頭を離れなかった。
　ふと、シオンはあの、メモリーシートのことを思い出す。もしあれに、この疑問を解決するなにかがあるのなら……。
「……よし」
　シオンはそう呟いて、覚悟を決めた。
　左斜め上空から襲いかかってくる攻撃を、シオンはその下をくぐるようにして避ける。続く背中に向けられた一撃は、前にダッシュして、敢えて柄のところを右腕で受けた。
　だがその反動で右手が痺れ、握られていたナイフがポロっと地面に落ちる。
　それを見て勝ちを確信したような顔で、ラナシスタは斧槍を思いっきり引いた。斧槍の斧の部分で、シオンの後頭部をえぐるつもりだ。
　流石にそれを受けるわけにはいかず、シオンは右足で地面を蹴って左に躱す。それでも僅かに、斧槍が耳元を掠めた。
　そして、まだ彼女の攻撃は終わっていない。引いた反動を利用して、今度は突いてきた。そしてシオンも、同時に前にダッシュする。そして前回と同じように、シオンは首を僅かに傾けることで躱した。
　だから当然、ラナシスタも前回同様、指の力で斧槍を回転させ、シオンを仕留めるつもりだったのだが――シオンは既に、彼女の懐に入り、自分の背中をラナシスタの体にピッタリとくっつけるようにして、密着していた。
　彼はラナシスタの腕の下に自分の肩を入れており、それによって、斧槍の柄を、ラナシスタの腕とシオンの肩で挟みこんでいる。これで、指の力だけで斧槍は回せない。
　シオンはラナシスタに密着した時の反動で、彼女が少し離れた隙を見逃さず、後ろを振り返り、その勢いで左腕を振る。
　本当なら、それだけ。左手には何もないはずだ。が、
「――なっ？」
　その手には、ナイフが握られていた。
「いつから、俺のナイフが一本だけだと錯覚していた？」
　腰にぶら下がっている、予備のナイフ。さっき突きの攻撃を躱した時に、取り出したのだ。
「昔は二刀流だったんだよ！」
　片側だけしか刃がないナイフ。その、刃がないほうで、シオンはラナシスタの首元を目掛けて思いっきり振った。

ラナシスタは辛うじて、仰け反ることでその攻撃を空ぶらせる。だが、僅かに地面を踏む彼女の足に、シオンは自分の足を引っ掛け、思いっきり引っ張った。
体勢を崩したラナシスタだったが、斧槍を自身の後方に突き刺すことによって完全に倒れることだけは何とか防ぎ、逆にポールダンスのように斧槍を軸に体を一回転させることで、一瞬でシオンの背後に回る。
完全に死角をとった。このまま離れて、もう一度斧槍の間合いに持ち込めれば……そう思ったラナシスタ。だが、
シオンは、それを読んでいた。倒れそうになったラナシスタに追撃をすることなく、体を反転させていた。
バックする彼女に、シオンはひたすら食らいつく。ラナシスタの右腕を目掛けて振られたシオンの斬撃を、斧槍の柄で弾くが、その反動による姿勢の低い回し蹴りで、シオンはラナシスタの足を払う。軽くグラついた彼女に、立ち上がり際にナイフのグリップの底で顎を狙う。
だが、それは彼女にも予測されていたようで、斧槍の柄で防がれた。逆にその力で、彼女は体勢を立て直す。
刹那、シオンの膝が、ラナシスタのボディに入る。入りはやや甘かったものの、軽くえづいたラナシスタの後頭部目掛けて、シオンはナイフのグリップの底で思いっきり叩く。シオンの膝が支点となって、彼女は一回転。
人間相手なら、これで伸びていた。
が、鬼人はシオンが思う以上に、頑丈だったらしい。
一回転したラナシスタは、そのまま背中から地面に叩きつけられることはなかった。咄嗟に地面に手を伸ばし、倒立前転の要領で落ちる勢いを殺し、上手く足から着地し、そのまま距離をとるため後ろに飛んだ。その間、斧槍を離さなかったのは流石としか言い様がない。
「諦めなさい、人間！　貴様じゃ私には勝てない！」
「ああ、勝てねーな……一人じゃ」
この瞬間、シオンは自らの敗北を悟る。今からでは、距離を詰める前に斧槍の一閃を受けるだろう。そんな直感があった。
でも、
「一人じゃ勝てねーが……」
飛んだ先には、
「二人ならどうだっ？」
シオンの言葉の意味を、ラナシスタが理解するより先に、
「がっ……？」
「そこまでです」
ラナシスタは、いつの間にか覚醒していたクレアに拘束されていた。クレアはラナシスタと一緒に倒れこみ、体の自由を奪っていたのだ。
「なっ？　貴様は……っ？」
「よくやった、クレア！　そのままそいつを離すなよ？」
「ええ、分かっています！」
それを聞いて、シオンはポッケに入っている、あの麻の袋を取り出した。
途端、その持ち主は目を見開く。
「か、返せっ！　返してくれっ！」
「悪いが見せてもらうぞ！　お前の記憶を！」

シオンは麻の袋の中からメモリーシートを取り出して、親指と人差し指ではさみ、擦る。
そして、自分の意識がブラックアウトしていくのを感じた。

夜が、赤く染まっていた。
季節は冬のはずなのに、ひどく暑くて、息苦しい。なにより、辺り一帯が煙と血と生き物の焼ける臭いで充満していたのが、ラナシスタ・アークヴェルをガクガクと震えさせていた。
来月十歳の誕生日を迎える、その少女は、知る。
これが、戦争。
傍から見れば、小国同士の、さらにその中でも一部の地域の民族同士の争いごとでしかないのだが、そんなことは彼女には関係ない。
父と母は、きっと死んでしまった。敵の人間に見つかった時、親の最後の意地なのか、愛する我が子だけは逃がそうと、必死で抵抗したのだ。
もう、今までラナシスタが住んでいた家は戦火で焼けてしまった。今いるここが、かつて彼女達の住んでいた家のある場所だった。
戦いが終わるまで、ここに隠れていよう。そう思っていたのだが……屋根は吹き飛び、壁が壊れて玄関の方からは丸見えになっているここでは、隠れていられるのも時間の問題だろう。
もう、いいや。
ラナシスタは、生きることを諦めた。親はいない。住む場所も失った。仮に生き延びることが出来たとしても、この先、生きていくあてはない。そう思って、彼女は目を閉じた。
その時だ。
少し離れたところから、声が聞こえてきた。
彼女は、見る。自分と同じような年頃の女の子に、誰かに手を差し伸ばしているところを。
だがラナシスタに、手を指し伸ばしてくれる人は、誰もいなかった。
幸か不幸か、彼女は生き延びる。
そして、場面が変わる。
生き延びた彼女は、その後、鬼人の村で生活することになった。運良く、幼い彼女でも出来る仕事を斡旋してもらえたため、何とか生活することは出来ていた。
そんな彼女を、憐れむ目。彼らに、悪意はない。
ラナシスタは、独りだった。

そこで、シオンの意識が戻る。何かを考えられるまでに、少し時間がかかった。
「君、は……」
ようやく思考回路が戻ってきて、シオンはラナシスタの方に目を向ける。彼女はもう遅いと悟ったのか、ぐったりとした様子で、目を閉じていた。
あの場面。ラナシスタが見た女の子は、クレア。ならば、彼女に手を差し伸べていたのは……。
俺だ。シオンがそう気がつくのに、時間はかからなかった。
これは、クレアのもう一つの未来。シオンは知らなかった。あの近くに、もう一人、鬼人がいたことを。
もし、シオンが見つけたのが、ラナシスタだったら。きっと隣にいるのは、クレアではなくラナ

シスタで、戦っていたのはラナシスタではなく、クレアだったのかもしれない。
　そして、シオンは悟る。
「ラナシスタ、君は」
「言うな……」
「君は、羨ましかったんだな、クレアのことが……」
「言うなっていっているでしょっ？」
　今までで一番大きな声で、ラナシスタは叫んだ。
　そして、辺りが静まり返る。
「……ええ、そうよ」
　だが、やがて、彼女が観念したように、ポツリポツリと話し始めた。
「羨ましかったし、恨んだわ。どうしてこの子は助けてもらえて、私は独りなんだろうって……。たまにマートスに食料を調達しに来た時、この子の姿を見ると、いつもあなたが一緒にいて、楽しそうで、思わず殺してやろうかって思った」
「でも、出来なかった。そうだな？」
　シオンの言葉に、ラナシスタは頷く。
「馬鹿よね、私。人間なんて殺したいほど憎んでいるはずなのに、あなたと一緒にいるこの子の顔を見ていたら、もしかしたら、私にもこんな未来があったのかもって。そう思ったら、もう彼女への殺意なんてなくなった。私の手で、『幸せな私の未来』を奪うことなんて、できなくなった」
「……俺達を襲ったのは、どうしてだ？」
「さあ、なんでかしら？」
　そんなことを宣ったラナシスタ。だが、時間をおいて、口を開く。
「彼女への羨望が七割。憎しみが三割。三割分の憎しみを、ぶつけずにはいられなかったのかもね」
　それが本当のことなのか、それともただはぐらかしているだけなのかは、シオンとクレアには分からない。
　だが、それを聞いて、思わずシオンはこう言っていた。
「ラナシスタ。今から幸せになる気はないか？」
「……はぁ？」
　変なものを見るような顔をした彼女に、シオンは自分達の目的を話す。『人間と鬼人の共存』の夢を。
「……馬鹿みたい。出来るわけないじゃない」
「出来るわけない、じゃなくて、やるんだよ。まあ、確かに今のままじゃ無理かもだけど……なあ、ラナシスタ。俺達の家、あと一人は生活できるスペースがあるんだが、
　俺達と一緒に、暮らさないか？」
　そう言って、シオンは手を差し出した。
　ラナシスタの頬を、透明な液体が、ツーっと流れた。
　そして、数日後。
　朝。小屋で、今日もクレアが正座させられていた。
　今までと違うのは、正座させるのがもう一人増えたところだ。
「クレア……どうして自分のベッドで寝ないんだ。いや、まあそれはいつものことだが……」
　怒るシオンの目は、明後日の方を向いていた。

「なんで……なんで服を脱いでるんだよっ？　悪化すんな！」
「えーっと……たまたま？」
「んなわけあるかぁっ！」
「全く……朝から馬鹿みたい」
「ラナ。他人事のように言っているけど、君も人のことを言えないからな？　なんで二人揃って服を脱いで、こっちの布団に潜り込むんだ！」
「たまたまよ」
　ラナシスタの言葉に、溜息を吐くシオン。
　手狭になるのを我慢して買ったベッドは、早くも無駄になりそうだった。
「ほら、着替えろ！　朝飯食って、仕事だ仕事！」
「はーい」
「はいはい」
　ラナシスタは、今日から正式に、シオン達の仲間になった。
　今日から、三人の日々が始まる。

ファルスになりきれない礫（松本惇暉）

ファルスになりきれない礫

松本惇暉

　糸くず

繋がれている

白く青く黒く

閃光

のっぺらぼうです

それでも生き物

体温のない生き物

きっと人間よりもえらいでしょう

頭はからっぽですけどね

素晴らしい世の中です
　灯

どうにも死にそうです

苦しい　どこかに心臓を忘れたんです

ポケットのなかも　頭のなかも　本のなかも

探しました

私の心臓と肺は

ことば

みんなことばを殺します

大人も　子供も

病気が流行って

私の仲間は死にました

こんなに哀しいことは

書けません

　敗者

口笛
犬が来る
「なんてみすぼらしいんだろう！」
「そんなことはどうでもいいから餌をやれ」

僕のつぶやきを猫が嗤う
犬は腹を見せた　金玉がぶらぶらゆれる
猫は唾を吐く
「猥褻だ」
「いや神聖だ」
僕は猫に反論する
欠伸
うえから落ちてくるたらい
僕の脳味噌は液体になる
猫は逃げた
アメーバになりたい
僕は海で顔をそそぐ

　ファキング・ビューティフル

エゴイズムプラスヒュウマニズムイコール
の真空解は、
ファーック

ファシズムプラスデモグラシィイコール
の真空解は
ファーック

恋愛ごっこに耽って肌のにおいが黴に
色即是空！　ほら、男と女の営みの最中に、陽気なサヨクと陰気なウヨクがフォークダンスしてるじゃないか。

忘れる事勿れ。ファックは核兵器よりしぶといぞ。

それでも君の青白い顔に獣の笑いが戻らなかったら

北野武の映画でもいかが？
ジャンケンオアバカヤロー（身体に溜まった工場廃液は取り除かなくちゃ）

でもこれはファックのための準備運動なんだよ。

いつか土と水に帰ることを願って（諸行無常の子供が櫂に）

ファックとはアナキズムなり。
これから現れては消えてく新人たちよ
まずは自分の言葉にファックせよ。
さすれば蜘蛛の糸を吐き出す女体が現れよう。
私は母の乳を浴びて生き返る
極楽浄土などにおちるものか。
途方もない荒野のうえで
愉楽を求めてバンサイ！

案山子　2016年夏号

http://p.booklog.jp/book/108065

著者：新潟大学文芸部
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/sindaibungei/profile

今回の執筆者
文部蘭　白杏
三ツ葉葵　新沢神菜　白玉楼　十文字
chima　荒月　哲　陸也　古井龍　文音憂　加々美翔
文月遼、　幼夏　高天美月　諸木夕
Puney Loran Seapon　松本惇暉

製本版発行：2016年6月29日
電子書籍版発行：2016年7月3日

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/108065

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/108065

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ